

仙台市文化財調査報告書第510集

富 沢 遺 跡

— 第154次発掘調査報告書 —

2023年 10 月

仙 台 市 教 育 委 員 会

序 文

仙台市の文化財保護行政に対しまして、日ごろからご理解、ご協力を賜り感謝申し上げます。

市内には、旧石器時代から近世にいたるまで数多くの埋蔵文化財が残されておりま
す。本市教育委員会といたしましては、先人たちの残してきた貴重な文化遺産を保護し、
保存・活用を図りながら、次の世代に引き継いでいくことは、仙台の住みよい街づくりに
欠かせない大切なことと考えております。

本報告書は仙台市立富沢中学校の校舎増築工事に伴い、令和4年度に実施しました富
沢遺跡第154次発掘調査成果をまとめたものです。

富沢遺跡は、仙台市南東部の太白区富沢・長町南・泉崎・鹿野等に広がる、総面積約
90haに及ぶ広大な遺跡です。この地域は、昭和50年代の土地区画整理やその後の仙台
市営地下鉄南北線の開通によって仙台市南部の拠点となっています。

これまでの富沢遺跡の調査では、旧石器時代から近世までの様々な人々の活動の痕跡
が残されていることが明らかになっています。特に第30次調査では、約二万年後の後期
旧石器時代の焚火痕等が発見され、調査当時の姿で遺構を保存し、現地で展示・公開を
行う「仙台市富沢遺跡保存館―地底の森ミュージアム―」の建設へと当初の計画の変更
がはかられました。当施設は、平成8年の開館以来、当時の人々の生活をよみがえらせ
る展示と、様々な普及活動を通して、多くの市民の皆様が親しまれています。

今回の調査では各時代の地層から遺構が見つかり、古墳時代と弥生時代の水田跡のほ
か河川跡や平安時代の竪穴遺構などが発見されました。

本報告書が学術研究はもとより、市民の皆様にも広く活用され、文化財に対するご理
解と保護の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び調査報告書の刊行にあたり、多くの方々のご協力、
ご助言をいただきましたことを深く感謝申し上げます、刊行の序といたします。

令和5年10月

仙台市教育委員会
教育長 福田 洋之

例 言

1. 本書は、学校校舎増築工事に伴い仙台市教育委員会が実施した、富沢遺跡第154次発掘調査についての調査成果を収録したものである。
2. 発掘調査及び本書の作成は、発掘調査支援業務として仙台市教育委員会が主体となり、株式会社シン技術コンサルが支援した。
3. 本書の作成は、仙台市教育委員会生涯学習部文化財課調査指導係 庄子裕美、工藤信一郎の監理の下、遺物整理から本書の編集に至るまでの作業は、株式会社シン技術コンサルが担当した。
4. 本書の執筆は、第1章から第3章を庄子、第4章を柳澤 楓(仙台市教育委員会仙台城史跡調査室)、第5章を庄子・石川博行(株式会社シン技術コンサル)・桑宮慶一(同)、第7章第1・2節を工藤、同章第3～5節を庄子が担当した。また、遺物写真撮影は嶋田圭吾(同)、編集は石川が担当し、大和尚子(同)の協力を得た。
5. 第6章の執筆は、株式会社加速器分析研究所に依頼した。
6. 墨書土器の文字判読は、国立歴史民俗博物館の三上善孝教授にご教示を賜った。また、大戸窯産須恵器の鑑定は、宮城県多賀城跡調査研究所の村田晃一氏にご教示を賜った。
7. 調査・整理に関する全ての資料は、仙台市教育委員会が保管している。
8. 発掘調査及び報告書作成にあたっては、下記の方々にご配慮・ご協力を賜った。記して感謝の意を表する次第である。(敬称略・順不同)。

仙台市立富沢中学校、主濱光朗

凡 例

1. 遺構図中の座標値は、世界測地X系(測地成果2011)を基準としている。図中及び本文記載の方位北は全て座標北を基準とした。
2. 本書中の土色の記載には、『新版 標準土色帖』2005年度版(農林水産省農林水産技術会議事務局監修)を使用した。
3. 断面図中の数値は、海拔高度(T・P)で示した。
4. 調査において検出された遺構については以下の遺構記号を使用し、遺構ごとに番号を付した。

SI：竪穴遺構 SD：溝跡 SK：土坑 Pit：ピット SR：河川跡

5. 層位名は基本層をローマ数字「I・II・III…」とし、細分している場合は「IVa」のようにローマ数字の後にアルファベットの小文字を付して表した。本文中では細分している基本層であっても、総称としてローマ数字の層位のみで表しているところがある。遺構内堆積土の層位は算用数字「1・2・3…」で表し、細分した場合は「1a」のようにアルファベットを付した。
6. 遺構図に使用したスクリーントーンは個別に凡例を図中に示した。
7. 出土遺物の登録には以下の遺物記号を使用し、種別ごとにアラビア数字を付した。ただし、石器については分類にあたりKのあとに小文字アルファベットを付し、その分類種別を使用した。

A：縄文土器 B：弥生土器 C：土師器 D：ロクロ土師器 E：須恵器

Ka：剥片石器 Kc：礫石器 P：土製品

8. 遺物実測図の縮尺は1/3を基本とし、剥片石器・土製品のみ2/3とした。全ての図中にスケールを付した。
9. 土器類の器種・部位呼称、計測位置については、「西台畑遺跡第1・2次調査」(仙台市教育委員会2010)に準じた。
10. 石器・石製品の実測における計測位置は、「西台畑遺跡第1・2次調査」(前掲)に準じた。
11. 土器の実測図に使用したスクリーントーンは、以下の通りである。これ以外のトーンについては、個別に凡例を図中に付した。



12. 石器・石製品の実測図に使用したスクリーントーンは、以下の通りである。



13. 遺構・遺物の観察表内における()付きの計測値は、土器類の各径については推定値、そのほかについては現存値を示した。
14. 掲載した遺物写真の縮尺は、遺物実測図に準じた。
15. 本文中の「灰白色火山灰」(庄子・山田1980)は、これまでの仙台市域の調査報告や東北北部の研究から、「十和田a火山灰(To-a)」と考えられており、その降下年代は西暦915年と推定されている。

庄子貞雄・山田一郎 1980 「宮城県北部に分布する灰白色火山灰について」

『多賀城跡一昭和54年度発掘調査概報』宮城県多賀城跡調査研究所

早田勉 2000

『第5章 自然科学分析 第1節 沼向遺跡、中野高柳遺跡におけるテフラ分析』『沼向遺跡第1～3次調査』
仙台市文化財調査報告書第241集

小口雅史 2003

『古代北東北の広域テフラをめぐる諸問題—十和田aと白頭山(長白山)を中心に』
『日本律令制の展開』吉川弘文館

目 次

第1章	調査に至る経過と調査要項	1
第1節	調査事由	1
第2節	調査要項	1
第2章	遺跡の位置と環境	2
第1節	地理的環境	2
第2節	歴史的環境	2
第3章	調査の方法と概要	6
第1節	調査方法と調査区の設定	6
第2節	調査概要	6
第3節	普及活動	8
第4章	基本層序	9
第5章	検出遺構と出土遺物	10
第1節	V層上面検出遺構	10
第2節	VIb層上面検出遺構	29
第3節	IX層上面検出遺構	50
第4節	X層上面検出遺構	53
第5節	XI層上面検出遺構	57
第6節	XII層上面検出遺構	62
第7節	1区の調査	64
第8節	3区の調査	64
第6章	自然科学分析	66
第1節	富沢遺跡(第154次調査)における放射性炭素年代(AMS測定)	66
第2節	富沢遺跡(第154次調査)で出土した炭化材の樹種	68
第7章	総括	70
第1節	24次調査区との基本層序の関係	70
第2節	河川跡について	70
第3節	富沢遺跡と山口遺跡から出土した墨書土器	73
第4節	検出された水田跡について	76
第5節	まとめ	78

挿 図 目 次

第1図	名取川下流域の微地形分類図	3	第6図	職場体験作業風景	8
第2図	富沢遺跡と周辺の遺跡分布図	4	第7図	基本層序模式図	9
第3図	富沢遺跡全体図	5	第8図	調査作業風景	10
第4図	富沢遺跡154次調査区位置図	7	第9図	基本層序	11・12
第5図	グリッド配置図	7	第10図	V層上面検出遺構配置図	13・14

第11図	SI1 竪穴遺構平面図・断面図	15
第12図	SI1 竪穴遺構出土遺物	16
第13図	SD1 ～ 3 溝跡平面図・断面図	18
第14図	焼土遺構3、SK1 ～ 5・10・14 土坑 平面図・断面図	20
第15図	ビット平面図・断面図(1)	22
第16図	ビット平面図・断面図(2)	23
第17図	Pit1・67 出土遺物	25
第18図	SR1 河川跡平面図	26
第19図	SR1・2 河川跡断面図	27
第20図	SR1 河川跡出土遺物	28
第21図	V層出土遺物	30
第22図	VII b層上面検出遺構配置図	31
第23図	VII b層水田跡平面図	33
第24図	VII b層水田跡、畦畔、水口エレベーション図	34
第25図	VII b層水田跡出土遺物	35
第26図	SD4 ～ 8 溝跡平面図・断面図	35
第27図	SK6 ～ 9・15 土坑平面図・断面図	37
第28図	ビット平面図・断面図	38
第29図	SR2 河川跡平面図	40
第30図	SR2 河川跡断面図	41
第31図	SR2 河川跡の年代測定試料採取位置図 及び河川跡内の堆積状況	45

第32図	SR2 河川跡出土遺物(1)	46
第33図	SR2 河川跡出土遺物(2)	47
第34図	SR2 河川跡出土遺物(3)	48
第35図	SR2 河川跡出土遺物(4)	49
第36図	IX層上面検出遺構配置図	51
第37図	SD10 溝跡、ビット平面図・断面図	52
第38図	X層上面検出遺構配置図	54
第39図	X層水田跡平面図	55
第40図	X層水田跡、畦畔エレベーション図	56
第41図	X層水田跡出土遺物	57
第42図	XI層上面検出遺構配置図	58
第43図	SK11 ～ 13・16 土坑平面図・断面図	59
第44図	ビット平面図・断面図	60
第45図	XII c層上面検出遺構配置図	63
第46図	ビット平面図・断面図、XII c層出土遺物	64
第47図	3区遺構配置図及び調査区断面図	65
第48図	24次・154次調査基本層序柱状模式図	70
第49図	富沢遺跡・山口遺跡調査区位置図	71
第50図	治水地形分類図	72
第51図	富沢遺跡・山口遺跡墨書土器集成図	74
第52図	富沢遺跡・山口遺跡墨書土器出土地点	75
第53図	VII b層・X層水田跡標高図	77

挿表目次

第1表	水田区画(VII b層水田跡)計測表	32
第2表	畦畔(VII b層水田跡)計測表	32
第3表	水田区画(X層水田跡)計測表	53

第4表	畦畔(X層水田跡)計測表	53
第5表	富沢遺跡・山口遺跡墨書土器一覧表	73

写真図版目次

写真図版 1	遺跡遠景・調査区全景(X層水田跡)	83
写真図版 2	基本層序(1)	84
写真図版 3	基本層序(2)	85
写真図版 4	2区V層	86
写真図版 5	2区V層SI1 竪穴遺構	87
写真図版 6	2区V層SD溝跡・SK土坑・ビット	88
写真図版 7	1区・2区V層SR1 河川跡	89
写真図版 8	2区VII b層水田跡(1)	90
写真図版 9	2区VII b層水田跡(2)	91
写真図版 10	2区VII b層水田跡(3)	92
写真図版 11	2区VII b層SD溝跡・SK土坑・ビット	93
写真図版 12	2区VII b層SR2 河川跡(1)	94
写真図版 13	2区VII b層SR2 河川跡(2)	95

写真図版 14	2区IX層	96
写真図版 15	2区X層水田跡(1)	97
写真図版 16	2区X層水田跡(2)	98
写真図版 17	2区X層水田跡(3)	99
写真図版 18	2区X層水田跡(4)	100
写真図版 19	2区XI層	101
写真図版 20	1区・2区XII c層・3区	102
写真図版 21	SI1 竪穴遺構、Pit1・67 出土遺物	103
写真図版 22	SR1 河川跡、V層出土遺物	104
写真図版 23	VII b層水田跡、SR2 河川跡(1) 出土遺物	105
写真図版 24	SR2 河川跡(2) 出土遺物	106
写真図版 25	SR2 河川跡(3)、IX層、X層水田跡、 XII c層出土遺物	107

第1章 調査に至る経過と調査要項

第1節 調査事由

富沢遺跡は仙台市の南東部、太白区富沢・長町南・泉崎・長町・鹿野等に位置し、水田跡を中心とする総面積約90haに及ぶ広大な複合遺跡である。富沢遺跡が所在する太白区富沢地区は水田や畑が広がる地域であったが、昭和62年(1987)の地下鉄南北線の開業以降、交通網の整備が進み、土地区画整理事業により盛土造成が行われ、遺跡地内の大部分が宅地化している。

昭和57年(1982)の地下鉄南北線建設工事に伴う試掘調査で水田跡が発見されて以降、富沢遺跡では現在(令和5年7月15日現在)まで161回を超える発掘調査が継続的に行われており、弥生時代から近世に至る水田跡を重層的に検出している。また弥生時代の水田跡の下層でも、縄文時代の遺構と遺物が見つかったりしている箇所もある。昭和61年(1986)に行われた24次調査は、富沢地区の急激な都市化の進行に伴い予想される生徒数の増加に対応するために計画された富沢中学校建設工事に伴い実施された。この場所は、富沢遺跡の西南部隅にあるが、縄文時代の遺構と遺物、弥生時代から中近世に至る6時期の水田跡などが確認された。

富沢遺跡154次発掘調査は、仙台市立富沢中学校校舎増築工事に伴う発掘調査である。富沢中学校では生徒数の増加による、校舎の増築工事が計画されたことにより、仙台市教育委員会総務企画部学校施設課より令和3年12月3日付、教総施第2327号で「埋蔵文化財発掘の通知について」(令和3年12月20日付教生文第103-62号により県通知を伝達)が提出され、この通知に基づき本発掘調査を実施した。

第2節 調査要項

遺跡名：富沢遺跡(宮城県遺跡登録番号 01369 仙台市文化財登録番号C-301)

所在地：宮城県仙台市太白区富沢2丁目201

調査原因：仙台市立富沢中学校校舎増築工事

(1) 調査体制

令和4年度

調査主体：仙台市教育委員会

主任調査員：仙台市教育委員会生涯学習部文化財課 主事 柳澤楓 専門員 工藤信一郎

調査員：株式会社シン技術コンサル 石川博行

調査補助員：株式会社シン技術コンサル 桑宮慶一

小川長導(令和4年11月15日～令和4年12月2日)

調査期間：野外調査 令和4年6月1日～令和5年1月19日(1・2区) 令和5年3月20日(3区)

整理作業 令和5年1月20日～3月24日

調査面積：783.53㎡

1区(部室棟)：81.40㎡ 2区(校舎)：583.59㎡ 3区(渡り廊下)：118.54㎡

(2) 調査報告書作成体制

令和5年度

調査主体：仙台市教育委員会

主任調査員：仙台市教育委員会生涯学習部文化財課 主事 庄子裕美 柳澤楓 会計年度任用職員 工藤信一郎

調査員：株式会社シン技術コンサル 石川博行

調査補助員：株式会社シン技術コンサル 桑宮慶一

整理期間：令和5年5月8日～令和5年10月31日

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

富沢遺跡は、仙台市南東部の仙台市太白区富沢・長町南・泉崎・鹿野地内に所在し、約90haに広がる仙台市内でも広大な遺跡である。富沢遺跡の北西側では青葉山丘陵が張り出し、南を名取川が、北東を広瀬川が流れ、その先で合流している。これらの丘陵と河川で囲まれた三角形の低地は郡山低地と呼ばれており、富沢遺跡は郡山低地の西部に位置する。郡山低地の西部は名取川や沢川の川沿いに自然堤防があるが、約2km四方にわたって低湿地が広がっている。中でもその北半部は泥炭が発達する低湿地になっており、富沢遺跡は丘陵地と自然堤防で囲まれた後背湿地でも、泥炭が発達している低地に立地している。青葉山丘陵の金洗沢、二ツ沢の支流に近い部分は泥炭集積の程度が弱く、シルトや砂質の堆積物が多く確認されている。昭和50年代の区画整理事業に伴い1m～2mの盛土がされており、区画整理以前の旧地形は、北西から南東方向に緩やかに傾斜する低湿地で標高は約9m～16mである。

第2節 歴史的環境

旧石器時代

富沢遺跡30次調査では、後期旧石器時代の森林跡と焚火跡が見つかった。この焚火跡の周辺では石器111点が出土しており、石器の中には接合資料も含まれていることから、焚火跡周辺で石器製作が行われたことが分かっている。また、森林跡ではトウヒ属やカラマツ属など針葉樹の植物化石のほか昆虫化石や動物のフンが見つかり、最終氷期には亜高山帯針葉樹林で構成された森林があったことが分かっている。針葉樹の森林跡はこれまでの調査で30次調査のほか、88次や126次などで見つかり、遺跡の北西部に広がっていることが分かっている。

30次調査は、後期旧石器時代の人類の活動の痕跡とそれを取り巻く自然環境が復元できる貴重な成果であり、「仙台市富沢遺跡保存館-地底の森ミュージアム-」として整備され、発見された遺構の保存と活用が図られている。

縄文時代

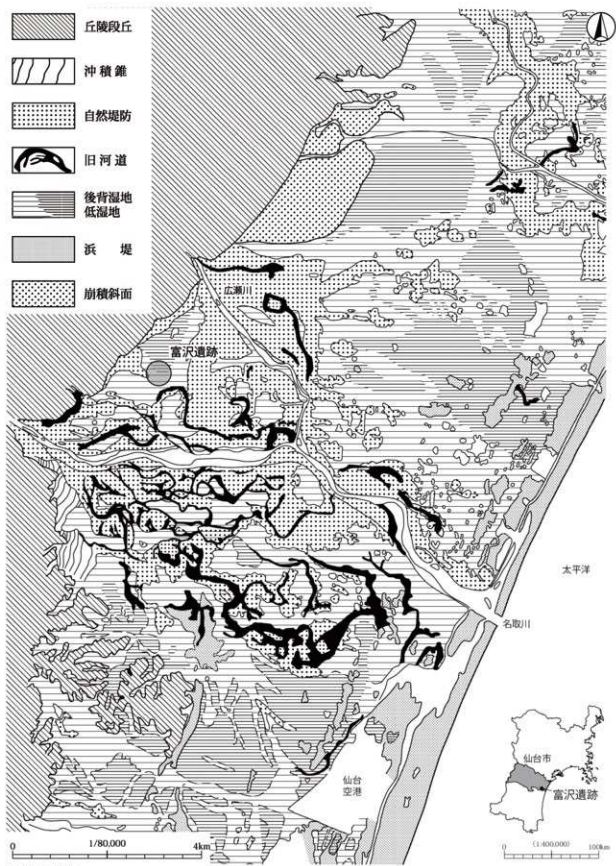
縄文時代の遺跡は名取川と沢川によって形成された自然堤防上で見つかり、最も古い生活痕跡は下ノ内浦遺跡で早期前葉の竪穴住居跡や押型土器が確認されている。下ノ内遺跡では中期末葉の複式炬を有する竪穴住居跡などが見つかり、後期になると沢川周辺の遺跡では遺構や遺物が多く見られるようになり、中には墓域や祭祀関連の遺構も確認されている。下ノ内浦遺跡では墓域が確認されており、配石遺構と土坑墓が見つかり、伊古田遺跡では後期中葉の遺物包含層から全長41.4cmのほぼ全身形状が明らか土偶が出土しており、仙台市有形文化財に指定されている。富沢遺跡でも早期の遺物包含層や晩期の遺物が出土している。

弥生時代

弥生時代になると沢川や名取川の自然堤防沿いに立地する遺跡が増加する傾向がみられ、このことは水田耕作に適した低地に集落が形成された結果といえる。下ノ内浦遺跡では後期の土坑墓や土器棺墓が検出され、墓域の存在が確認されている。土坑墓からは石廂丁と大型蛤刃石斧が出土しており副葬品と考えられる。富沢遺跡では中期中葉以前から後期まで8時期の水田跡が見つかり、富沢遺跡では水田跡であるため遺物の出土量は少ないが、石廂丁や大型板状石器、鎌などの農具類が出土している。また富沢遺跡の南西側にある山口遺跡では後期の水田跡が見つかり、

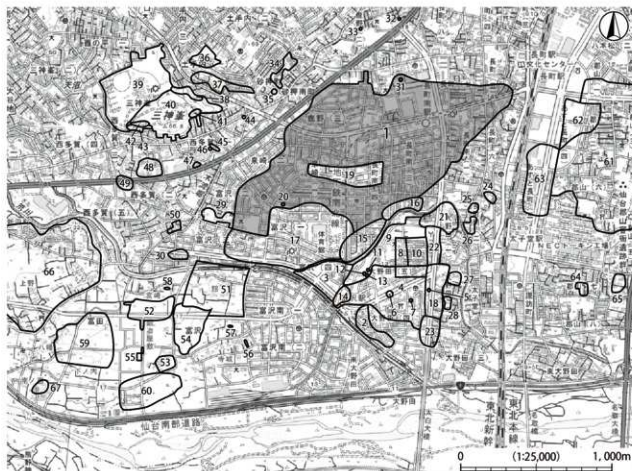
古墳時代

富沢地区内では前期・中期・終末期の集落跡が確認されており、前期は六反田遺跡・伊古田遺跡で、前期・中期



※参照(巻本:1981)
 ◎◎は富沢遺跡とその周辺を含む位置である(仙台市教育委員会「富沢遺跡第157次発掘調査報告書第1 四ノ取川下流域の微地形分類図」を改編・使用した)

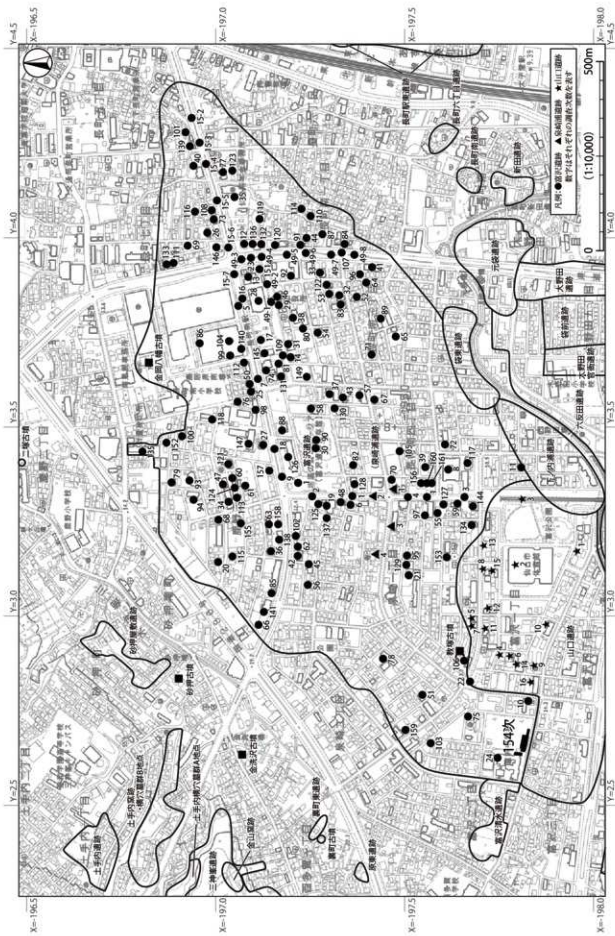
第1図 名取川下流域の微地形分類図



国土地理院発行地形図「仙台南西部」1/25,000程度 令和2年発行、「仙台東南部」1/25,000程度 平成30年発行を複製・使用した
 参考：遺跡地図(S=1/500) 仙台市HP 郡市計画情報インターネット提供サービス

No.	遺跡名	立地	種別	時代	No.	遺跡名	立地	種別	時代
1	宮古遺跡	集落遺跡	集落跡・水田跡・散布地	旧石器~近世	36	十子内遺跡	丘陵	集落跡・生産遺跡	縄文~古墳
2	伊古田川遺跡	自然発露	段丘跡	古墳~平安	37	十子内遺跡	丘陵斜面	竊穴・縄文・古墳	古墳~奈良
3	下ノ内遺跡	自然発露	集落跡・竊穴	縄文(中~晩)~中世	38	十子内堀内遺跡	丘陵斜面	竊穴	古墳
4	大野山古墳群	自然発露	古墳・集落跡	縄文~中世	39	十子内堀内遺跡	丘陵	集落跡	平安
5	上ノ内遺跡	自然発露	古墳	古墳	40	神事遺跡	段丘	集落跡	縄文
6	春日社遺跡	自然発露	古墳	古墳	41	仙山遺跡	段丘	竊穴	古墳
7	鳥居塚遺跡	自然発露	古墳	古墳	42	神事古墳群	段丘	古墳	古墳
8	大野山古墳群	自然発露	古墳群	古墳~奈良	43	宮古遺跡	丘陵	竊穴	古墳~平安
9	大石田遺跡	自然発露	集落跡	縄文(中~晩)~近世	44	金谷沢古墳	丘陵	古墳	古墳
10	泉本遺跡	自然発露	集落跡	縄文~平安	45	泉野集落跡	丘陵	集落跡	平安
11	反田山遺跡	自然発露	古墳	古墳	46	泉野古墳	丘陵	古墳	古墳
12	反田山古墳群	自然発露	古墳群	古墳	47	泉野遺跡	段丘	古墳	古墳
13	新田志那遺跡	自然発露	古墳	奈良~平安	48	泉野遺跡	段丘	古墳	古墳
14	伊古田遺跡	自然発露	集落跡	縄文~平安	49	泉野遺跡	段丘	古墳	古墳
15	下ノ内遺跡	自然発露	集落跡・竊穴・水田跡	縄文(早~前・晩)~中世	50	宮古遺跡	丘陵	竊穴	古墳
16	泉本遺跡	自然発露	古墳	奈良~平安	51	宮古遺跡	丘陵	古墳	古墳
17	山崎遺跡	自然発露	集落跡・水田跡・散布地	縄文~平安	52	宮古遺跡	丘陵	古墳	古墳
18	上ノ内遺跡	自然発露	集落跡・竊穴	縄文(中~晩)~中世	53	宮古遺跡	丘陵	古墳	古墳
19	泉本遺跡	自然発露	集落跡・水田跡・竊穴	縄文(晩)~奈良~古墳	54	宮古遺跡	丘陵	古墳	古墳
20	泉本遺跡	自然発露	集落跡・水田跡	縄文(晩)~奈良~古墳	55	宮古遺跡	丘陵	古墳	古墳
21	泉本遺跡	自然発露	集落跡・水田跡	縄文(晩)~奈良~古墳	56	宮古遺跡	丘陵	古墳	古墳
22	泉本遺跡	自然発露	集落跡・水田跡	縄文(晩)~奈良~古墳	57	宮古遺跡	丘陵	古墳	古墳
23	泉本遺跡	自然発露	集落跡・水田跡	縄文(晩)~奈良~古墳	58	宮古遺跡	丘陵	古墳	古墳
24	泉本遺跡	自然発露	集落跡・水田跡	縄文(晩)~奈良~古墳	59	宮古遺跡	丘陵	古墳	古墳
25	泉本遺跡	自然発露	集落跡・水田跡	縄文(晩)~奈良~古墳	60	宮古遺跡	丘陵	古墳	古墳
26	泉本遺跡	自然発露	集落跡・水田跡	縄文(晩)~奈良~古墳	61	宮古遺跡	丘陵	古墳	古墳
27	泉本遺跡	自然発露	集落跡・水田跡	縄文(晩)~奈良~古墳	62	宮古遺跡	丘陵	古墳	古墳
28	泉本遺跡	自然発露	集落跡・水田跡	縄文(晩)~奈良~古墳	63	宮古遺跡	丘陵	古墳	古墳
29	泉本遺跡	自然発露	集落跡・水田跡	縄文(晩)~奈良~古墳	64	宮古遺跡	丘陵	古墳	古墳
30	泉本遺跡	自然発露	集落跡・水田跡	縄文(晩)~奈良~古墳	65	宮古遺跡	丘陵	古墳	古墳
31	泉本遺跡	自然発露	集落跡・水田跡	縄文(晩)~奈良~古墳	66	宮古遺跡	丘陵	古墳	古墳
32	泉本遺跡	自然発露	集落跡・水田跡	縄文(晩)~奈良~古墳	67	宮古遺跡	丘陵	古墳	古墳

第2図 富沢遺跡と周辺の遺跡分布図



第 3 圖 雷次道路全圖

台北市都市計畫基本(高)案(1:10,000)附圖 台北20年(先行、前)都市計畫委員會「雷次道路」157次公開發議報告書 第 3 圖 雷次道路全圖(全圖)一使用土地

は下ノ内遺跡・土手内遺跡で、終末期は六反田遺跡・下ノ内遺跡・王ノ壇遺跡で竪穴住居跡が見つかっており、継続的に集落が営まれていたことが判明している。郡山低地の東半部にある郡山遺跡は、7世紀後半から8世紀初頭にかけて機能していた官衙で、7世紀末から8世紀初頭のⅡ期官衙は多賀城以前の陸奥国府と考えられている。青葉山丘陵の緑辺部では5世紀代から6世紀前半にかけて一塚古墳や裏町古墳が、荒川南岸には5世紀後半から6世紀にかけて春日社古墳や五反田古墳等を含む大野田古墳群が築造されている。特に春日社古墳では第2主体部から革盾と鉄矛、鉄鍬の副葬品が出土している。古墳時代の終末期の7世紀になると土手内横穴墓や愛宕山横穴墓、大年寺山横穴墓など丘陵部の緑辺部の斜面を利用し、横穴墓が築造される。

奈良・平安時代

荒川沿いの自然堤防上に立地する六反田遺跡、山口遺跡、下ノ内遺跡、伊古田遺跡、下ノ内浦遺跡、元袋遺跡、大野田遺跡、王ノ壇遺跡では奈良時代から平安時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡が多数検出され、集落が営まれていたことが分かっている。これらの遺跡では古墳時代の竪穴住居跡も確認されており、古墳時代から継続的に居住域として利用されていたと考えられている。六反田遺跡や大野田古墳群等荒川の南岸では畑の耕作痕である小溝状遺構群が広範囲で確認されており、生産域が広がっていたことが分かっている。荒川の北岸の富沢遺跡と山口遺跡では条里制による真北方向の畦畔を基準とした平安時代の水田跡が確認されている。

中世以降

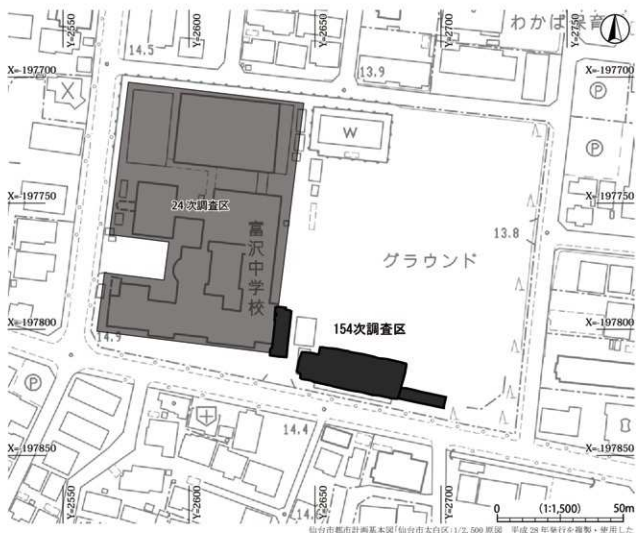
王ノ壇遺跡では12世紀後半から14世紀前半まで存続していた屋敷跡と、南西から北東側に延びる側溝を伴う幹線道路跡が確認されている。荒川の南岸の自然堤防上に立地する富沢館跡では土塁と堀で構成された館跡が確認されている。富沢遺跡では13～17世紀初頭と考えられる水田跡が確認されている。また富沢遺跡の東部にある77次調査では貯蔵施設と考えられる竪穴遺構が確認されており、烏帽子とみられる漆製品や「三斗三升」と書かれた木簡が出土している。

第3章 調査の方法と概要

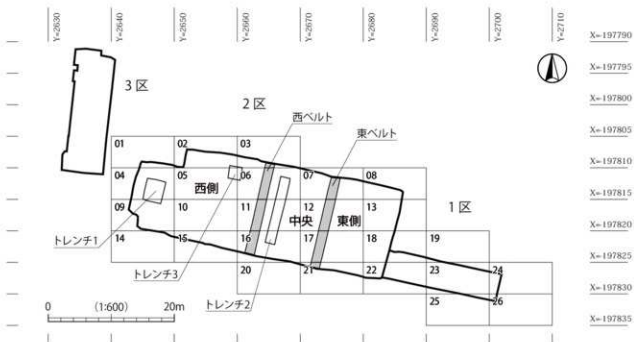
第1節 調査方法と調査区の設定

今回の調査は文化財課職員が常駐する発掘調査支援業務として実施した。調査対象範囲は、増築される部室棟(81.40㎡)と校舎(583.59㎡)、渡り廊下(118.54㎡)の3箇所である。東から調査区を1区(部室棟)、2区(校舎)、3区(渡り廊下)とし、トータルステーションを用いて調査区を設定した。1区及び2区には5m×10mを単位として調査区北西隅を01とし南東隅まで26のグリッド番号を付した。なお本文中で遺構の所在位置を示す場合には、このグリッドを使用している(第5図)。

中学校敷地内での調査のため、外周フェンス設置など調査地内の安全対策など生徒の登下校時の事故防止を念頭に環境整備を整えた後、重機(0.7m³バックホー)を用いて盛土を除去した。調査区の外周には土層観察及び排水用の側溝を掘削し、調査区壁面を観察しながら水田跡やその他の遺構の観察を行った。遺構確認は人力で行い、遺構の調査には土層観察用ベルトを設定し遺物に細心の注意を払いながら掘り下げを行った。遺構の記録は平面図・断面図ともにトータルステーションを用いて図化作業を行い、写真測量も併用した。記録写真は35mmモノクロフィルム・カラーリバーサルフィルム、デジタル一眼レフカメラで撮影し、水田跡の全景写真等にはドローンを用いた。



第4図 富沢遺跡154次調査区位置図



第5図 グリッド配置図

第2節 調査概要

(1) 野外調査

環境整備終了後、令和4年6月1日から重機掘削を開始した。当初の工程では2区(校舎)から調査を開始し、9月から1区(部室棟)を、3区(渡り廊下)は生徒が校舎に入る主要な通路にあるため、人の出入りが少ない夏季休業期間に調査を実施する予定であった。しかし、3区の調査区内に機能中の埋設管が存在していたため、管の切り直し工事終了後に行うことになった。

2区の盛土掘削の際には盛土中に廃棄物が多く混入しており、また深さ2.1mの大きな擾乱があった。

今回の調査地は現校舎(24次調査区側)より約0.7m低く、24次調査で確認された基本層Ⅰ～Ⅲ層(中世から近世)に相当する層はすでに削平されており、基本層Ⅳ層が僅かに残存していた。24次調査の基本層Ⅴ層に相当する層の上面で遺構確認作業を行い、竪穴遺構と溝跡、河川跡などを確認した。以下、人力で掘り下げながら基本層Ⅶ・Ⅸ・Ⅹ・Ⅺ・Ⅻ層で遺構確認作業を行い、基本層Ⅶ・Ⅹ層上面では水田跡を検出した。Ⅻc層の調査終了後、2区西側に2箇所、2区中央に1箇所、計3箇所のトレンチを設定し下層調査を行った。2区の調査を進めつつ、9月から1区の調査を開始した。1区では2区のⅤ層上面で検出した河川跡の延長部分を確認し、調査・記録を行った。1・2区は令和5年1月19日に調査を終了し、1月31日までに撤収作業を終了した。

3区は令和5年3月20日に立会い調査を実施した。調査区内東部は遺構面が削平されており、西部のみの調査となった。基本層Ⅴ層上面で遺構確認作業を行い、2区で確認したものと別の河川跡と溝跡を検出した。平面図・断面図の作製及び写真撮影を行い、同日中に調査を終了した。

(2) 調査報告書作成作業

調査報告書作成のための整理作業は令和5年1月20日～3月24日、5月8日～10月31日までの期間、仙台市太白区中田に所在する株式会社シン技術コンサル東北支店で行った。出土遺物の基礎整理(水洗・注記・接合)、登録、実測図、トレース図作成、遺構原図の測量データ整理・編集、遺構図版・遺物図版・写真図版の作成・編集、原稿執筆、報告書の編集、写真整理などを行った。また、黒書土器は書かれている文字の判別のため赤外線カメラを用いて撮影した。整理作業中は仙台市職員と株式会社シン技術コンサルの職員が必要に応じて協議と作業内容の確認及び実測図(トレース)、各種図版等の点検を行っている。

第3節 普及活動

仙台市では仙台版キャリア教育として「仙台自分づくり教育」を推進しており、その1つとして市内の中学生が様々な職場で「職場体験活動」を行っている。富沢遺跡154次調査の調査地点は仙台市立富沢中学校の敷地内にあり、本調査の野外作業で富沢中学校の職場体験を受け入れている。11月15日から17日の3日間の職場体験のうち、16日に富沢中学校2年生6人が職場体験を行っている。職場体験参加の中学生は仙台市文化財課の担当職員から作業上の注意や出土した遺物の説明を受けた後、河川跡の掘り下げ作業を行った。



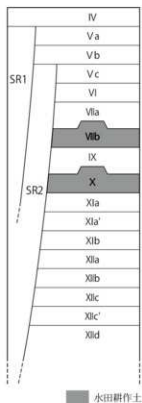
河川跡の掘り下げ作業

第6図 職場体験作業風景

第4章 基本層序

今回の調査では、盛土層(45cm～145cm)の下に、基本層を大別で8層、細別で17層確認した。24次調査では、大別で13層確認されているが、154次調査区内では、Ⅰ～Ⅲ層(近世以降の層)は、削平により残存しておらず、Ⅷ層(洪水による堆積層)・XⅢ層(礫層)についても確認できなかった。層の大別については、24次調査に倣い分層した。

- Ⅳ層 : 10YR3/3暗褐色シルトを主体とする。部分的にグライ化しており層中には炭化物を少量に含む。層厚は1cm～24cmである。
- V a層 : 10YR4/3にぶい黄褐色シルトを主体とする。2区の北壁で確認した。部分的にグライ化しており、炭化物を少量に含む。上層との境に酸化鉄が集積する。24次調査において、基本層V層は2層に細分されており、V a層下部からV b層との境に灰白色火山灰の小ブロックを含んでいると報告されている。154次調査区内では基本層内に灰白色火山灰を確認していないため、24次調査のV b層相当と考えられる。層厚は1cm～35cmである。
- V b層 : 10YR4/3にぶい黄褐色シルトを主体とする。調査区の全域で確認した。白色砂(φ1mm～3mm程度)を全体に含む。酸化鉄を含み、上層との境に集積している。部分的にグライ化している。層厚は0.7cm～29cmである。
- V c層 : 10YR3/4暗褐色粘土質シルトを主体とする。2区の西壁と北壁の西側で部分的に確認した。層厚4cm～16cmである。
- Ⅵ層 : 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルトを主体とし、酸化鉄、炭化物を含む。2区西側で部分的に確認した。層厚は2cm～20cmである。
- Ⅶa層 : 10YR3/4暗褐色粘土質シルトを主体とする。2区の北壁で部分的に確認した。層厚は5cm～8.8cmである。
- Ⅶb層 : 10YR3/2黒褐色粘土質シルトを主体とし、酸化鉄、マンガン、炭化物を少量に含む。24次調査におけるⅦb層又はⅦc層に相当すると考えられる。水田耕作土である。層厚1cm～17.5cmである。
- Ⅸ層 : 10YR4/3にぶい黄褐色粘土質シルトを主体とし、酸化鉄を含む。10YR3/1黒褐色粘土ブロック(φ10mm程度)を少量に含む。層厚1cm～21cmである。24次調査時の基本層Ⅸ層に相当すると考えられる。
- X層 : 10YR3/1黒褐色粘土質シルトを主体とし、酸化鉄、炭化物を少量に含む。Ⅹa層をブロック状に含む。層厚は2cm～19.2cm程度である。24次調査時の基本層X層に相当すると考えられる。弥生時代の水田耕作土である。
- Ⅹa層 : 10YR4/2灰黄褐色粘土を主体とし、酸化鉄、マンガン、炭化物を少量に含む。層厚は5.7cm～22cm程度である。層中から縄文土器が出土している。24次調査時の基本層Ⅹ層に相当すると考えられる。
- Ⅹa'層 : 10YR4/2灰黄褐色粘土を主体とし、酸化鉄、マンガン、炭化物を少量に含む。層厚は6cm～20cm程度である。Ⅹa層と土質・土色が類似するが、やや明度が低い。



第7図 基本層序模式図



第8図 調査作業風景

- XI b層 : 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土を主体とし、酸化鉄、マンガンを含む。2区中央から東側にかけて部分的に確認した。層厚は8.7cm～11cmである。
- XII a層 : 10YR3/1 黒褐色粘土を主体とし、酸化鉄、マンガンを多く含み、炭化物を少量に含む。層厚は3cm～18.7cmである。
- XII b層 : 10YR4/2 灰黄褐色粘土を主体とする。ややグライ化しており、酸化鉄、マンガンを多く含み、上層との境に集積する。層厚は0.3cm～13cmである。
- XII c層 : 10YR2/1 黒色粘土を主体とし、酸化鉄、にぶい黄褐色粘土をブロック状(φ100mm)に含む。層厚は4.2cm～12.5cmである。
- XII c'層 : 10YR2/1 黒色粘土を主体とし、酸化鉄を含む。XII c層に比べ、やや明度が低い。層厚は20cm～39cmである。
- XII d層 : 10YR4/1 褐灰色粘土を主体とする。全体がグライ化しており、黒褐色粘土をブロック状にわずかに含む。層厚は25cm以上である。

第5章 検出遺構と出土遺物

第1節 V層上面検出遺構(第10～21図)

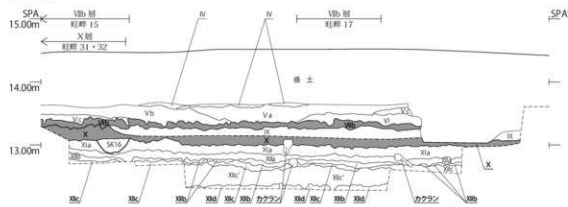
V層の地形は、北西側の04・05・09グリッド周辺が標高13.50m～13.56mで最も高い。02・05グリッドから南東に向かって低くなっており、最も標高が低い河川跡付近の12・17グリッド周辺との比高差は20cmである。

検出した遺構は、竪穴遺構1基(SI1)、溝跡3条(SD1～3)、焼土遺構1基(焼土遺構3)、土坑7基(SK1～5・10・14)、ピット25基(Pit 1～17・19～23・66～68)、河川跡1条(SR1)である。これらの遺構は、2区の全域に広がる。竪穴遺構は、標高が高い04・09グリッドに位置する。河川跡は2区東側と1区で検出しており、調査区の東側に延びている。

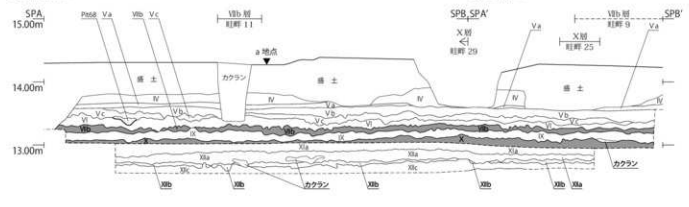
なお、焼土遺構については調査当初6基を検出したが、整理作業の段階で検討した結果、焼土遺構1・2はSI1竪穴遺構に付属するもの、焼土遺構4・6は単独のピットに変更し、焼土遺構5は欠番とした。

遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、ロクロ土師器、須恵器、土製品、鉄滓、礫片が出土している。

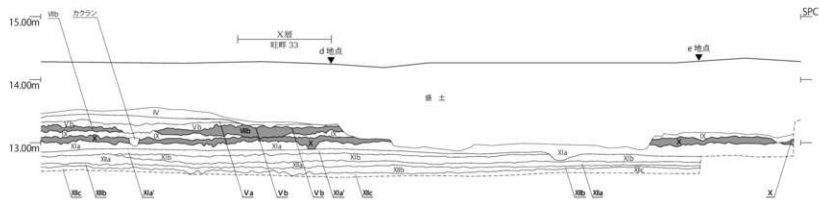
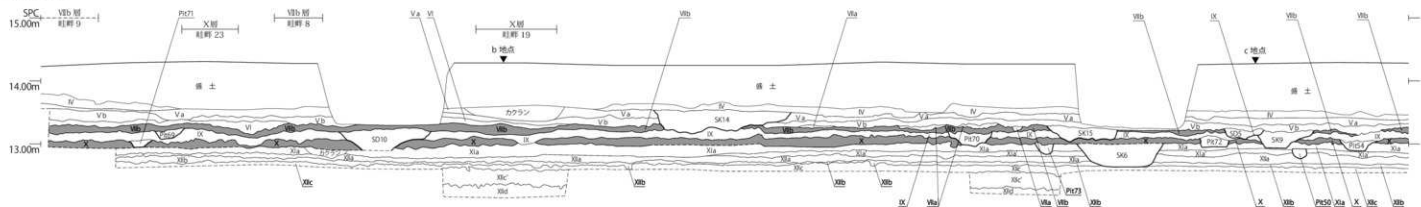
調査区西壁A



調査区北壁A



調査区北壁C



← 経緯は→方向へ続く

■ 水田耕作土
▼ 柱礎跡・土師作成位置



第9図 基本層序

Y=2640

Y=2650

Y=2660

Y=2670

Y=2680

Y=2690

Y=2700



X=197805

X=197810

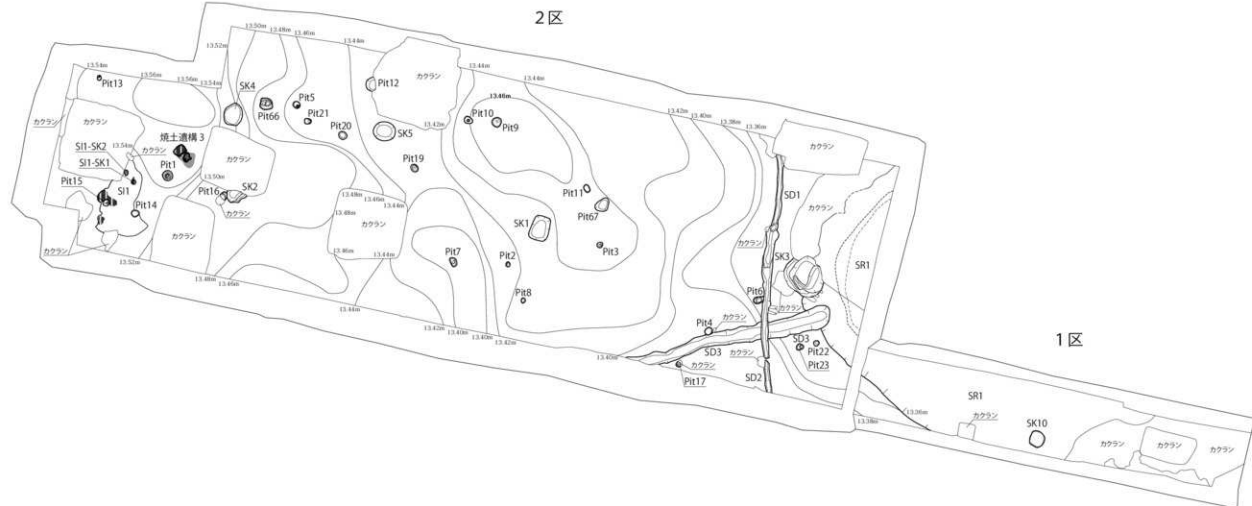
X=197815

X=197820

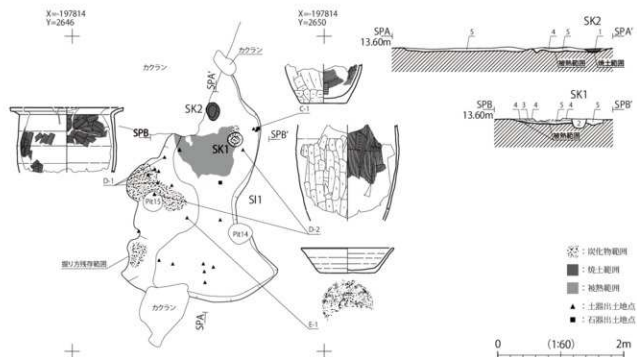
X=197825

X=197830

X=197835



第10図 V層上面検出遺構配置図



堆積土注記表

層位	層位	土色	土性	備考
SK2	1	2.5YR3/2 暗赤褐色	砂質シルト	非焼土範囲
竪穴遺構掘り方	2	2.5Y3/1 黒褐色	シルト	にぶい黄褐色土ブロック(5mm程度)・炭化物粒を微量に含む。
	3	2.5Y4/3 オリーブ褐色	シルト	にぶい黄褐色土ブロック(5mm程度)を少量、炭化物ブロック(5～10mm程度)を微量に含む。
	4	10YR2/3 黒褐色	シルト	炭化物ブロック(5～10mm程度)・にぶい黄褐色土粒を多量に含む。
	5	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	砂質シルト	炭化物粒を微量に含む。 非V層土主体

施設観察表

遺構名	グリッド	平面形	規模(cm)		備考
			長軸×短軸	深さ	
SK1	09	円形	25×23	14	貯蔵穴?
SK2	09	楕円形	29×22	6	カマド燃焼部?

第11図 SI1竪穴遺構平面図・断面図

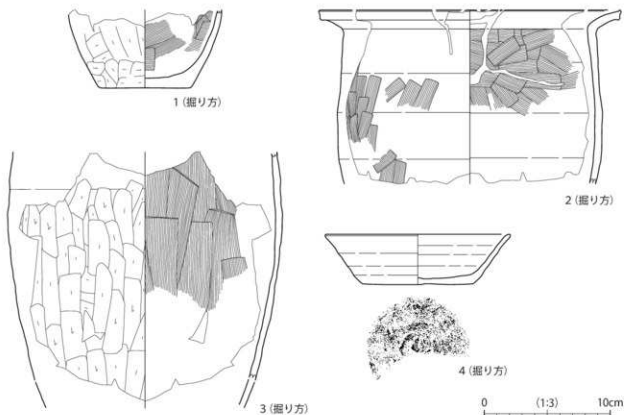
(1) 竪穴遺構(第11・12図)

SI1竪穴遺構

2区西側の04・09グリッドに位置する。Pit14・15と重複し、それらよりも古い。床面は残存せず、掘り方のみを確認している。平面形状は不整形、断面形状は皿形を呈する。規模は、長軸370cm、短軸250cm、深さ10cmを測る。当初、単独の遺構が複数存在するものと考えたが、焼土や炭化物のまとまりが確認できたため、それぞれ同一の竪穴遺構に伴う遺構として報告する。遺構の性格としては、焼土を検出した周辺では白色粘土ブロック(写真図版5)が確認できたこと、遺物が周辺よりもややまとまって出土していることなどから、竪穴住居跡の可能性を考えた。しかし遺構上部は大きく削平されているため、遺構の残存状況が悪く、柱穴が確認できなかったことから、竪穴遺構とした。

堆積土を5層に分層した。1層がSK2、2層がSK1の堆積土である。3～5層は、竪穴住居跡の掘り方埋土の可能性がある。3層はにぶい黄褐色土ブロックを含むオリーブ褐色シルト、4層はにぶい黄褐色土粒を含む黒褐色シルト、5層はV層を主体とした砂質シルトである。

付属施設は、SK1・2を確認した。SK1は竪穴遺構の北東部に位置する。平面形状は円形、断面形状はU字形を呈する。規模は長軸25cm、短軸23cm、深さ14cmを測る。堆積土はにぶい黄褐色土ブロックを含む黒褐色土シルト



発掘 番号	登録 番号	出土 地点	層位	種別	器種	法量 (cm)		外面調整	内面調整	備考	写真 掲載
						口径	底径				
1	C-1	S1	掘り方	土師器	小型甕	—	7.2 (6.2)	胴部へラケズリ 底部へラ	胴部へラケ	内外面摩滅	21-1
2	D-1	S1	掘り方	ロクロ土師器	甕	(23.8)	— (13.7)	胴部へラケ 一部へラケ	口縁部 一部へラケ		21-2
3	D-2	S1	掘り方	ロクロ土師器	甕	—	(20.4)	胴部へラケ へラケ	へラケ	内面や摩滅	21-3
4	E-1	S1	掘り方	須恵器	杯	14.7	(8.6) 4.0	口縁～体部へラケ 底部へラケへ切り離し	口縁部		21-4

第12図 S11 竪穴遺構出土遺物

である。SK2は、竪穴遺構の北部に位置する。平面形状は楕円形、断面形状は皿形を呈する。規模は長軸29cm、短軸22cm、深さ6cmを測る。堆積土は焼土主体の暗赤褐色砂質シルトである。SK1は堆積土や遺構内の位置から貯蔵穴、SK2は焼土の状況、遺構内の位置からカマドの燃焼部の可能性が高く、その場合東カマドの住居跡になると考えられる。周辺に堆積していた白色粘土ブロックについては、燃焼部がカマドであった場合、その構築材または補修用に用意されたと考えられる。

遺物は掘り方埋土から、土師器、ロクロ土師器、須恵器、石器(剥片)、礫が出土しており、のうち土師器1点、ロクロ土師器2点、須恵器1点、計4点を図化した(第12図-1～4)。

1は土師器小型甕の底部から胴部である。器形は底部から胴部にかけてやや内湾して立ち上がり、胴部外面には縦方向のヘラケズリが施されている。2・3はロクロ土師器の長胴形の甕で、2の口縁部は受口状である。4は須恵器杯で底部から口縁部の立ち上がりは直線的にやや外傾しており、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。

なお、炭化物集中範囲から出土した炭化材について、AMS放射性炭素年代測定分析及び樹種同定分析を行った。分析の結果、炭化材の年代測定は892～975cal AD、樹種同定はコナラ属コナラ節に同定された。詳細については第6章第1・2節を参照されたい。

(2) 溝跡(第13図)

SD1 溝跡

2区東側の07・12・17グリッドに位置する。北から南にかけて概ね直線的に伸び、方向はN-7°~10°-Eである。北側は擾乱によって削平されているが、調査区外に伸びる可能性がある。SD3・Pit6と重複し、それらよりも新しい。検出した規模は、長さ969cm以上、上端幅23cm~61cm、下端幅8cm~33cm、深さ10cm~37cmである。断面形状は逆台形を呈する。溝跡SPB付近では、底面の高さを揃えるために若干掘り下げている状況を確認した。堆積土を4層に分層した。1層は黄褐色土ブロックを含む黒褐色シルト、2層はにぶい黄色砂を含む黒褐色シルト、3層はにぶい黄褐色砂を含む褐色粘土質シルト、4層は褐色土ブロックを含む青灰色砂で、全て自然堆積である。遺物は堆積土から土師器が出土しているが、小破片のため図化できなかった。

SD2 溝跡

2区東側の17・21グリッドに位置する。北から南にかけて直線的に伸び、方向はN-5°-Wである。北側はSD1の南端付近で止まり、南側は調査区外に伸びる。検出した規模は、長さ159cm以上、上端幅23cm~28cm、下端幅9cm~18cm、深さ9cm~19cmである。断面形状は逆台形を呈する。底面は概ね平坦である。堆積土を3層に分層した。1層はにぶい黄褐色土ブロックを含む黒褐色シルト、2層はにぶい黄褐色土を含む黒褐色シルト、3層はにぶい黄褐色土粒を含む褐色粘土質シルトで、全て自然堆積である。位置や土層の堆積状況などから、SD1と同一の溝跡であると考えられる。遺構番号については、SD3の南側で溝跡がいったん途切れるため別の遺構とした。遺物は堆積土から須恵器が出土しているが、小破片のため図化できなかった。

SD3 溝跡

2区東側の17・18グリッドに位置する。北東から南西にかけて概ね直線的に伸び、方向はN-71°~90°-Eである。北東側はSR1と重複し、南西側は調査区外に伸びる。SD1・Pit4よりも古く、SR1よりも新しい。検出した規模は、長さ992cm以上、上端幅50cm~106cm、下端幅19cm~48cm、深さ17cm~40cmである。断面形状は逆台形を呈する。底面は、概ね平坦で、南西から北東に向かって傾斜する。堆積土を9層に分層した。1・2層は明黄褐色砂やにぶい黄褐色ブロックを含む黒褐色シルト、3~7層はにぶい黄褐色砂質土の粒・ブロックを含む褐色系シルト、8層は褐色土ブロックを含むにぶい黄褐色砂質シルト、9層は暗褐色土ブロックを含むにぶい黄褐色砂で、全て自然堆積である。SD3の範囲については、調査区東壁の壁面では見られずSR1の範囲内で立ち上がる状況を確認したことから溝端部と判断した。この溝の性格として、何らかの区画施設と考えた場合、この部分が掘り残された開口部となる可能性も考えられる。

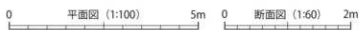
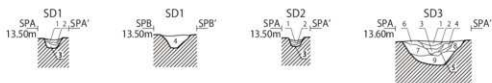
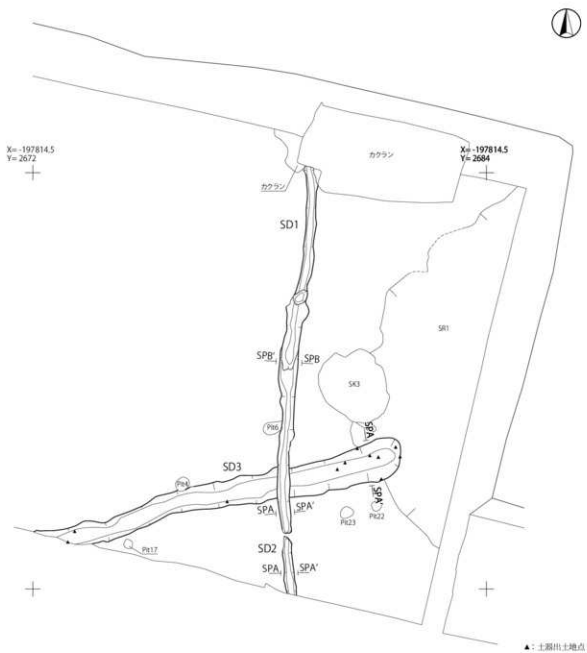
遺物は堆積土から土師器、ロクロ土師器、須恵器が出土しているが、小破片のため図化できなかった。

(3) 焼土遺構(第14図)

焼土遺構3

2区西側の05グリッドに位置する。平面形状は楕円形、断面形状は皿形を呈する。規模は、長軸119cm、短軸72cm、深さ3cmを測る。堆積土を2層に分層した。1層は炭化物粒を含むにぶい赤褐色砂質シルト、2層は焼土ブロックを含む暗赤褐色砂質シルトで、全て自然堆積である。炭化物粒や焼土範囲の周辺では、被熱により変色した土を確認した。近くで検出したSI1のように削平されて残存状況が悪い窪穴住居跡で、カマドの燃焼部の底部や煙出しピットの可能性も考えられる。しかし、検出状況から遺構の詳細が不明であるため、焼土遺構とした。

遺物は出土していない。



第13図 SD1～3溝跡平面図・断面図

遺構（V層上面）観察表

遺構名	グリッド	方向	幅 寸 (cm)				層位	土 色	土 性	備 考	重 複
			全長	上端幅	下端幅	深さ					
SD1	07-12 ・17	N7° ~ 10°E	(969)	23 ~ 61	8 ~ 33	10 ~ 37	1	10YR3/1 黒褐色	シルト	黄褐色土ブロック(5~10mm程度)を少量に含む。	SD3, Pit4より新しい。
							2	10YR3/1 黒褐色	シルト	にふい黄色砂を少量に含む。	
							3	10YR4/1 褐灰色	粘土質シルト	にふい黄色砂を少量に含む。	
							4	5B6/1 黄灰色	砂	褐灰色土ブロック(5~40mm程度)を少量に含む。	
SD2	17-21	N5°W	(159)	23 ~ 28	9 ~ 18	9 ~ 19	1	10YR3/1 黒褐色	シルト	にふい黄褐色土ブロック(5~30mm程度)を少量に含む。	
							2	10YR3/1 黒褐色	シルト	にふい黄褐色土を少量に含む。	
							3	10YR4/1 褐灰色	粘土質シルト	にふい黄褐色土粒を少量に含む。	
SD3	17-18	N71° ~ 90°E	(992)	50 ~ 106	19 ~ 48	17 ~ 40	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	黄褐色色砂を少量に含む。	SD1, Pit4より古く、 SR1より新しい。
							2	10YR3/2 黒褐色	シルト	にふい黄褐色土ブロック(5~30mm程度)を少量、炭化物を少量に含む。	
							3	10YR4/1 褐灰色	シルト	にふい黄褐色土粒を少量、炭化物を少量に含む。	
							4	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	にふい黄褐色土ブロック(5~10mm程度)を少量に含む。	
							5	10YR3/3 暗褐色	シルト	にふい黄褐色土ブロック(5~30mm程度)を少量、炭化物ブロック(5~10mm程度)を少量に含む。	
							6	10YR3/1 黒褐色	シルト	にふい黄褐色土ブロック(5~20mm程度)を少量に含む。	
							7	10YR4/1 褐灰色	シルト	にふい黄褐色砂質土ブロック(5~20mm程度)を少量に含む。	
							8	10YR6/4 にふい黄褐色	砂質シルト	褐灰色土ブロック(5~100mm程度)を多量に含む。	
							9	10YR6/4 にふい黄褐色	砂	黄褐色土ブロック(5~20mm程度)を少量に含む。	

(4) 土坑(第9・14図)

SK1土坑

2区中央の11グリッドに位置する。平面形状は長方形、断面形状は箱形を呈する。規模は、長軸118cm、短軸86cm、深さ57cmを測る。堆積土を2層に分層した。1層は明緑灰色シルト、2層は明オリーブ灰色砂質シルトが主体で、全て自然堆積である。いずれも褐灰色土ブロックを含む。

遺物は堆積土から土師器、陶器、鉄滓が出土しているが、小破片のため図化できなかった。

SK2土坑

2区西側の10グリッドに位置する。平面形状は円形と推定され、断面形状は階段形を呈する。規模は、長軸96cm、短軸56cm以上、深さ39cmを測る。堆積土は、にふい黄褐色土ブロックを含む褐灰色砂質シルトの単層で、自然堆積である。

遺物は出土していない。

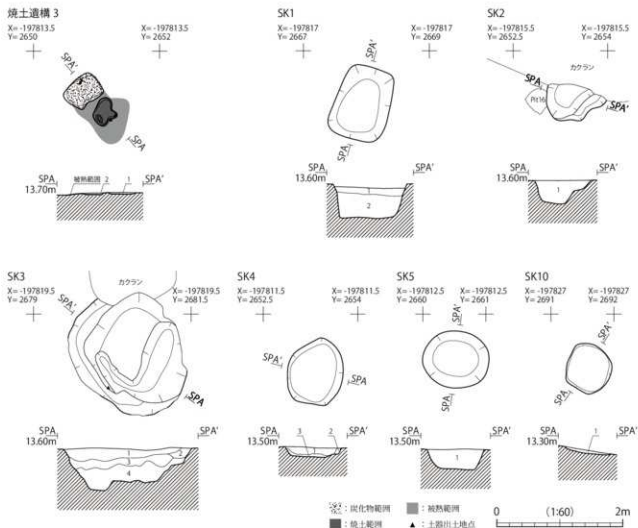
SK3土坑

2区東側の12・13・17・18グリッドに位置する。SR1と重複し、それよりも新しい。遺構の北部は攪乱によって削平されている。平面形状は円形、断面形状は階段形を呈する。規模は、長軸203cm、短軸174cm以上、深さ67cmを測る。底面は概ね平坦であるが、南東部に溝状の浅い窪みを確認した。堆積土を4層に分層した。1層は灰黄褐色シルト、2・3層は灰色・暗緑灰色砂質シルト、4層は灰色砂が主体で、全て自然堆積である。1~3層は明黄褐色砂、4層は灰色土ブロックを含む。

遺物は堆積土から土師器、須臾器が出土しているが、小破片のため図化できなかった。

SK4土坑

2区西側の05グリッドに位置する。平面形状は楕円形、断面形状は階段形を呈する。規模は、長軸106cm、短軸89cm、深さ15cmを測る。堆積土を3層に分層した。1層は暗オリーブ色砂、2層が灰オリーブ色砂質シルト、3



焼土遺構 (V層上面) 観察表

遺構名	グリッド	平面形	規模 (cm)		層位	土色	土性	備考	重視
			長軸×短軸	深さ					
焼土遺構3	05	楕円形	119×72	3	1	2.5YR4/3 赤褐色	砂質シルト	炭化物粒を少量に含む。 ※炭化物範囲	
					2	2.5YR3/3 暗赤褐色	砂質シルト	焼土ブロック (5mm程度) を多量に含む。 ※焼土範囲	

土坑 (V層上面) 観察表

遺構名	グリッド	平面形	規模 (cm)		層位	土色	土性	備考	重視
			長軸×短軸	深さ					
SK1	11	長方形	118×86	57	1	7.5GY7/1 明緑灰色	シルト	暗灰色土ブロック (5～100mm程度) を多量、炭化物粒を微量に含む。	
					2	5GY7/1 明オリーブ灰色	砂質シルト	暗灰色土ブロック (5～100mm程度) を多量、炭化物粒を微量に含む。	
SK2	10	円形	96×(56)	30	1	7.5YR5/1 暗灰色	砂質シルト	白、黄褐色土ブロック (5mm程度)・炭化物粒を微量に含む。	
					1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	明黄褐色砂を少量、炭化物粒を微量に含む。 ※一部グラウ化	SK1より新しい。
					2	N5/0 灰色	砂質シルト	明黄褐色砂を多量に含む。	
					3	5G3/1 暗緑灰色	砂質シルト	明黄褐色砂・炭化物粒を微量に含む。	
SK3	12-13-17-18	円形	203×(174)	67	4	10Y4/1 灰色	砂	灰色土ブロック (5～100mm程度) を多量に含む。	
					1	5Y4/3 暗オリーブ色	砂	白色土粒を少量、炭化物粒を微量に含む。	
					2	5Y4/2 灰オリーブ色	砂質シルト	炭化物粒を微量に含む。	
SK4	05	楕円形	106×89	15	3	2.5Y4/3 オリーブ褐色	粘土質シルト	白、黄褐色土ブロック (5mm程度) を少量に含む。	
					1	5Y4/2 灰オリーブ色	砂質シルト	炭化物ブロック (5mm程度) を少量、白色粘土粒を微量に含む。	
SK5	06	円形	105×91	35	1	10G6/1 緑灰色	シルト	暗褐色土ブロック (5～100mm程度) を多量に含む。	SK1より新しい。
SK10	23	楕円形	74×73	5	1	10G6/1 緑灰色	シルト	暗褐色土ブロック (5～100mm程度) を多量に含む。	SK1より新しい。
SK14	03	—	(218) × —	(37)	1	10YR4/3 赤褐色	シルト	暗褐色土ブロック (10～200mm程度) を少量に含む。 ※2坑北壁面にて確認	

第14図 焼土遺構3、SK1～5・10・14土坑平面図・断面図

層はオリーブ褐色粘土質シルト主体で、全て自然堆積である。1層は白色土粒、3層はにぶい黄褐色土ブロックを含む。

遺物は土師器が出土しているが、小破片のため図化できなかった。

SK5 土坑

2区西側の06グリッドに位置する。平面形状は円形、断面形状は逆台形を呈する。規模は、長軸105cm、短軸91cm、深さ35cmを測る。堆積土は、白色粘土粒を含む灰オリーブ色砂質シルトの単層で、自然堆積である。

遺物は出土していない。

SK10 土坑

1区の23グリッドに位置する。SR1と重複し、それよりも新しい。平面形状は隅丸方形、断面形状は皿形を呈する。規模は、長軸74cm、短軸73cm、深さ5cmを測る。堆積土は、黒褐色土ブロックを含む緑灰色シルトの単層で、自然堆積である。

遺物は出土していない。

SK14 土坑 (第9図)

2区西側の北壁断面で検出した土坑で、03グリッドに位置する。平面形状は不明、断面形状は逆台形を呈する。規模は、幅218cm以上、深さ37cmを測る。堆積土は、暗褐色土ブロックを含むにぶい黄褐色シルトの単層で、自然堆積である。

遺物は出土していない。

(5) ビット (第9・15～17図)

ビットは25基 (Pit 1～17・19～23・66～68) を検出した。概ね2区の全域に分布し、2区西側では04・09・10グリッド、2区西側から東側にかけては05・06グリッド、2区中央では06・11グリッド周辺にややまとまりがみられる。また、2区東側ではSD1～3付近の12・13・17・18グリッドにやや集中する。柱痕跡が確認できたものはPit 1～3・5・9・10・13・19・21である。建物跡や柱列跡を構成する配列は確認できなかった。

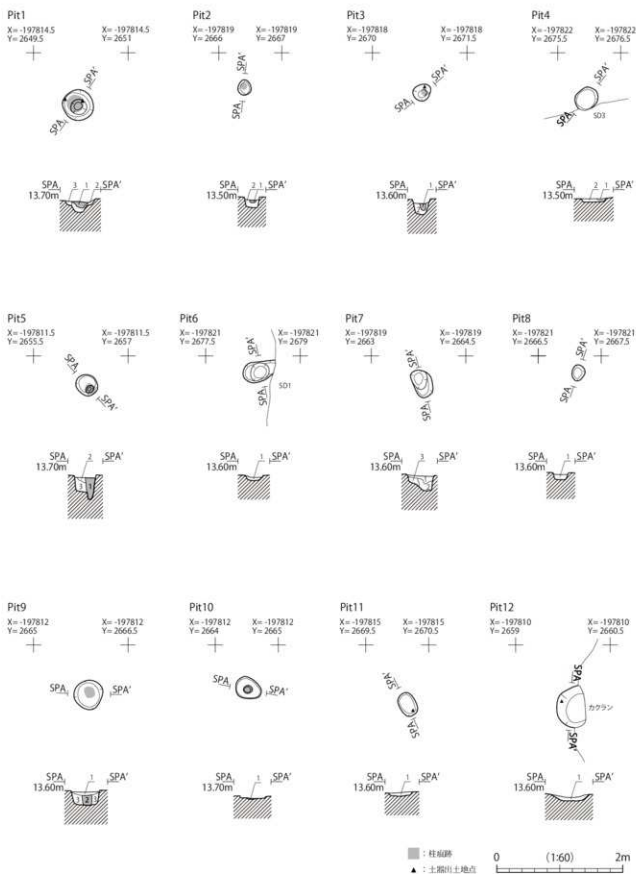
遺物はPit 1・2・4・8・11・12・17・67から、土師器、ロクロ土師器が出土しており、このうちPit 1・67から出土した土師器1点、ロクロ土師器6点、計7点を図化した (第17図-1～7)。

Pit 1からは土師器甕の底部とロクロ土師器甕の口縁部から胴部が出土しており、1・2を図化した。2の口縁部は受口状である。Pit 67からはロクロ土師器環とロクロ土師器甕が出土しており、3～6の環と7の甕を図化した。Pit 67から出土したロクロ土師器は全て底部が欠損しており、内外面とも摩滅している。3～6の環の体部から口縁部の立ち上がりはやや内湾気味である。7の胴部下には斜め方向のヘラケズリが一部見られる。口縁部は短いが直に立ち上がっている。

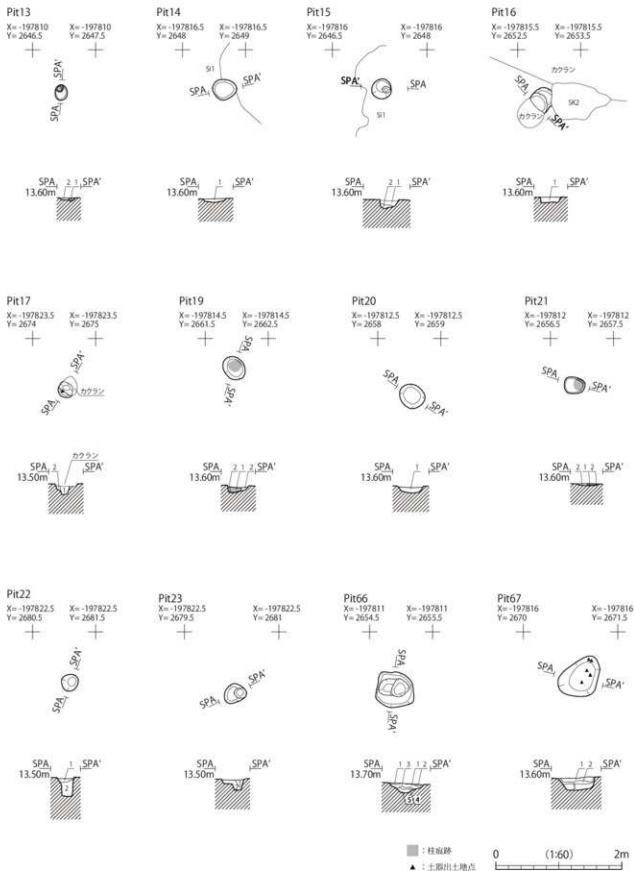
(6) 河川跡 (第18～20図)

SR1 河川跡

1・2区の08・13・18・19・22・23・25グリッドに位置する。SD3、SK3・10と重複し、それらよりも古い。安全上の理由から、1区では掘削を地表面から1,500cm程度の深度までにとどめた。検出した規模は、長さ1,300cm以上、上端幅980cm、下端幅650cm、深さ75cm以上である。確認した河川跡は大きく弧を描いた南岸の



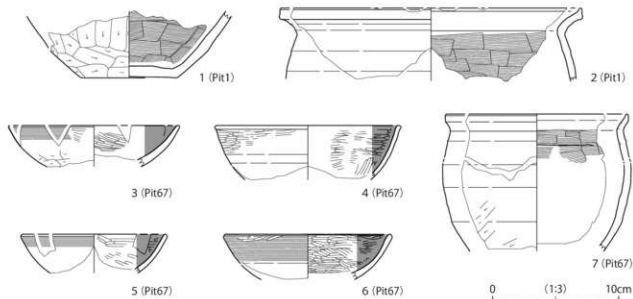
第15図 ビット平面図・断面図(1)



第16図 ビット平面図・断面図(2)

ビット (V層上部) 継ぎ表

遺構名	グリッド	平面形	掘 削 (cm)		層位	土 色	土 性	備 考	重 複
			長軸×短軸	深さ					
Pb1	10	円形	50×48	24	1	10YR2/3 黒褐色	砂質シルト	黄土ブロック (5mm程度)・炭化植物を少量に含む。 ※柱痕跡	
					2	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	炭化植物を少量に含む。	
					3	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	炭化植物を少量に含む。	
Pb2	11	円形	25×21	15	1	10YR4/1 褐色	シルト	炭化植物を少量に含む。 ※柱痕跡	
					2	7.5Y4/1 灰色	シルト	炭化植物・酸化鉄粒を少量に含む。	
Pb3	12	楕円形	29×25	25	1	10YR4/1 褐色	シルト	酸化鉄粒を少量。炭化植物を少量に含む。 ※柱痕跡	
					2	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	酸化鉄粒を少量。炭化植物を少量に含む。	
Pb4	17	円形	39×33	5	1	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	黒褐色土ブロック (5mm程度) を多量に含む。	SD3より新しい。
					2	10YR5/2 灰黄褐色	砂質シルト	酸化鉄粒を少量に含む。	
Pb5	05	円形	35×32	39	1	10YR4/4 褐色	砂質シルト	黄土ブロック (5mm程度) を少量に含む。 ※柱痕跡	
					2	10YR4/3 に近い黄褐色	砂質シルト	黄土ブロック (5mm程度) を少量に含む。	
					3	10YR4/3 に近い黄褐色	砂質シルト	炭化植物を少量に含む。	
Pb6	17	(楕円形)	(54)×(32)	10	1	10YR5/4 に近い黄褐色	砂質シルト	黒褐色土ブロックと灰黄褐色土ブロックの混土。	SD1より古い。
					2	5Y5/1 灰色	シルト	炭化植物ブロック (5～20mm程度)・酸化鉄粒を少量に含む。	
Pb7	11	楕円形	45×30	23	1	5Y5/1 灰色	シルト	炭化植物ブロック (5～20mm程度) を多量。酸化鉄粒を少量に含む。	
					2	5Y5/1 灰色	シルト	酸化鉄粒を少量に含む。	
					3	5Y5/2 灰オリーブ色	シルト	褐色土ブロック (5～40mm程度) を少量に含む。	
Pb8	16	楕円形	25×20	11	1	5B6/1 青灰色	シルト	に深い黄褐色土ブロック (5mm程度) を少量に含む。	
					2	7.5Y4/1 灰色	シルト	酸化鉄粒を少量に含む。 ※柱痕跡	
					3	7.5Y4/1 灰色	シルト	酸化鉄粒を少量に含む。 ※柱痕跡	
Pb9	06	円形	48×46	24	1	7.5Y4/1 灰色	シルト	酸化鉄粒を少量に含む。 ※柱痕跡	
					2	7.5Y4/1 灰色	シルト	酸化鉄粒を少量に含む。 ※柱痕跡	
					3	7.5Y4/1 灰色	シルト	酸化鉄粒を少量に含む。 ※柱痕跡	
Pb10	06	楕円形	43×34	5	7.5YR5/1 黒褐色	砂質シルト	に深い黄褐色土を少量に含む。 ※柱痕跡		
Pb11	12	楕円形	38×27	7	10YR6/3 に近い黄褐色	砂質シルト	暗褐色土ブロック (5～20mm程度)・炭化植物ブロック (5～10mm程度) を少量に含む。		
Pb12	05・06	(円形)	67×(46)	11	5Y4/2 灰オリーブ色	砂質シルト	炭化植物ブロック (5mm程度) を少量に含む。		
Pb13	04	楕円形	25×20	7	1	10YR3/4 暗褐色	シルト	に深い黄褐色土ブロック (5mm程度) を少量に含む。 ※柱痕跡	
					2	10YR3/3 暗褐色	シルト	に深い黄褐色土を少量に含む。	
Pb14	09	楕円形	39×33	7	10YR4/3 に近い黄褐色	シルト	に深い黄褐色土ブロック (5mm程度)・炭化植物ブロック (5mm程度) を少量に含む。	SIより新しい。	
Pb15	09	円形	32×31	16	1	10YR3/2 暗褐色	シルト	に深い黄褐色土ブロック (5～10mm程度)・炭化植物ブロック (5～10mm程度) を少量に含む。	SIより新しい。
					2	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	炭化植物を少量に含む。	
Pb16	10	(楕円形)	(35)×(35)	9	5Y4/2 灰オリーブ色	砂質シルト	炭化植物ブロック (5mm程度) を多量。に深い黄褐色土ブロック (5mm程度) を少量に含む。		
Pb17	17	(円形)	(24)×(23)	18	1	10YR5/3 に近い黄褐色	砂質シルト	暗褐色土ブロック (5～10mm程度) を少量。炭化植物を少量に含む。	
					2	10YR5/4 に近い黄褐色	砂質シルト	炭化植物を少量に含む。	
Pb19	06・11	楕円形	39×32	11	1	10YR3/2 暗褐色	砂質シルト	に深い黄褐色土を少量。炭化植物を少量に含む。 ※柱痕跡	
					2	10YR3/2 暗褐色	砂質シルト	に深い黄褐色土ブロック (5mm程度) を少量。炭化植物を少量に含む。	
Pb20	05	円形	41×36	12	1	10YR3/2 暗褐色	砂質シルト	に深い黄褐色土ブロック (5mm程度) を少量。炭化植物を少量に含む。 ※柱痕跡	
Pb21	05	楕円形	33×26	3	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	黒褐色土ブロック (5～20mm程度) を少量。炭化植物を少量に含む。 ※柱痕跡	
					2	5B4/1 暗青灰色	砂質シルト	褐色土ブロック (5～20mm程度) を少量に含む。	
Pb22	18	円形	28×26	30	1	2.5Y5/3 黄褐色	砂質シルト	黄褐色土ブロック (5～30mm程度) を多量。炭化植物を少量に含む。	
					2	2.5Y3/1 黒褐色	砂質シルト	黄褐色土ブロック (5～10mm程度) を少量に含む。	
Pb23	18	楕円形	34×31	18	1	2.5Y5/2 暗灰黄色	砂質シルト	黒褐色土ブロック (5～20mm程度) を少量。炭化植物を少量に含む。	
					2	2.5Y6/2 灰黄色	砂質シルト	黄褐色土ブロック (5～20mm程度) を多量。炭化植物を少量に含む。	
Pb66	05	円形	60×57	22	1	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	炭化植物ブロック (5mm程度) を少量に含む。	
					2	10YR4/6 褐色	砂質シルト	黄土粒を多量に含む。	
					3	10YR4/1 褐色	砂質シルト	炭化植物を少量に含む。	
					4	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	黄土粒を多量に含む。	
					5	10YR4/1 褐色	砂質シルト	黄土粒を少量に含む。	
Pb67	12	楕円形	75×56	21	1	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	炭化植物ブロック (5～30mm程度) を多量。黄土ブロック (5～30mm程度) を少量に含む。	
					2	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	炭化植物ブロック (5～20mm程度) を少量。黄土ブロック (5～20mm程度) を少量に含む。	
					3	10YR5/2 灰黄褐色	砂質シルト	暗褐色土粒を少量に含む。	
Pb68	01	—	(30)×—	(12)	1	10YR3/4 暗褐色	シルト	に深い黄褐色土ブロック (10mm程度) を少量に含む。 ※2区北壁面にて検出	



図版番号	登録番号	遺構名	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面調整	内面調整	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	C-2	Pit1	1層	土師器	甕	—	(7.6)	(5.3)	口縁部: ㊦㊦㊦ ⁺ 底部: ㊦㊦	㊦㊦㊦ ⁺	内外面中や摩滅	21-5
2	D-3	Pit1	1層	ロクロ土師器	甕	(23.8)	—	(5.8)	㊦㊦㊦ ⁺	㊦㊦㊦ ⁺ 一部㊦㊦㊦ ⁺ ?		21-6
3	D-6	Pit67	堆積土	ロクロ土師器	坏	(13.4)	—	(3.3)	口縁部: ㊦㊦㊦ ⁺ → 一部㊦㊦㊦ ⁺ 体部: ㊦㊦㊦ ⁺	㊦㊦㊦ ⁺ ?	内面黒色処理 内外面摩滅	21-7
4	D-5	Pit67	堆積土	ロクロ土師器	坏	(14.4)	—	(4.3)	㊦㊦㊦ ⁺ → 一部㊦㊦㊦ ⁺	㊦㊦㊦ ⁺ → ㊦㊦㊦ ⁺	内面黒色処理 内外面中や摩滅	21-8
5	D-14	Pit67	堆積土	ロクロ土師器	坏	(11.4)	—	(3.1)	口縁部: ㊦㊦㊦調整?	㊦㊦ ⁺	内面黒色処理 内外面摩滅	21-9
6	D-4	Pit67	堆積土	ロクロ土師器	坏	(13.0)	—	(3.6)	口縁部: ㊦㊦㊦ ⁺ → 一部㊦㊦㊦ ⁺ 体部: ㊦㊦㊦ ⁺	㊦㊦㊦ ⁺	内面黒色処理 内外面中や摩滅 海陸付針	21-10
7	D-7	Pit67	堆積土	ロクロ土師器	甕	(14.4)	—	(10.9)	口縁部: ㊦㊦㊦ ⁺ 胴部: ㊦㊦㊦ ⁺ , 一部㊦㊦㊦ ⁺ ?	口縁部: ㊦㊦㊦ ⁺ 胴部: ㊦㊦㊦ ⁺ ?	内外面摩滅	21-11

第17図 Pit1・67出土遺物

一部で、全体としては蛇行しながら東流していると考えられる。堆積土がレンズ状に堆積していることと、調査範囲内では河川の中心部に向かって緩やかに傾斜していることから、水流もあまり強くなく、やや澱んだ状況であった可能性が考えられる。堆積土を大別17層、細別21層に分層した。1～6層は黒褐色土ブロック・にぶい黄橙色土ブロックを含む暗灰黄色・黄灰色シルト、7～11層はにぶい黄橙色砂・炭化物ブロックなどを含む黒色や黒褐色・褐色や灰黄褐色のシルトと粘土の互層、12～17層はにぶい黄橙色土ブロック・褐色土ブロック・黒褐色土粒を含む灰色系(褐色、黄灰色、青灰色、暗褐灰黄色、灰オリブ色、灰色)の砂質シルト・シルトである。

遺物は、8a～11層に多く、平面分布では2区の河川肩口に集中する状況であった。土師器、ロクロ土師器、須恵器、土製品、礫片が出土しており、これらのうち土師器2点、ロクロ土師器1点、須恵器3点、土製品1点、計7点を図化した(第20図-1～7)。

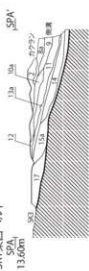
1・2は土師器高台杯である。内・外面すべてヘラミガキ及び黒色処理が施されている。1の体部はやや内湾しているが口縁部では直線的に外傾している。2は体部から口縁部にかけて緩やかに内湾している。3はロクロ土師器坏である。見込みは浅く、体部から口縁部は直線的に外傾している。底部の切り離しは回転糸切りで、一部手持ちヘラケズリで調整している。4は須恵器坏である。焼成が悪く、外面に粗粒圧痕がある。体部から口縁部はやや外傾している。5・6は須恵器の甕で、胴部上部から頸部の破片である。5の肩は張っており、外面は平行タタキ、内面は青海波の当て具痕である。7は細い管状の土鍾である。



第18図 SR1河川跡平面図

2区

SRI東西ベルト



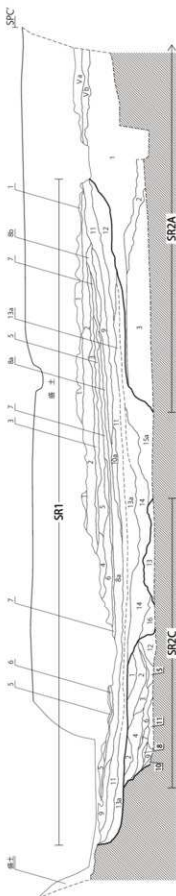
1区

SRI南北ベルト



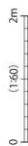
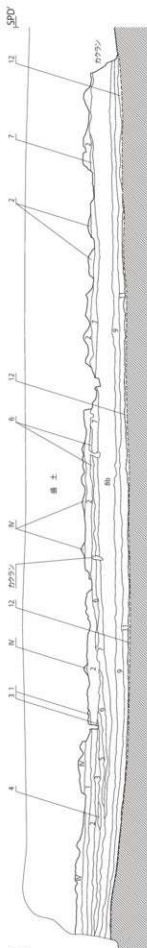
2区東壁

SPC
14.50m

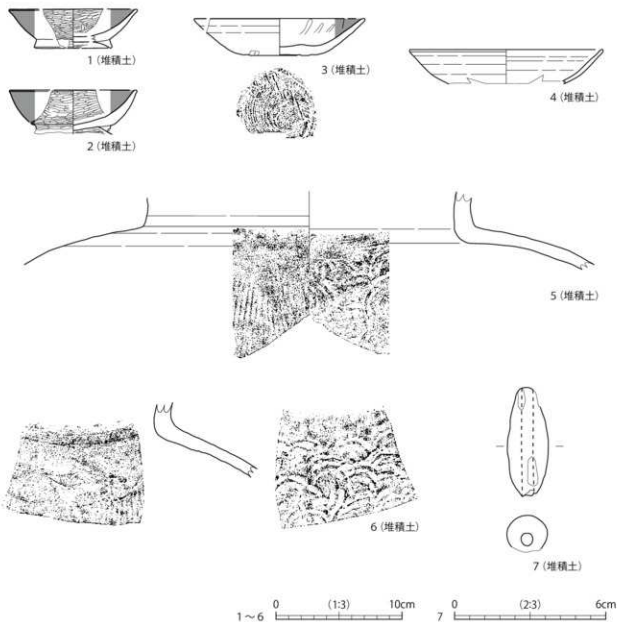


1区北壁

SPD
14.50m



第19図 SRI・2河川跡断面図



図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面調整	内面調整	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	C-4	SR1	堆積土	土師器	高台杯	(10.0)	(6.0)	3.1	砂削	砂削	内外面黒色処理	22-1
2	C-3	SR1	堆積土	土師器	高台杯	(10.0)	—	(3.4)	砂削	砂削	内外面黒色処理	22-2
3	D-8	SR1	堆積土	ロウ土師器	杯	(13.3)	(6.1)	3.0	口縁～体部:砂削 体部下端～一部手持ち内凹 底部:回転糸切で磨し	砂削	内面黒色処理 褐色に塗り剥落	22-3
4	E-17	SR1	堆積土	須恵器	杯	(15.4)	—	(2.7)	砂削	砂削	外面に糠粒付着あり 焼成悪い	22-4
5	E-2	SR1	堆積土	須恵器	甕	—	—	(5.6)	口縁部:砂削 胴部:平行砂削	口縁部:砂削 胴部:青海波当て具敷		22-5
6	E-3	SR1	堆積土	須恵器	甕	—	—	(6.2)	平行砂削	青海波当て具敷		22-6
図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量 (cm)			備考	写真図版		
						長さ	幅	厚さ				
7	P-1	SR1	堆積土	土製品	土師	4.3	1.6	1.6	孔径0.5cm、一部欠け 断面凹溝		22-7	

第20図 SR1河川跡出土遺物

SR1 河川跡（V層上面）堆積土注記表（1区北壁、2区東壁、東西ベルト・南北ベルト）

河川名	層位	土色	土性	備考	参照
SR1	1	2S4/2 暗灰黄色	シルト		SD3, SR3・10より古い。
	2	2S4/1 黄灰色	シルト	黒褐色土ブロック(5～20mm程度)を少量に含む。	
	3	2S5/1 黄灰色	シルト		
	4	10YR3/1 黒褐色	シルト	灰オリーブ色土ブロック(10～70mm程度)を多量に含む。	
	5	2S5/1 黄灰色	シルト	黒褐色土ブロック(5～40mm程度)を多量、にふい黄褐色土ブロック(5～30mm程度)を少量に含む。	
	6	10YR4/1 黄灰色	シルト	黒褐色土ブロック(5～20mm程度)を少量、にふい黄褐色土ブロック(5～20mm程度)を微量、炭化物(厚さ10mm程度)を一部帯状に含む。	
	7	10YR3/1 黒褐色	粘土	炭化物ブロック(5～20mm程度)を微量に含む。	
	8a	10YR4/1 黄灰色	シルト	にふい黄褐色土粒を微量に含む。	
	8b	10YR2/1 黒色	粘土	にふい黄褐色砂をラミナ状に含む。	
	9	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	にふい黄褐色砂を多量に含む。	
	10a	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	にふい黄褐色土粒を微量に含む。	
	10b	10YR3/1 黒褐色	粘土	炭化物ブロック(5mm程度)を多量に含む。	
	11	10YR1.7/1 黒色	粘土	灰黄褐色土ブロック(5～50mm程度)を微量に含む。	
	12	10YR4/1 黄灰色	砂質シルト	にふい黄褐色土ブロック(5～60mm程度)を多量、炭化物粒を微量に含む。	
	13a	2S5/1 黄灰色	砂質シルト	黒褐色土ブロック(5～30mm程度)を少量に含む。	
	13b	5B5/1 青灰色	砂質シルト	炭化物粒を微量に含む。	
	14	5B6/1 青灰色	砂質シルト	炭化物粒を微量に含む。	
15a	2S4/2 暗灰黄色	砂質シルト	黒褐色土粒を少量に含む。		
15b	5Y4/2 灰オリーブ色	シルト	にふい黄褐色粗砂をラミナ状に含む。 ※有機物層		
16	5Y5/1 灰色	シルト	炭化物粒を微量に含む。		
17	2S5/2 暗灰黄色	砂質シルト	炭化物粒を微量に含む。		

※第10例SR2の土層注記についてはP44にある。

(7) 遺構外出土遺物(第21図)

V層中から縄文土器、弥生土器、土師器、ロクロ土師器、鉄滓、礫片が出土しており、このうち土師器2点とロクロ土師器3点を図化した。全て2区から出土したものである。1は土師器裏の口縁部から胴部の破片である。頸部から口縁部の立ち上がりは外傾している。胴部には横方向のヘラナデが施されている。2は土師器裏の胴部下部から底部の破片である。胴部の外面は縦方向の連続的なヘラケズリで調整されている。3・4はロクロ土師器環である。3は底部から体部にかけて内湾気味に立ち上がり、口縁部にかけてやや外反気味に立ち上がる。4は底部から口縁部にかけて外傾気味に立ち上がる。5はロクロ土師器高台環の底部から体部下部である。内面は黒色処理が施されており、底部の切り離しは回転ヘラ切りで、のちに高台が貼り付けられている。

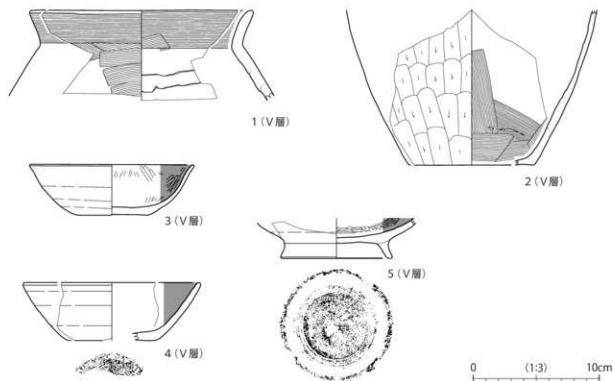
第2節 VIIb層上面検出遺構(第22～35図)

VIIb層の地形は、2区西側の09グリッド周辺での上面の標高が13.34mで最も高く、そこから北東側に向かって地形は緩やかに低くなる。一方で、北側はそれよりも傾斜が急である。2区中央から2区東側は標高13.18m～13.22mを測り、やや平坦な地形を呈する。

検出した遺構は、水田区画12面(区画①～⑫)、畦畔18条(畦畔1～18)、溝跡5条(SD4～8)、土坑5基(SK6～9・15)、ピット15基(Ph25～39)、河川跡1条(SR2)である。SR2について、本来はVc層上面の遺構だが、VIIb層上面で検出したことから本節で記述する。水田区画・畦畔は2区西側、溝跡・土坑・ピットは2区中央、いずれも2区北半に位置する。本来は南半にも同様な遺構が広がっていたと考えられるが、河川跡(SR2)によって削平されている。

水田区画は西側で確認しているが、VIIb層は東側にも広がっていることから、東側で確認した溝跡は水田区画や耕作に関係している可能性がある。

遺物は、弥生土器、土師器、礫片が出土している。



図録番号	発掘番号	出土地点	層位	種別	器種	法量 (cm)		外面調整	内面調整	備考	写真掲載	
						口径	底径					
1	C-8	2区	V層	土師器	甕	(17.6)	—	(7.2)	口縁部:327F 胴部:437F	口縁部:327F 輪郭部		22-8
2	C-11	2区	V層	土師器	甕	—	(10.0)	(12.3)	495F	497F		22-9
3	D-11	2区	V層	ロクロ土師器	坏	12.9	5.8	4.0	口縁~体部:0707F 底部:摩滅	0707F → 497F	内面黒色処理 内外面摩滅	22-10
4	D-12	2区	V層	ロクロ土師器	坏	(14.0)	(7.2)	4.6	口縁~体部:0707F 体部:0707F 底部:080Fの切り離し 497Fより高台縁の付け		内面黒色処理 内外面摩滅	22-11
5	D-13	2区	V層	ロクロ土師器	高台杯	—	8.9	(3.2)		497F	内面黒色処理	22-12

第21図 V層出土遺物

(1) 水田跡 (第23～25図、第1・2表)

小畦畔18条によって区画された、12区画の水田区画を検出した。2区西側の02～06・09・10グリッドに位置する。Pit36・SR2と重複し、それらよりも古い。区画②・⑥は調査区内で完結しているが、それ以外の区画では、河川跡(SR2)、攪乱による削平及び調査区外であるため水田形状は確認できなかった。畦畔と水田区画の方向から、南西から北東に軸を描いた水田跡であることが窺える。水田区画についてはやや不整形ではあるものの、およそ5m～10m内外の小区画水田であると考えられる。畦畔の形状、規模及び方向も一律ではなく、概ね北東から南西を水田区画同様に意識した方向と考えられる。なお、水口1箇所を検出したが、水路等の施設は確認できなかった。

a. 区画

12区画のうち全形を確認した区画②・⑥以外に形状を想定できる区画①・④・⑧を含めて区画面積を算出した。その結果、区画①は約6.1㎡、区画②は約9.5㎡、区画③は約4.4㎡、区画⑥は6.2㎡、区画⑧は約6.9㎡で、区画の総面積は57.3㎡以上である。平面形状は正方形(区画①・④)・長方形(区画②・⑧)・不整形(区画⑥)があり、面積や形の統一性はみられない。水田面の高所の標高は、区画③で13.24m、区画②で13.28m、区画⑥で13.29m、区画⑧で13.33mを測る。また、各水田区画の比高差は、区画⑤と⑧で10cm、区画②と④で2cm、区画②と③で4



Y=2680

Y=2670

Y=2660

Y=2650

X=197805

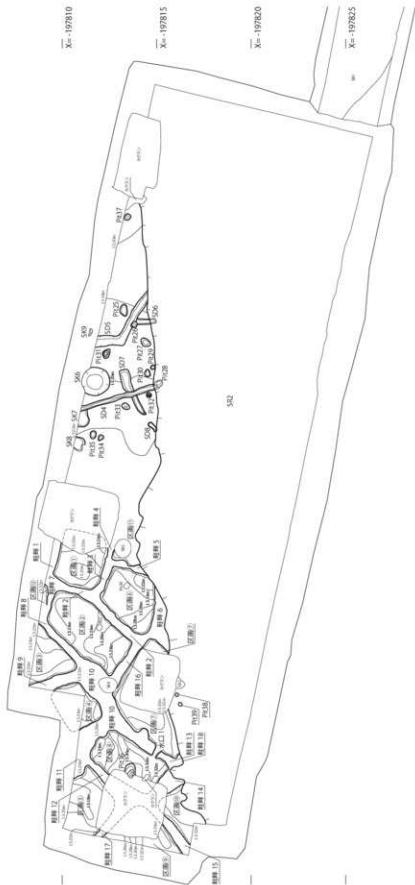
X=197810

X=197815

X=197820

X=197825

X=197830



0 (1:200) 10m

第22図 VII b層上面検出遺構配置図

cmを測る。全体として南西から北東へ向かって緩やかに傾斜する傾向が窺える。水田耕作土は、水田区画が確認できなかった2区中央や2区東側でも堆積が見られたため、水田跡は2区全体に広がるものと考えられる。

b. 畦畔

畦畔は18条確認した。いずれも小畦畔で、大畦畔は調査区内では確認できなかった。畦畔の規模は、畦畔10・11・14がやや大きく、畦畔10は上端幅53cm～144cm、下端幅80cm～161cm、畦畔11は上端幅79cm～117cm、下端幅96cm～132cm、畦畔14は上端幅78cm～109cm、下端幅93cm～132cmを測る。その他の畦畔は、上端幅13cm～66cm、下端幅31cm～83cmとやや小さくなっている。水田面との比高差は、畦畔9で3cm～4cm、畦畔10で1cm～5cmを測る。

遺物は畦畔14から土師器が出土しているが、小破片のため図化できなかった。

c. 水口

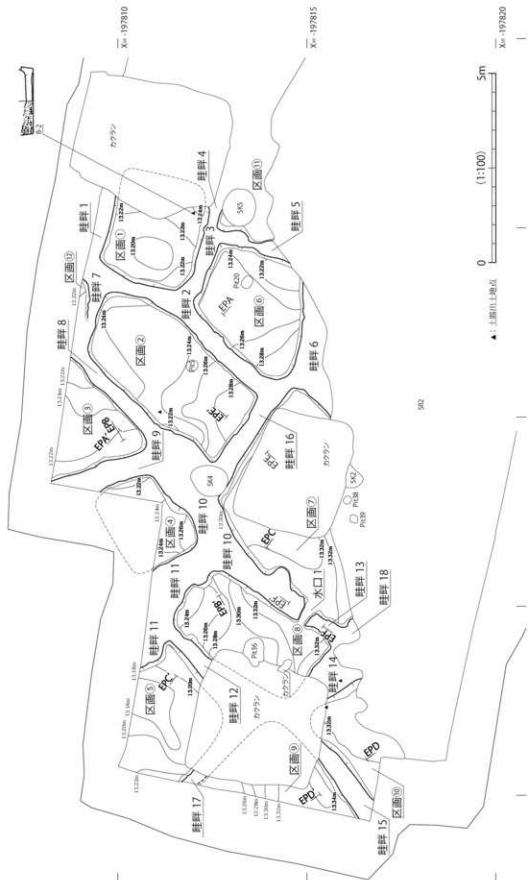
畦畔10と畦畔13の間に水口を1箇所確認した。水口の幅は18cm～35cmで、水田面の標高値から区画⑦から区画⑧に向かって低くなっている。

第1表 水田区画(VIIb層水田跡)計測表

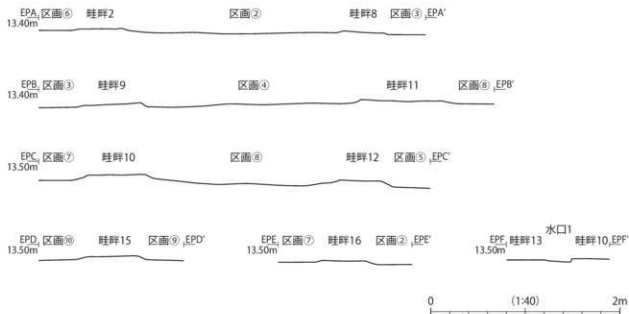
No.	最高標高(m)	最低標高(m)	区画内最大標高差(cm)	東辺(cm)	西辺(cm)	南辺(cm)	北辺(cm)	面積(m ²)	備考
区画①	13.24	13.20	4	—	206	227	157	(6.1)	
区画②	13.28	13.22	6	461	420	193	156	9.5	
区画③	13.24	13.21	3	—	255	293	—	3.8	
区画④	13.26	13.19	7	127	134	208	—	(4.4)	
区画⑤	13.23	13.17	6	106	48	135	—	(6.2)	
区画⑥	13.29	13.22	7	190	284	267	159	6.2	
区画⑦	13.33	13.29	4	120	456	38	350	4.8	
区画⑧	13.33	13.24	9	349	135	102	118	(6.9)	
区画⑨	13.35	13.25	10	182	—	—	(45)	(5.0)	
区画⑩	13.33	13.31	2	—	211	—	91	(2.8)	
区画⑪	13.21	13.21	0	—	149	—	28	1.4	
区画⑫	13.23	13.22	1	20	—	68	—	0.1	

第2表 畦畔(VIIb層水田跡)計測表

No.	方向	長さ(m)	上端幅(cm)	下端幅(cm)	水田面との比高差(cm)	備考
畦畔1	N75°W	1.80	—	—	1～2	
畦畔2	N19°～44°E	3.06	34～60	56～77	1～6	
畦畔3	N69°W	1.67	32～55	53～68	1～5	
畦畔4	N79°W	0.52	26～34	48～49	2～3	
畦畔5	N13°E	2.07	13～43	31～62	1～3	
畦畔6	N83°W	2.65	—	—	1～5	
畦畔7	N72°W	1.60	21～60	36～69	1～3	
畦畔8	N47°E	3.09	32～54	46～58	1～6	
畦畔9	N15°W	2.66	56～66	71～83	3～4	
畦畔10	N36°～59°E	5.35	53～144	80～161	1～5	畦畔13との間に水口1箇所
畦畔11	N38°W	3.25	79～117	96～132	1～7	
畦畔12	N44°E	1.59	31～49	48～60	5～12	
畦畔13	N37°E	0.37	31～62	48～64	3～5	畦畔10との間に水口1箇所
畦畔14	N43°W	1.02	78～109	93～132	1～7	
畦畔15	N55°E	2.24	41～60	64～76	1～5	
畦畔16	N56°W	3.48	41～59	57～72	1～4	
畦畔17	N48°W	0.46	(33)～(37)	(47)～(49)	5	
畦畔18	N48°W	0.38	—	—	4	



第23図 VIIb層水田跡平面図



第24図 VIIb層水田跡、畦畔、水口エレベーション図

d. 遺物

遺物は、区画①から弥生土器、土師器、区画②から土師器が出土しており、このうち区画①から出土した弥生土器1点を図化した(第25図-1)。1は弥生土器の底部である。全体形状は不明であるが、鉢もしくは小型の甕の可能性が考えられる。

(2) 溝跡(第26図)

SD4溝跡

2区中央の06・11グリッドに位置する。北西から南東にかけて概ね直線的に伸び、方向はN-17°-Wである。南側は河川跡(SR2)によって削平されるが、北側は調査区外に伸びている。Pit28・SR2よりも古く、SD7・SK7よりも新しい。検出した規模は、長さ437cm以上、上端幅21cm～32cm、下端幅6cm～18cm、深さ8cm～21cmである。断面形状は概ねU字形を呈する。底面はほぼ平坦で、北西から南東に向かって傾斜する。堆積土を2層に分層した。1層は褐灰色土ブロックを含むにぶい黄橙色砂質シルト、2層はにぶい黄橙色土ブロックを含む褐灰色シルトで、全て自然堆積である。

遺物は出土していない。

SD5溝跡

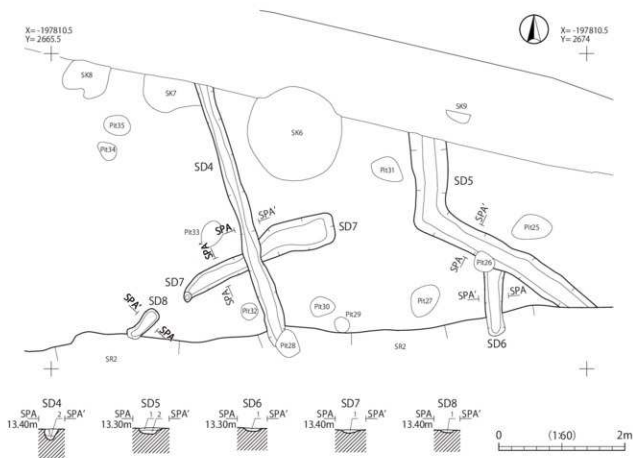
2区中央の07グリッドに位置する。北から南にかけて直線的に伸び、南端が西から東に方向を変える溝跡で、方向はN-2°～59°-Wである。南側は河川跡(SR2)によって削平されるが、北側は調査区外に伸びている。Pit26・SR2よりも古く、SD6・SK9よりも新しい。検出した規模は、長さ386cm以上、上端幅39cm～57cm、下端幅16cm～25cm、深さ9cm～18cmである。断面形状は皿形を呈する。底面は概ね平坦で、東から西へ南から北に向かって傾斜する。堆積土を2層に分層した。1層は褐灰色土ブロックを含むにぶい黄橙色砂質シルト、2層はにぶい黄橙色土粒を含む灰黄褐色シルトで、全て自然堆積である。

遺物は出土していない。



図録番号	発掘地点	層位	種類	双標	寸法 (cm)			外面調整	内面調整	備考	写真掲載
					口径	底径	深さ				
I B-2	区画①	V層	弥生土器	壺/鉢	—	10.2	(2.3)	早期丸・横文	FF 輪縁直		25-1

第25図 VIIb層水田跡出土遺物



断面表

図録名	グリッド	方向	幅 (cm)				層位	土色	土性	備考	重複
			全長	上幅	下幅	深さ					
SD4	06・11	N-17°-W	(437)	21	6	8	1	10YR6/3 に近い黄褐色	砂質シルト	褐色土ブロック(5～30mm程度)を少量に含む。	Pr28, SR2より古く、SD7, SK7より新しい。
				32	18	21		2	10YR4/1 褐色		
SD5	07	N-2°-59°-W	(386)	30	16	9	1	10YR6/3 に近い黄褐色	砂質シルト	褐色土ブロック(5～30mm程度)を少量に含む。	Pr26, SR2より古く、SD6, SR9より新しい。
				57	25	18		2	10YR5/2 灰黄褐色		
SD6	07	N-2°-W	(108)	26	15	4～6	1	10YR5/1 褐色	シルト	褐色土ブロック(5～10mm程度)を多量に含む。	SD5, Pr26, SR2より古い。
SD7	06・07	N-55°-77°-E	260	28	14	2～8	1	10YR6/3 に近い黄褐色	砂質シルト	褐色土ブロック(5～20mm程度)を多量に含む。	SD4より古い。
SD8	06	N-44°-E	(61)	18	10	4～6	1	10YR6/3 に近い黄褐色	砂質シルト	褐色土ブロック(5～20mm程度)を少量に含む。	SD2より古い。

第26図 SD4～8溝跡平面図・断面図

SD6 溝跡

2区中央の07グリッドに位置する。北から南にかけて直線的に延び、方向はN-2°-Wである。北側はSD5と重複し、南側は河川跡(SR2)によって削平される。SD5・Pit26と重複し、それよりも古い。検出した規模は、長さ108cm以上、上端幅26cm～33cm、下端幅15cm～21cm、深さ4cm～6cmである。断面形状は皿形を呈する。底面は概ね平坦で、北から南に向かって若干傾斜する。堆積土は、にぶい黄橙色土ブロックを含む褐灰色シルトの単層で、自然堆積である。

遺物は出土していない。

SD7 溝跡

2区中央の06・07グリッドに位置する。北東から南西にかけて概ね直線的に延び、方向はN-55°～77°-Eである。SD4と重複し、それよりも古い。検出した規模は、長さ269cm、上端幅28cm～53cm、下端幅14cm～35cm、深さ2cm～8cmである。断面形状は皿形を呈する。底面は概ね平坦で、南西端はビット状に窪む。堆積土は、褐灰色土ブロックを含むにぶい黄橙色砂質シルトの単層で、自然堆積である。

遺物は出土していない。

SD8 溝跡

2区中央の06グリッドに位置する。北東から南西にかけて概ね直線的に延び、方向はN-44°-Eである。南西側は河川跡(SR2)によって削平される。SR2と重複し、それよりも古い。検出した規模は、長さ61cm以上、上端幅18cm～23cm、下端幅10cm～16cm、深さ4cm～6cmである。断面形状は皿形を呈する。底面は概ね平坦で、北東から南西に向かって傾斜する。堆積土は、褐灰色土ブロックを含むにぶい黄橙色砂質シルトの単層で、自然堆積である。SD7とは位置や土層の堆積状況などが共通することから、同一の溝跡であると考えられる。遺構番号については、溝跡がいったん途切れるため別とした。

遺物は出土していない。

(3) 土坑(第9・27図)

SK6 土坑

2区中央の06・07グリッドに位置する。平面形状は円形、断面形状は逆台形を呈する。規模は、長軸149cm、短軸148cm以上、深さ53cmを測る。堆積土を2層に分層した。1層はにぶい黄橙色砂質シルト、2層は褐灰色土ブロック含む灰黄褐色シルトで、全て自然堆積である。

遺物は土師器が出土しているが、小破片のため図化できなかった。

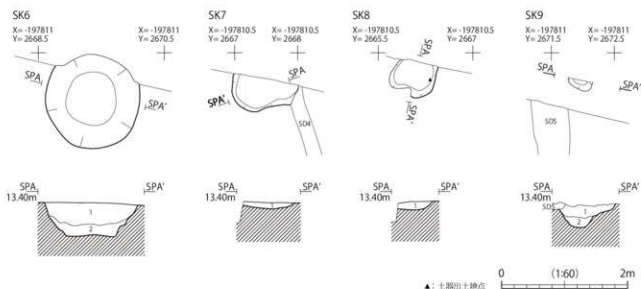
SK7 土坑

2区中央の06グリッドに位置する。SD4と重複し、それよりも古い。平面形状は楕円形と推定され、断面形状は皿形を呈する。規模は、長軸104cm以上、短軸55cm以上、深さ13cmを測る。堆積土は、褐灰色土ブロックを含むにぶい黄橙色砂質シルトの単層で、自然堆積である。

遺物は出土していない。

SK8 土坑

2区中央の06グリッドに位置する。平面形状は楕円形と推定され、断面形状は皿形を呈する。規模は、長軸



観測表

遺構名	グリッド	平面形	規模 (cm)		層位	土色	土性	備考	参照
			長軸×短軸	深さ					
SK6	06・07	円形	149×(148)	53	1	10YR6/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	炭化物ブロック (5～20mm程度) を微量に含む。	
					2	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	褐灰色土ブロック (5～50mm程度) を多量に含む。	
SK7	06	(楕円形)	(104)×(55)	13	1	10YR6/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	褐灰色土ブロック (5～30mm程度) を少量に含む。	SD4より古い。
SK8	06	(楕円形)	(71)×(57)	14	1	10YR6/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	褐灰色土ブロック (5～30mm程度) を少量に含む。	
SK9	07	(円形)	(40)×(16)	(12)	1	10YR5/1 期灰色	シルト	にぶい黄褐色土ブロック (5～10mm程度) を少量に含む。	
					2	10YR6/1 期灰色	シルト	にぶい黄褐色土ブロック (5～10mm程度) を少量に含む。	SD5より古い。
SK15	03・06	—	(111)×—	(23)	1	10YR5/4 暗褐色	シルト	にぶい黄褐色土ブロック (10～50mm程度) を少量に含む。 ※之は北壁面にて確認	

第27図 SK6～9・15土坑平面図・断面図

71cm以上、短軸57cm以上、深さ14cmを測る。堆積土は、褐灰色土ブロックを含むにぶい黄褐色砂質シルトの単層で、自然堆積である。

遺物は出土していない。

SK9土坑

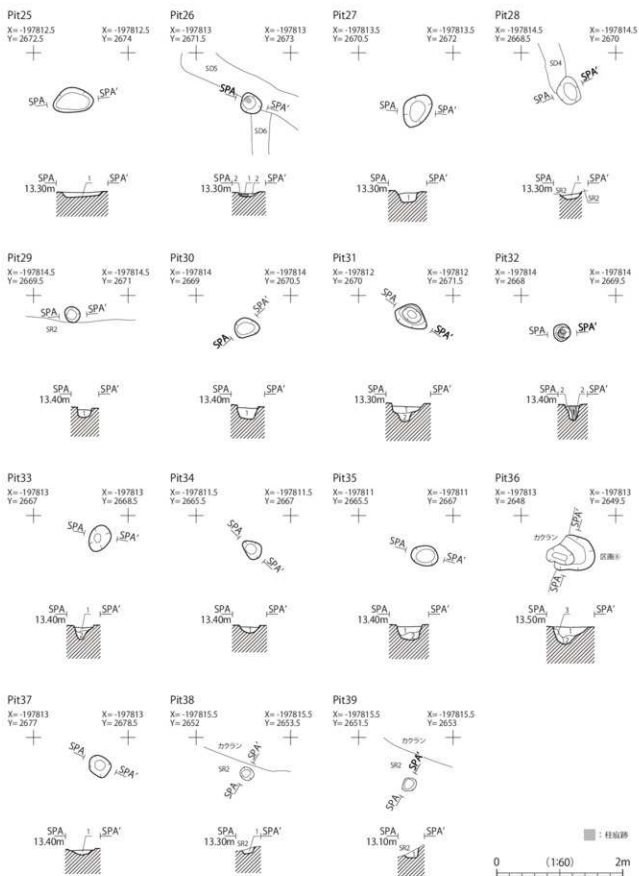
2区中央の07グリッドに位置する。SD5と重複し、それよりも古い。平面形状は円形と推定され、断面形状は概ね逆台形を呈するが、東側の立ち上がりは大きく開く。規模は、長軸40cm以上、短軸16cm以上、深さ12cm以上を測る。堆積土を2層に分層した。いずれもにぶい黄褐色土ブロックを含む褐灰色シルトで、自然堆積である。土色は下層のほうがやや明るい。

遺物は出土していない。

SK15土坑(第9図)

2区中央の03・06グリッドに位置する。北壁断面で検出した。平面形状は不明、断面形状は逆台形を呈する。検出規模は、幅111cm以上、深さ23cm以上を測る。堆積土は、にぶい黄褐色土ブロックを含む暗褐色シルトの単層で、自然堆積である。

遺物は出土していない。



第28図 ビット平面図・断面図

ピット (Ⅶb層上面) 観察表

遺構名	グリッド	平面形	規 模 (cm)		層位	土 色	土 性	備 考	重 複
			長軸×短軸	深さ					
Pit25	07	楕円形	65×39	10	1	10YR6/3 に近い黄褐色	砂質シルト		SD5-6より新しい。
Pit26	07	円形	33×31	9	1	10YR6/3 に近い黄褐色	砂質シルト	黒灰色土を縦帯状に含む。 ※柱痕跡	
					2	10YR6/3 に近い黄褐色	砂質シルト	黒灰色土ブロック (5～20mm程度) を多量に含む。	
Pit27	07	楕円形	56×40	19	1	10YR6/3 に近い黄褐色	砂質シルト	黒灰色土ブロック (20mm程度) を少量に含む。	
Pit28	06・11	(楕円形)	(45)×(35)	(12)	1	10YR6/3 に近い黄褐色	砂質シルト	黒灰色土ブロック (20mm程度) を少量に含む。	SR2より古く、SD4より新しい。
Pit29	06・07	(円形)	(25)×(25)	15	1	10YR6/3 に近い黄褐色	砂質シルト	黒灰色土粒を微量に含む。	
Pit30	06・07	楕円形	39×31	22	1	10YR6/3 に近い黄褐色	砂質シルト	黒灰色土粒を少量、炭化物ブロック (10～30mm程度) を含む。	
Pit31	07	楕円形	55×38	31	1	10YR6/3 に近い黄褐色	砂質シルト	黒灰色土粒を少量に含む。	
					2	10YR5/1 黒灰色	砂質シルト	にに近い黄褐色ブロック (5～10mm程度) を少量に含む。	
Pit32	06	円形	27×27	26	1	10YR6/3 に近い黄褐色	砂質シルト	黒灰色土粒を微量に含む。 ※柱痕跡	
					2	10YR6/3 に近い黄褐色	砂質シルト	黒灰色土ブロック (5～30mm程度) を少量に含む。	
Pit33	06	楕円形	44×32	23	1	10YR6/3 に近い黄褐色	砂質シルト	黒灰色土ブロックを密に含む。	
					2	10YR4/1 黒灰色	シルト	にに近い黄褐色土ブロック (5～40mm程度) を多量に含む。	
Pit34	06	楕円形	34×27	12	1	10YR6/3 に近い黄褐色	砂質シルト	黒灰色土ブロック (5～50mm程度) を多量に含む。	
					1	10YR6/3 に近い黄褐色	砂質シルト	黒灰色土ブロック (5～50mm程度) を多量に含む。	
Pit35	06	楕円形	43×32	24	2	10YR4/1 黒灰色	シルト	にに近い黄褐色土粒を微量に含む。	
					1	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	暗褐色土ブロック (5mm程度) を微量に含む。	
Pit36	04	(楕円形)	(75)×59	48	2	10YR4/3 黒灰色	粘土質シルト	にに近い黄褐色土ブロック (5mm程度) を少量に含む。	
					3	10YR4/3 に近い黄褐色	砂質シルト	暗褐色土ブロック (5～10mm程度) を少量に含む。	
					1	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	にに近い黄褐色土ブロック (10～20mm程度) を多量に含む。	
Pit37	07	楕円形	35×30	12	1	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	にに近い黄褐色土ブロック (10～20mm程度) を多量に含む。	
Pit38	10	(円形)	(22)×(20)	(12)	1	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	にに近い黄褐色土ブロック (5mm程度) を多量に含む。	
Pit39	10	(楕円形)	(21)×(20)	(18)	1	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	にに近い黄褐色土ブロック (5～10mm程度) を多量に含む。	

(4) ピット (第28図)

ピットは15基 (Pit25～39) を検出した。分布は、概ね2区中央の06グリッド周辺に集中する。Pit38・39は2区西側の10グリッド、河川跡内の肩口部分で検出した。柱痕跡が確認できたものはPit26・32である。建物跡や柱列跡を構成する配置は確認できなかった。

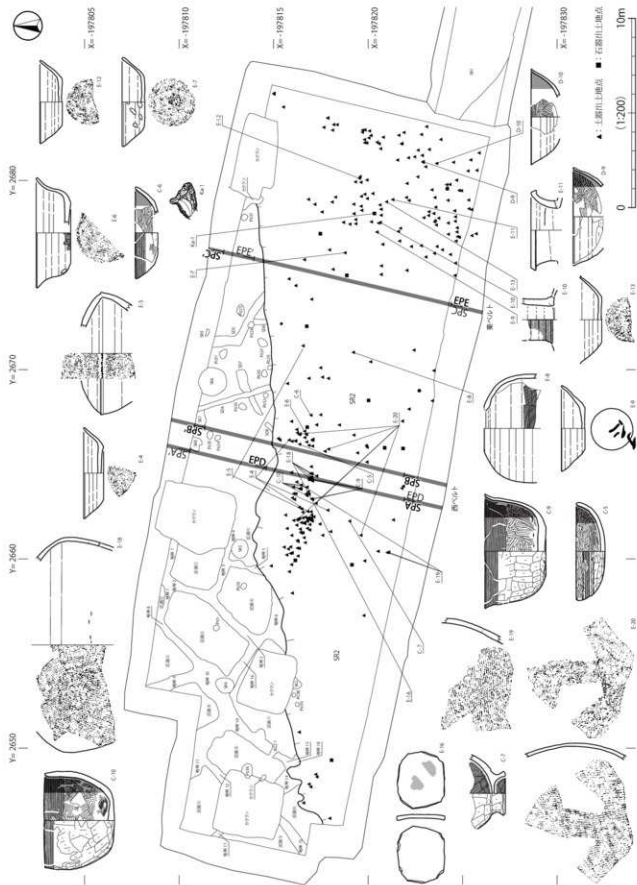
遺物はPit32の堆積土から土師器が出土しているが、小破片のため図化できなかった。

(5) 河川跡 (第29～35図)

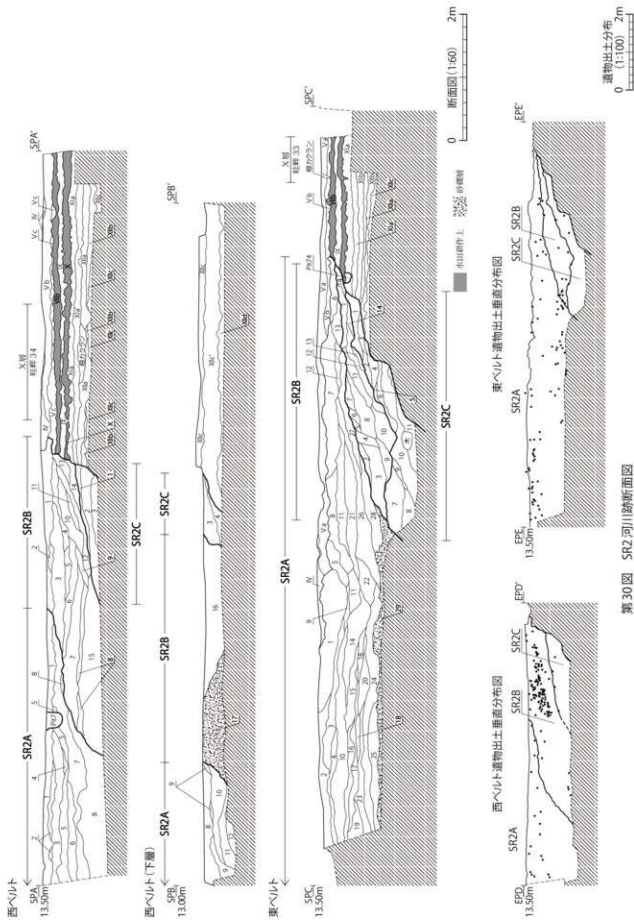
SR2河川跡

2区の06～13・15～18・21・22グリッドに位置する。Ⅶb層水田跡、SD4～6・8と重複し、それらより新しい。南岸は調査区外の南側へ広がるため、確認できなかった。2区南側については学校施設課との事前協議により、外周フェンスや防球ネットポール等の基礎から2m～3m程度離して調査区を設定することになっていた。そのため、平面及び断面形状はともに詳細は不明である。検出した規模は、長さ3.950cm以上、幅1.170cm以上、深さ100cm以上を測る。堆積土の観察から大きく3つの時期の河川跡であると考えられ、新しいほうからそれぞれSR2A・SR2B・SR2Cとする。河川跡を検出した範囲内の長軸と思われる方向に対し直交するように土層観察用ベルトを2箇所設定し、それぞれ2区中央を西ベルト、2区東側を東ベルトとした。また、SR1との関係を見るために2区の東壁についても土層を記録し、合計3箇所観察を行った。各地点ごとの堆積土の状況と合わせ、SR2の変遷をみてみたい。

なお、出土した炭化材について、AMS放射性炭素年代測定分析を行った。サンプル採取位置は、第31図に示した。分析の結果、SR2B3層の炭化材は、665～772cal AD、SR2C7層の炭化材は655～759cal ADという結果が出た。詳細については第6章第1節を参照されたい。



第29図 SR2河川跡平面図



第30図 SR2河川跡断面図

SR2A 河川跡

2区南部を東西方向に流れる河川跡で、東ベルト付近ではやや蛇行し北側に入り込む。土層断面では、西ベルト1～12層、東ベルト1～29層、2区東壁1～3層が相当する。検出した規模は、長さ3,000cm以上、幅940cm以上、深さ95cm以上を測る。

各地点の土層を見ると当河川跡の堆積土は、概ね黄褐色系シルト主体で途中に砂層が見られる。東ベルトの土層堆積状況を見ると、10・18～20・24・25層などに砂層が確認でき、急激な水の流れがあったと考えられる。29層の砂礫層の位置から、河川の流れは2区南部から徐々に調査区外の南へと移る。西ベルトでは、9～12層で砂層が確認でき、11層では木質有機物を含む。東ベルトの29層に対応する砂礫層は、2区西側では南壁側溝(09・10グリッド、第31図)で確認できるため、川筋は調査区外の南へと大きく蛇行する。また、2区東壁では東・西ベルトで堆積が確認できなかった灰白色火山灰(2層)が見られた(写真図版13)。堆積状況からも、川筋は調査区外の南へ移っていったことが窺える。

SR2河川跡土層注記表(西ベルト)

河川名	層位	土色	土性	備考
SR2A	1	10YR4/3 に近い黄褐色	シルト	酸化鉄を多量、マンガンを少量に含む。
	2	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	酸化鉄を少量に含む。
	3	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	酸化鉄・マンガンを多量、黒褐色土ブロック(10mm程度)を少量、炭化物粒を微量に含む。
	4	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を少量に含む。
	5	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	酸化鉄・マンガンを多量に含む。
	6	10YR4/3 に近い黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を多量に含む。 ※上層との間に酸化鉄集積
	7	10YR4/1 赭灰色	砂質シルト	酸化鉄を多量、にに近い黄褐色砂・炭化物粒を少量に含む。
	8	10YR4/1 赭灰色	砂質シルト	にに近い黄褐色砂・酸化鉄を少量に含む。 ※グライ化
	9	2.5Y4/1 暗オリーブ灰色	砂	
	10	5GY6/1 オリーブ灰色	砂	細砂
	11	2.5Y4/1 暗オリーブ灰色	砂	木質有機物を含む。
	12	5GY3/1 暗オリーブ灰色	砂	
SR2B	1	10YR4/3 に近い黄褐色	砂質シルト	酸化鉄・マンガンを多量、炭化物ブロック(5mm程度)を微量に含む。
	2	10YR4/3 に近い黄褐色	砂質シルト	マンガンを少量に含む。
	3	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	酸化鉄・マンガンを多量に含む。
	4	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	マンガンを多量、酸化鉄を少量に含む。
	5	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を少量、炭化物粒を微量に含む。
	6	10YR5/3 に近い黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を少量、炭化物粒を微量に含む。
	7	10YR4/2 灰黄褐色	砂	酸化鉄を多量に含む。
	8	10YR4/2 灰黄褐色	砂	
	9	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	黄褐色砂を層状に含む。
	10	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	
	11	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を少量に含む。
	12	10YR4/3 に近い黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を多量に含む。
	13	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を多量に含む。
	14	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を少量に含む。 ※グライ化
	15	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	マンガンを少量に含む。
	16	2.5Y4/4 オリーブ褐色	砂	細砂
	17	10YR5/4 に近い黄褐色	砂礫	酸化鉄を含む。粗目礫(3～20mm)主体、鉄分やマンガンの浸色が著しい。
SR2C	1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	酸化鉄・マンガンを多量に含む。
	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を少量、礫(50～100mm程度)3点を含む。 ※上層との間に酸化鉄集積
	3	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を少量に含む。 ※グライ化
	4	5GY3/1 暗オリーブ灰色	砂	上層より粘土を多量に含む。

SR2 河川跡土層注記表 (乗ベルト)

河川名	層位	土色	土性	備考
SR2A	1	10YR5/4 に近い黄褐色	砂	酸化鉄を密に、白色砂を多量に含む。
	2	10YR5/4 に近い黄褐色	砂質シルト	マンガンを少量に含む。
	3	10YR5/4 に近い黄褐色	砂	酸化鉄を多量、マンガンを少量、暗褐色土ブロック (5 ~ 50mm 程度) を微量に含む。
	4	10YR5/4 に近い黄褐色	砂	酸化鉄を密に、マンガンを多量に含む。
	5	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を密に含む。 ※下層との間に酸化鉄集積
	6	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄を多量に含む。 ※互層に色調相転
	7	10YR5/4 に近い黄褐色	砂質シルト	礫 (50mm 程度)・酸化鉄を少量に含む。
	8	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を少量、礫 (50mm 程度) を微量に含む。 ※グライ化
	9	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	
	10	10YR5/4 に近い黄褐色	砂	酸化鉄を密に、マンガンを多量、暗褐色土ブロック (5 ~ 50mm 程度) を少量に含む。
	11	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	酸化鉄を微量に含む。 ※グライ化
	12	10YR4/3 に近い黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を多量に含む。
	13	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄を密に、マンガンを少量に含む。
	14	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	白色砂・酸化鉄を多量に含む。
	15	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を密に含む。
	16	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	酸化鉄を多量、暗褐色土ブロック (5 ~ 50mm 程度) を少量に含む。
	17	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	酸化鉄を少量に含む。
	18	10YR4/2 灰黄褐色	砂	酸化鉄を多量に含む。 ※下層との間に酸化鉄集積
	19	10YR4/2 灰黄褐色	砂	酸化鉄を多量に含む。
	20	10YR4/1 暗灰色	砂	酸化鉄を少量、暗灰色粗砂を帯状に含む。
	21	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	酸化鉄を微量に含む。
	22	10YR4/1 暗灰色	シルト	白色砂を少量に含む。 ※一部グライ化
	23	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を多量、炭化物物を少量に含む。
	24	10YR4/1 暗灰色	砂	酸化鉄を少量、暗灰色粗砂を帯状に含む。 ※一部グライ化
	25	10YR4/2 灰黄褐色	砂	酸化鉄を多量、白色粗砂を互層状に含む。
26	10YR4/1 暗灰色	シルト	酸化鉄・炭化物ブロック (5mm 程度) を少量に含む。 ※グライ化	
27	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	※ 12 層との間に酸化鉄が集積	
28	10YR4/1 暗灰色	シルト	酸化鉄・炭化物ブロック (5mm 程度) を少量、暗褐色土ブロック (5 ~ 50mm 程度) を微量に含む。 ※グライ化	
29	10YR5/4 に近い黄褐色	砂礫	礫 (5 ~ 100mm 程度) が主体。 ※一部グライ化	
SR2B	1	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	マンガンを多量、酸化鉄を密に含む。
	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	※グライ化
	3	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	暗褐色土ブロック (5 ~ 50mm 程度)・白色砂・酸化鉄を少量に含む。 ※グライ化
	4	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	暗褐色土ブロック (5 ~ 50mm 程度) を多量に含む。 ※グライ化
	5	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	白色砂・酸化鉄を少量に含む。
	6	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	白色砂・酸化鉄を少量に含む。
	7	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	白色砂・酸化鉄を少量に含む。
	8	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	酸化鉄を少量に含む。
	9	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	暗褐色土ブロック (5 ~ 50mm 程度) を多量に含む。 ※グライ化
	10	10YR4/3 に近い黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を密に含む。
	11	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を多量に含む。 ※グライ化
	12	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	に近い黄褐色土ブロック (5 ~ 50mm 程度)・白色砂ブロック (5 ~ 30mm 程度)・酸化鉄を少量に含む。
	13	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	に近い黄褐色土ブロック (5 ~ 50mm 程度) を多量に含む。
	14	10YR3/2 黒褐色	シルト	酸化鉄・マンガンを少量に含む。
SR2C	1	10YR4/2 灰黄褐色	砂	白色砂・酸化鉄を多量に含む。
	2	10YR5/1 暗灰色	砂質シルト	マンガンを少量に含む。
	3	10YR4/2 灰黄褐色	砂	酸化鉄を多量、マンガンを少量、暗褐色土ブロック (5 ~ 20mm 程度) を微量に含む。
	4	10YR4/2 灰黄褐色	砂	酸化鉄・マンガンを少量に含む。
	5	10YR4/1 暗灰色	砂質シルト	酸化鉄を多量に含む。 ※下層との間に酸化鉄が集積
	6	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を少量、礫 (50mm 程度) を微量に含む。 ※グライ化
	7	10YR4/1 暗灰色	砂質シルト	木片を多量に含む。砂と腐葉土の互層。 ※グライ化
	8	10YR4/1 暗灰色	砂質シルト	木片を少量に含む。砂と腐葉土の互層。 ※グライ化
	9	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	※グライ化
	10	10YR4/2 灰黄褐色	砂	黒褐色土との互層ないしうすな状互層。木片・腐葉土を多量、明褐色砂ブロック (5 ~ 30mm 程度) を少量、木屑 (250mm 程度) を 1 点含む。 ※グライ化
	11	10YR4/1 暗灰色	砂	黒色土ブロック (5 ~ 100mm 程度) を多量に含む。 ※グライ化

SR2河川跡土層注記表(2区東壁)(第19図)

河川名	層位	土色	土性	備考
SR2A	1	10WR4/4 灰褐色	シルト	灰白色火山灰を少量、塊状に含む。
	2	10WR7/1 灰白色	火山灰	灰白色火山灰層
	3	10WR5/1 褐色	砂	炭粉を塊状に含む。
SR2C	1	2.5Y4/3 オリーブ褐色	砂質シルト	粗砂ブロック(10～50mm程度)を含む。
	2	2.5Y4/1 黄灰色	シルト	
	3	2.5Y4/2 暗黄灰色	砂	粗砂ラミナ状堆積
	4	5Y4/1 灰色	シルト	
	5	5Y4/4 暗オリーブ色	シルト	黒褐色土ブロック(10mm程度)を塊状に含む。
	6	5Y5/2 灰オリーブ色	シルト	
	7	5Y4/2 灰オリーブ色	シルト	粗砂ラミナ状堆積
	8	5Y4/3 暗オリーブ色	シルト	
	9	5Y5/2 灰オリーブ色	シルト	木片を含む。
	10	5Y4/3 暗オリーブ色	砂	粗砂ラミナ状堆積
	11	5Y5/2 灰オリーブ色	砂	粗砂ラミナ状堆積
	12	5Y4/2 灰オリーブ色	砂	粗砂ラミナ状堆積
	13	5Y4/2 灰オリーブ色	砂	粗砂ラミナ状堆積

SR2B河川跡

2区中央部を東西方向に流れる河川跡である。堆積土の多くはSR2Aによって削られており、詳細は不明である。土層断面では、西ベルト1～17層、東ベルト1～14層が相当する。なお、2区東壁ではV層で検出したSR1によって削られており、確認できなかった。

各地点の土層を見ると当河川跡の堆積土は、概ね黄褐色系シルト主体で途中に粘土質シルトや砂層が見られる。また、一部グライ化する層が見られる。なお、全体として木質有機物を含む土層は確認できなかった。西ベルトの土層堆積状況を見ると、5～8層で粘土質シルトと砂層の互層を確認した。17層の砂礫層はSR2B段階の川床と推測される。東ベルトでは、砂層の堆積は確認できなかった。これは東ベルト付近でSR2A河川跡が大きく北に蛇行したことにより掘削されたものと考えられる。また、西ベルトの17層に対応する砂礫層は、2区東側では確認できなかった。なお、1・14層で黒褐色を呈する土層が確認できたが、西ベルトでは対応する層は確認できなかった。

SR2C河川跡

2区中央部を南西から北東方向に流れると推測される河川跡である。西ベルトでは、堆積土の多くがSR2Bによって削られており確認できなかった。しかし、当河川跡の方向が東ベルト以东から北東へ流れるため、東ベルト及び2区東壁では、土層堆積状況の確認が可能であった。土層断面では、西ベルト1～4層、東ベルト1～11層、2区東壁1～13層が相当する。

各地点の土層を見ると当河川跡の堆積土は、概ね灰色系シルト主体で途中に砂層が見られる。西ベルトでは堆積土が僅かのため、東ベルトと2区東壁の土層堆積状況を確認する。東ベルトは、1・3・4・10・11層で砂層が見られ、7層以下では木片や腐葉土を多く含み、土色もグライ化する。11層では流木と思われる木を確認した(第31図)。2区東壁の土層を見ると、3・7・10～13層で、粗・細砂のラミナ状堆積が見られる。9層は木片を含む。当河川跡の砂礫層は確認できなかった。



放射性炭素年代測定試料採取位置平面図



放射性炭素年代測定試料採取位置断面写真



2区 西側 南壁(北から)



2区 西側(09・10グリッド) 砂礫層(北から)



東ベルト SR2C 11層 流水検出状況(南東から)

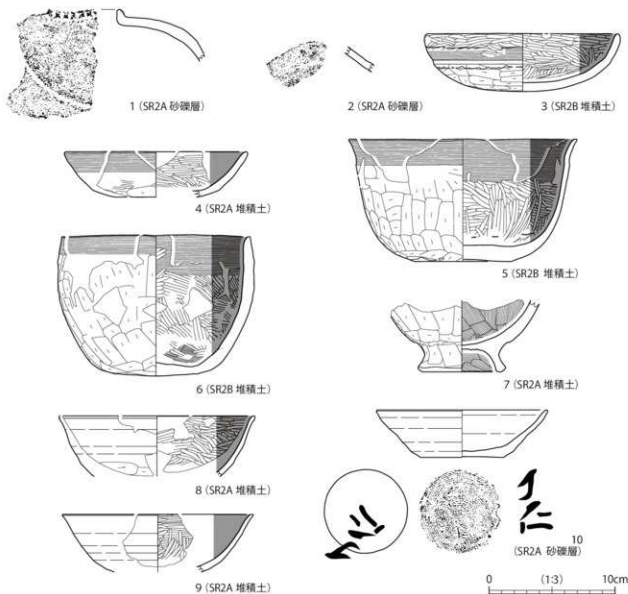


東ベルト SR2C 11層 流水断面(東から)

第31図 SR2河川跡の年代測定試料採取位置図及び河川跡内の堆積状況

出土遺物

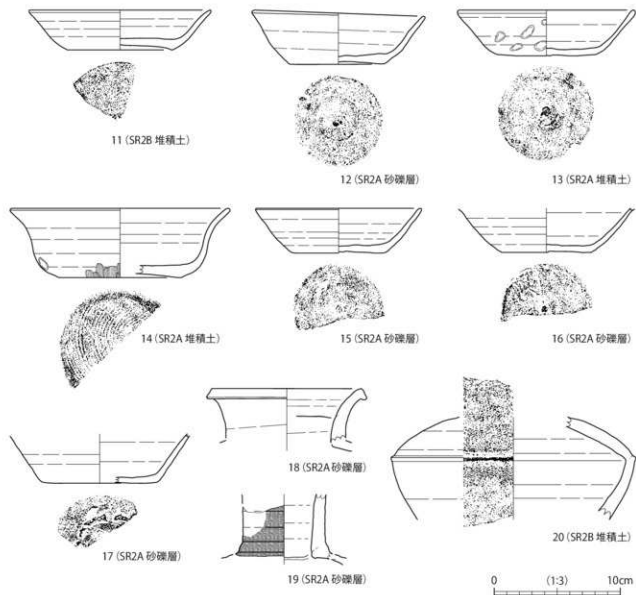
遺物は、SR2A河川跡では2区東側の12・17グリッド付近の砂礫層、SR2B河川跡では2区西側・中央の10・11グリッド付近を中心に出土している。SR2Aの砂礫層は河川跡の底面に堆積した層である。SR2Aの砂礫層からは、完形の須恵器環を中心に須恵器壺などが出土している。一方でSR2Bの上層から中層では、西ベルトを挟んだ10・11グリッド付近で、特に集中していた。遺物の出土内容としては、SR2Aと比べて破片が多かったものの、接合・復元率の高い遺物が多く出土している。これらの遺物のうち、すぐ南のSR2A堆積土から出土した破片と接合するものもみられた。それ以外の箇所では小破片が散在している状況であった。SR2Cは小破片が少量出土する程度であった。一般的に河川跡からの出土遺物は水流によって摩滅していることが多いが、今回出土した遺物からはそうした状況はみられない。縄文土器、弥生土器、土師器、ロクロ土師器、須恵器、石器、礫片が出土しており、このうち縄文土器1点、弥生土器1点、土師器5点、ロクロ土師器2点、須恵器16点、剥片石器1点、礫石器1点、計27点を図化した(第32～35図-1～27)。



0 (1:3) 10cm

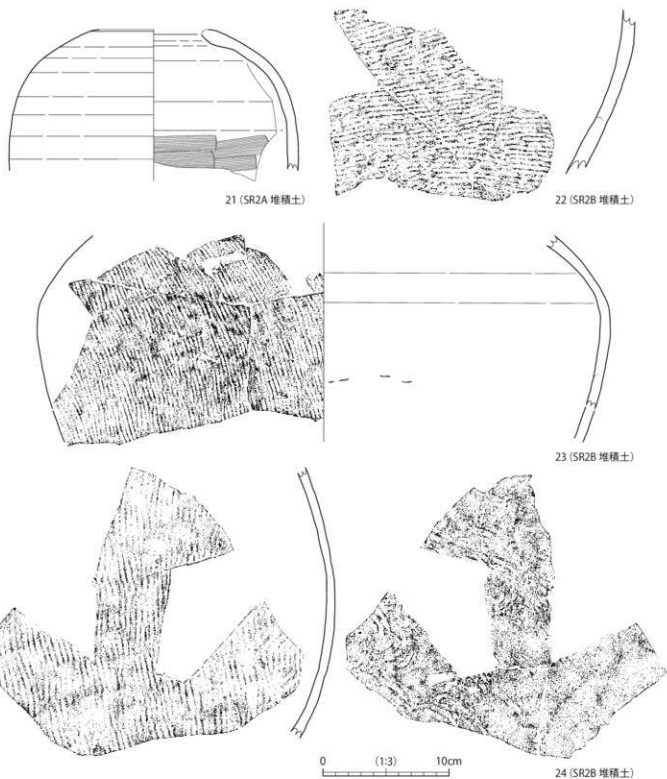
図録番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面調整	内面調整	備考	写真掲載
						口径	底径	器高				
1	A-1	SR2A	砂礫層	縄文土部	壺	—	—	(3.8)	口縁部: 011° 体部: 沈線		内外面厚減 縄文後期	23-2
2	B-1	SR2A	砂礫層	弥生土部	甗?	—	—	(3.0)	沈線 早期1段縄文	片?	内外面厚減	23-3
3	C-5	SR2B	堆積土	土師部	坏	(15.2)	—	4.6	口縁部: 32° 体部: 上部: 49° 体部: 下部: 49°	49°	内面黑色処理	23-4
4	C-6	SR2A	堆積土	土師部	坏	(14.3)	—	(3.6)	口縁部: 32° 体部: 上部: 49° 体部: 下部: 49°	49°	内面黑色処理	23-5
5	C-9	SR2B	堆積土	土師部	鉢	(18.1)	(7.7)	9.7	口縁部: 32° 体部: 49°	口縁部: 体部: 上部: 22° 体部: 下部: 49°	内面黑色処理	23-6
6	C-10	SR2B	堆積土	土師部	鉢	(14.8)	—	(12.0)	口縁部: 49° 体部: 上部: 49° 体部: 下部: 49°	口縁部: 体部: 上部: 22° 体部: 下部: 49°	内面黑色処理	23-7
7	C-7	SR2A	堆積土	土師部	台付甗	—	(6.8)	(5.7)	胴部: 49° 脚部: 49°	胴部: 49° 脚部: 49°		23-8
8	D-9	SR2A	堆積土	土師部	坏	(15.4)	—	(4.8)	口縁部: 体部: 49° 体部: 下部: 49°	49°	内面黑色処理	23-9
9	D-10	SR2A	堆積土	土師部	坏	(15.2)	—	(4.6)	49°	49°	内面黑色処理	23-10
10	E-9	SR2A	砂礫層	弥生土部	坏	(13.6)	6.7	3.7	口縁部: 体部: 49° 体部: 下部: 49°	49°	外面体部~底部に帯状口文	23-11

第 32 図 SR2 河川跡出土物 (1)



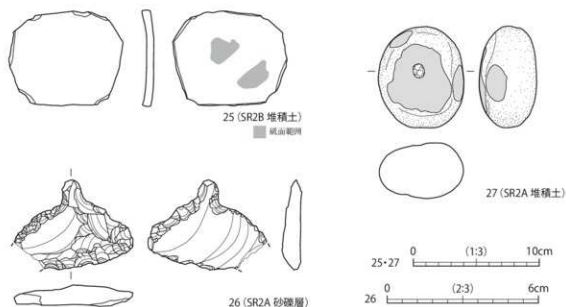
図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面調整	内面調整	備考	写真図版	
						口径	底径	器高					
11	E-4	SR2B	堆積土	陶器器	杯	(14.4)	(8.4)	3.2	口縁～体部:0?+?+ 底部:△?切の磨し	0?+?+		24-1	
12	E-15	SR2A	砂礫層	陶器器	杯	13.6	7.4	4.3	口縁～体部:0?+?+ 底部:△?切の磨し→?+	0?+?+		24-2	
13	E-7	SR2A	堆積土	陶器器	杯	13.9	7.9	3.7	口縁～体部:0?+?+ 体部:0?+?+ 底部:△?切の磨し→?+ 底部:△?切の磨し	0?+?+	大穴付き	24-3	
14	E-6	SR2A	堆積土	陶器器	杯	(17.6)	(9.8)	5.5	口縁～体部:0?+?+ 一部△?+ 体部下縁:△?+ 底部:△?切の磨し	0?+?+		24-4	
15	E-12	SR2A	砂礫層	陶器器	杯	(13.0)	(7.2)	3.6	口縁～体部:0?+?+ 底部:△?切の磨し	0?+?+		24-5	
16	E-13	SR2A	砂礫層	陶器器	杯	—	(7.1)	(3.5)	体部:0?+?+ 底部:△?切の磨し	0?+?+		24-6	
17	E-14	SR2A	砂礫層	陶器器	杯	—	(9.2)	3.5	体部:0?+?+ 底部:△?切の磨し	0?+?+		24-7	
18	E-11	SR2A	砂礫層	陶器器	短頸器?	11.9	—	(4.9)	0?+?+	0?+?+		24-8	
19	E-10	SR2A	砂礫層	陶器器	短頸器?	—	—	(5.6)	0?+?+	0?+?+	自然釉あり	大穴あり	24-9
20	E-5	SR2B	堆積土	陶器器	壺	—	—	(8.1)	0?+?+→流状文	0?+?+		24-10	

第33図 SR2河川跡出土遺物(2)



図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面調整	内面調整	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
21	E-8	SR2A	堆積土	須恵器	甕	—	—	(12.0)	0707F	0707F → 0707F		24-11
22	E-10	SR2B	堆積土	須恵器	甕	—	—	(13.8)	調整: 0707F → 平行99F	調整: 0707F → 0707F 輪結痕		24-12
23	E-18	SR2B	堆積土	須恵器	甕	—	—	(16.4)	調整: 平行99F	0707F 輪結痕		25-1
24	E-20	SR2B	堆積土	須恵器	甕	—	—	(21.0)	平行99F	古海坂市で具痕		25-2

第34図 SR2河川跡出土遺物(3)



図録番号	発掘番号	出土地点	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面調整	内面調整	備考	写真図版
						長軸	短軸	厚さ				
25	E-16	SR2B	埋積土	須恵器	転用破?	9.0	7.5	0.6	平行斜		半環切を打ち割って整形 内面に炭をらしき箇所あり	25・3

図録番号	発掘番号	出土地点	層位	種別	器種	法量 (cm)			重量 (g)	石材	備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ				
26	Ka-1	SR2A	砂礫層	打製石器	石造	3.5	4.6	0.8	10.91	珪質頁岩		25・4
27	Kc-1	SR2A	埋積土	礫石器	石・礫石	8.0	6.8	4.5	358.73	礫山石		25・5

第35図 SR2河川跡出土遺物(4)

1は縄文土器壺の口縁部から体部の破片である。口縁部には連続的な刻み目があり、体部には斜め方向に弧状の沈線が施されている。3・4は内面に黒色処理が施された土師器環である。3は体部から底部が半球状を呈しており、口縁部は緩やかに内湾気味に立ち上がる。口縁部と体部の境に僅かに段を有している。口縁部の外面には横方向のヘラミガキが施されている。4は底部が欠損しているが丸底である。体部から口縁部にかけてやや外傾気味に立ち上がる。5・6は内面に黒色処理が施された土師器鉢である。5は底部から体部にかけてやや内湾気味に立ち上がり、頸部から口縁部はやや外反し開く。外面は縦方向のヘラケズリが、内面は横方向の後に縦方向のヘラミガキが施されている。6は底部から口縁部にかけて内湾して立ち上がり、口唇部がやや直に立ち上がる。外面は縦方向のヘラケズリが施されている。7は土師器台付甕の胴部下部から脚部である。外面の脚と底部の接合部分は縦方向のヘラケズリで丁寧に調整されている。8・9はロクロ土師器環である。両者とも底部を欠損している。8は体部から口縁部にかけてやや内湾気味に立ち上がり、口縁部から口唇部にかけて外反して立ち上がる。外面の体部下部は横方向のヘラケズリが施されている。9は体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、口縁部から口唇部にかけて外反して立ち上がる。10～17は須恵器環である。底部切り離しは11・17がヘラ切り、12・13・15・16が回転ヘラ切り、10・14は回転糸切りである。10は底部から口縁部にかけてやや外傾して立ち上がる。底部は無調整である。外面の体部から底部の位置に「口仁」の文字の墨書がある¹¹⁾。13は外面の体部には人の手の指痕が見られる。14は底部から体部にかけて内湾して立ち上がり、口縁部に向けて外反しながら開く。焼成は良くなく、底部から体部下部に縦方向のヘラナデが施されている。19は須恵器長頸瓶の頸部から体部の破片である。外面には自然釉が一部見られる。頸部と胴部の境にリング状凸帯が巡っている。胎土の特徴やリング状凸帯を有していること

などから大戸窯産 KA12期の須恵器で、9世紀前半の時期に属する。20は壺の胴部である。胴部は算盤状の形状である。21は壺の胴部上部である。胴部から頸部に向けて内湾して立ち上がっている。22～24は須恵器製の胴部破片である。胴部の外面は平行タタキで調整されている。25は須恵器製の破片であるが、周辺は整形されている。内面に砥面が確認されており、転用砥の可能性もある。26は珪質頁岩の石匙である。一部欠損しているが横長の形状の石匙で表面の端部と左側縁、裏面の左側縁には二次加工が施されている。27は安山岩の礫を用いた凹・磨石で、側面と正面に磨面が見られる。

註1：墨書の文字は国立歴史民俗博物館の三上善孝教授に鑑定のおうご教示いただいた。

第3節 IX層上面検出遺構(第36・37図)

IX層は、2区の北東端(07グリッド)の上面の標高が13.14m、南西端(09グリッド)で13.27mと比高差は0.13mである。基本的に南西から北東へと傾斜しているが、全体的に緩やかな起伏がみられ、浅い窪みも各所に形成される。最も低い標高は2区中央の13.12mである。

IX層で検出した遺構は、溝跡1条(SD10)、ピット9基(Pit40～46・69・70)である。これらの遺構は、Pit70を除き2区西側に位置する。

遺物は弥生土器や土師器が出土しており、そのうち遺構外から出土した弥生土器1点を写真のみ掲載した(写真図版25～6)。

(1) 溝跡(第37図)

SD10 溝跡

2区西側の02・05・10グリッドに位置する。北東から南西にかけて直線的に延び、方向はN-37°-Eである。北側は調査区外に延びており、南側の一部は攪乱に削平され、さらにその南側ではSR2に削平される。検出した規模は、長さ969cm以上、上端幅87cm～120cm、下端幅20cm～37cm、深さ27cm～40cmである。断面形状は概ね逆台形を呈する。壁面の立ち上がりは、底部から直線的ないし外湾気味になるが、中部から上部では内湾気味となる。底面は北東側が低い。堆積土を3層に分層した。1層は暗灰黄色砂、2・3層は暗オリーブ褐色砂で、全て自然堆積である。いずれも白色の土粒及び礫片を含む。

遺物は土師器が少量に出土しているほか、3層から弥生土器の破片が出土しているが、いずれも小破片のため図化できなかった。

(2) ピット(第9・37図)

2区のみで9基(Pit40～46・69・70)を検出し、内2基(Pit69・70)は2区の北壁断面で確認した。2区中央の北側に位置するPit70を除き、2区西側に分布し、中でも最西端(04・09グリッド)に集中する。これらのピットは単層で柱痕跡はなく、形状や配置に規則性は見られない。

いずれのピットからも遺物は出土していない。



Y=2680

Y=2670

Y=2660

Y=2650

X=197805

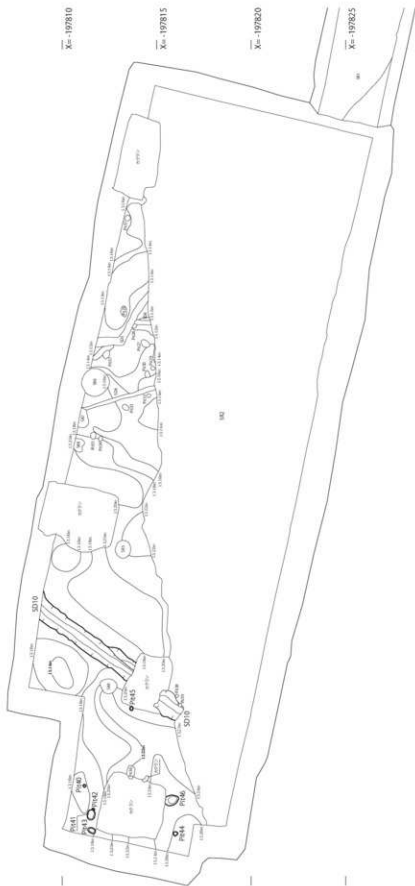
X=197810

X=197815

X=197820

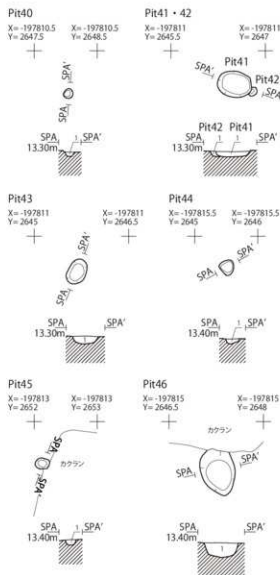
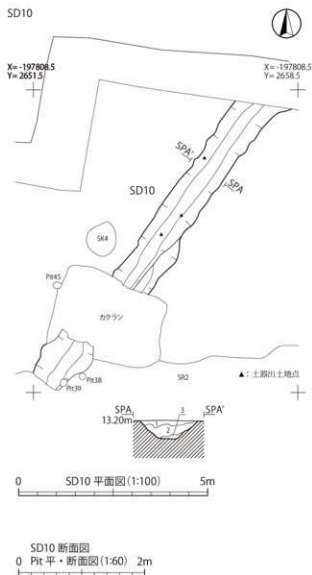
X=197825

X=197830



0 (1:200) 10m

第36图 区層上面検出遺構配置図



溝跡 (仮層上面) 観察表

遺構名	グリッド	方 向	規 模 (cm)			層位	土 色	土 性	備 考	重 複	
			全長	上幅	下幅						深 さ
SD10	02・05・10	N 37° E	(9)9	87 ~ 120	20 ~ 37	27 ~ 40	1	2.SY4/2 灰黄褐色	砂	白色土粒を微量に含む。	
					2	2.SY3/3 暗オリーブ褐色	砂	白色土粒・粗砂を少量。白色土層 (5 ~ 10mm 程度) を微量に含む。			
					3	2.SY3/3 暗オリーブ褐色	砂	礫片 (5 ~ 20mm 程度) を多量に含む。			

ピット (仮層上面) 観察表

遺構名	グリッド	平面形	規 模 (cm)		層位	土 色	土 性	備 考	重 複
			長軸×短軸	深 さ					
P#40	04	円形	16 × 15	10	1	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	にんい黄褐色土ブロック (10mm 程度) を少量に含む。	
P#41	04	楕円形	55 × 42	10	1	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	にんい黄褐色土ブロック (5 ~ 20mm 程度) を多量に含む。	P#42 より新しい。
P#42	04	円形	(17) × 11	9	1	10YR3/3 にんい黄褐色	砂質シルト	灰黄色土ブロック (5mm 程度) を少量に含む。	P#41 より古い。
P#43	04	楕円形	42 × 29	13	1	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	灰黄色土ブロック (5 ~ 10mm 程度) を多量に含む。	
P#44	09	楕円形	24 × 23	9	1	10YR2/3 黒褐色	砂質シルト	にんい黄褐色土ブロック (10mm 程度) を微量に含む。	
P#45	05	(楕円形)	(21) × 18	8	1	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	にんい黄褐色土ブロック (10mm 程度) を多量に含む。	
P#46	09	(楕円形)	(77) × 54	23	1	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	オリーブ褐色土ブロック (10mm 程度) を少量に含む。	
P#69	02	—	(47) × —	(16)	1	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	にんい黄褐色土ブロック (5 ~ 10mm 程度) を少量に含む。 ※ 2区北壁面にて確認。	
P#70	06	—	(70) × —	(21)	1	10YR3/1 黒褐色	砂質シルト	にんい黄褐色土ブロック (5 ~ 10mm 程度) を少量に含む。 ※ 2区北壁面にて確認。	

第37図 SD10溝跡、ピット平面図・断面図

第4節 X層上面検出遺構(第38～41図)

X層の水田面の標高をみると、2区の西側の区画⑬で13.13m、東側の区画⑭で13.07mと比高差は0.06mである。基本的に西が高く、東が低い地形を呈するが、調査区内で最も高い標高は2区西側の中央(05グリッド)で13.16mあり、最も低い2区中央の南西側(06グリッド)で13.01mである。

検出した遺構は、水田9区画(区画⑬～⑳・㉑・㉒・㉓)、畦畔17条(畦畔19～34・36)、ピット3基(Pit54・71・72)である。水田跡は2区の全域に広がり、ピットは2区の北壁断面で確認した。

遺物は弥生土器が出土している。

(1) 水田跡(第39～41図、第3・4表)

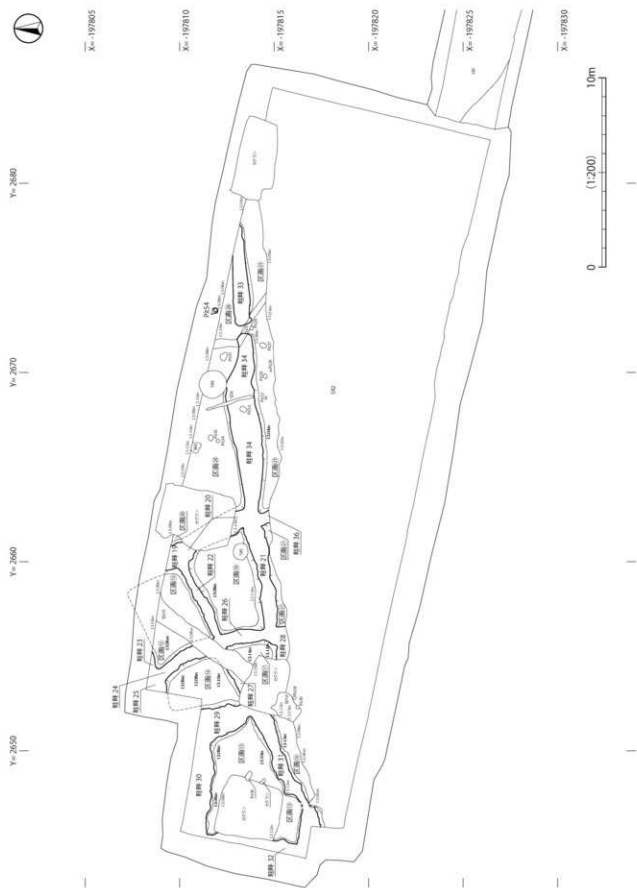
大畦畔3条(畦畔21・33・34)、小畦畔15条によって区画された、9区画の水田区画を検出した。2区の02～07・09・10グリッドに位置する。Ⅶb層上面で検出した河川跡(SR2)によって水田跡の南部は削平されている。区画⑬・⑭は調査区内で完結しているが、それ以外の区画では、SR2による削平及び調査区外であるため、水田形状は確認できなかった。畦畔と水田区画の方向から、概ね西から東に軸を揃えた水田跡であることが窺える。畦畔19・20を境とし、西側では小区画の水田が造られ、区画の東側では規模は不明であるが、大区画の水田が造られている。また畦畔22・27・31と畦畔21・33・34では、畦畔の方向が東に24°～27°ずれる。なお、水口1箇所を検出したが、水路等の施設は確認できなかった。

第3表 水田区画(X層水田跡)計測表

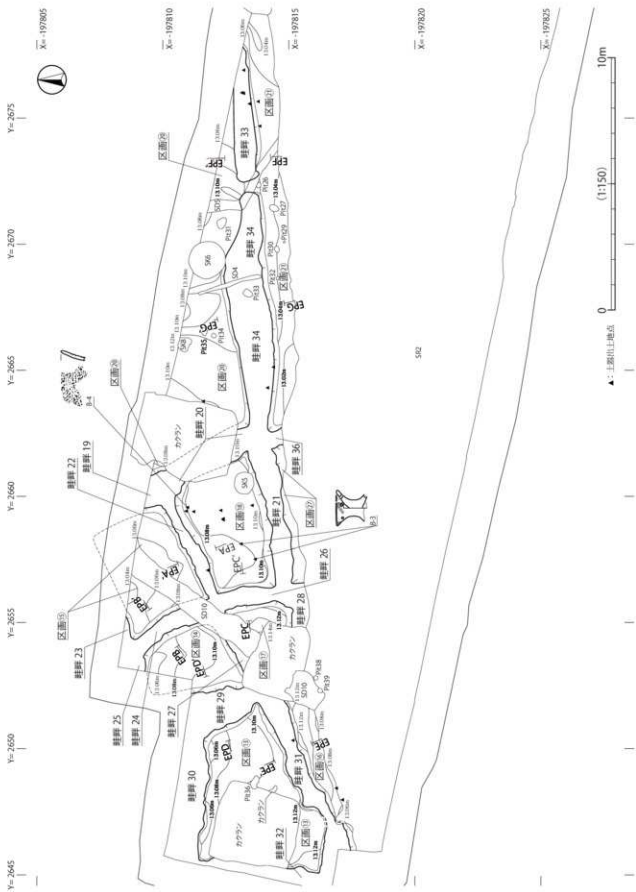
No.	最高標高(m)	最低標高(m)	区画内最大標高差(m)	東辺(cm)	西辺(cm)	南辺(cm)	北辺(cm)	面積(m ²)	備考
区画⑬	13.13	13.05	8	234	467	701	461	10.8	
区画⑭	13.11	13.05	6	241	202	189	60	(6.9)	
区画⑮	13.08	13.04	4	68	299	368	99	(12.0)	
区画⑯	13.12	13.06	6	653	—	—	—	3.0	
区画⑰	13.16	13.12	4	194	—	68	—	2.4	
区画⑱	13.10	13.07	3	304	195	489	363	(11.5)	
区画⑲	13.13	13.06	7	—	407	1206	—	17.0	
区画⑳	13.07	13.01	8	—	13	—	1494	13.3	
区画㉑	—	—	—	26	27	—	498	—	

第4表 畦畔(X層水田跡)計測表

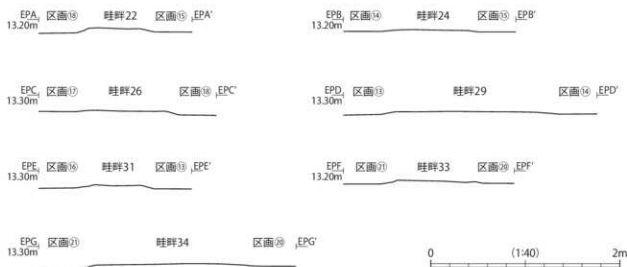
No.	方向	長さ(m)	上端幅(cm)	下端幅(cm)	水田面との比高差(cm)	備考
畦畔19	N-10°-W	0.68	119～125	182～190	1～4	
畦畔20	N-30°-W	3.93	106～116	146～191	1～2	
畦畔21	N-73°～86°-E	5.56	53～104	(115)～(157)	2～6	大畦畔
畦畔22	N-64°-E	4.20	35～60	70～97	1～5	
畦畔23	N-69°-E	0.97	最大54以上	(18)～(39)	1	
畦畔24	N-24°～43°-W	2.59	54～75	99～112	1～3	
畦畔25	N-83°-W	0.54	(95)～(109)	(119)～(120)	1～3	
畦畔26	N-3°～16°-W	2.26	54～75	98～107	1～4	
畦畔27	N-61°-E	1.12	最大46以上	(18)～(64)	2～3	
畦畔28	N-0°-E	0.69	(55)～(70)	(83)～(100)	1～2	
畦畔29	N-18°-W	2.41	90～183	130～225	1～5	
畦畔30	N-86°-W	4.78	(70)～(139)	(100)～(144)	1～3	
畦畔31	N-62°-E	2.64	33～107	55～125	2～6	
畦畔32	N-9°-E	4.78	(18)～(74)	(25)～(81)	2～6	
畦畔33	N-86°-E	3.32	63～91	(73)～(127)	1～5	畦畔34との間に水口1箇所 大畦畔
畦畔34	N-88°-E	9.46	73～161	160～194	1～6	畦畔33との間に水口1箇所 大畦畔
畦畔36	N-15°-W	0.60	57～67	—	2～6	



第38图 X層上面検出遺構配置図



第39図 X 層水田跡平面図



第40図 X層水田跡、畦畔エレベーション図

a. 区画

水田区画は9区画確認した。規模が確認または想定できた区画は、区画⑬が約6.9㎡、区画⑭が約12.0㎡、区画⑮が約11.5㎡で、区画の総面積は76.9㎡以上である。形状を想定できる区画⑬・⑭・⑮からみて畦畔20より西側では区画が狭く、それより東側では大畦畔(畦畔21・33・34)で区画され面積も大きいことが推測される。水田面の高所の標高は、区画⑭では13.11m、区画⑮では13.08m、区画⑯では13.10mを測る。また、各水田区画の比高差は、区画⑬と⑭で5cm、区画⑭と⑮で2cmを測る。全体としては南から北へ向かって緩やかに低くなる傾向が窺える。水田耕作土は、全体的に層厚が3cm～18cmを測る。2区東側の07グリッド付近で堆積が総じて薄くなっている。

b. 畦畔

畦畔は17条確認した。大畦畔は畦畔21・33・34で、それ以外は小畦畔である。畦畔の規模は、大畦畔では上端幅53cm～161cm、下端幅160cm～194cm、小畦畔では上端幅54cm～75cm、下端幅99cm～112cmを測る。小畦畔のうち畦畔29・31がやや大きく上端幅33cm～183cm、下端幅130cm～225cm、これは畦畔の高まりがわずかで耕作土との境界が不明瞭であったことによる。2区西壁では、畦畔31の続きと考えられる高まりを畦畔32の南側で確認した。水田面との比高差は畦畔22で1cm～5cm、畦畔27で2cm～3cmを測る。

遺物は畦畔33・34から弥生土器が出土しているが、小破片のため図化できなかった。

c. 水口

畦畔33と畦畔34の間に水口を1箇所確認した。水口の幅は42cm～80cmである。区画⑭は河川跡によって大きく削平されているため、本来の水田面の標高は区画⑭よりも高いものと推測される。

d. 遺物

遺物は、区画⑭・⑮・⑯から弥生土器が出土している。このうち区画⑯から出土した弥生土器2点を図化した(第41図-1・2)。

1は弥生土器口縁部の破片である。2条の連続する弧状の沈線と横方向の沈線が施されており、直線上の沈線の間には交互刺突が見られる。小破片であるため詳細は不明であるが鉢の口縁部の可能性が考えられる。2は弥生土器蓋の摘み部分である。土器焼成前に孔が開けられており、位置から3箇所の孔があったと考えられる。



図例番号	存続番号	出土地点	層位	種別	器種	寸法 (cm)			外面調整	内面調整	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	B-4	区西端	X層	弥生土器	鉢	—	—	(4.0)	甲胎LR陶文 沈殿(裏腹文・横位直腹文) 交互刺突	13°	X層出土遺物と接合	25.7
2	B-3	区西端	X層	弥生土器	蓋	横み部 (5.4)	—	(4.5)	甲胎LR陶文	22°	外面や中腹減 幅み部脱皮前穿孔(孔径3.5mm)	25.8

第41図 X層水田跡出土遺物

ピット(X層上面)観察表

遺構名	グリッド	平面形	縦横(cm)		層位	土色	土性	備考	重現
			長軸×短軸	深さ					
Pit54	07	(円形)	(30) × (30)	(24)	1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	にぶい黄褐色土ブロック(5～50mm程度)を多量に含む。 ※柱痕跡?	
Pit71	02	—	(36) × —	(10)	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	にぶい黄褐色土ブロック(5～10mm程度)を少量に含む。 ※2区北壁面にて確認	
Pit72	07	—	(46) × —	(18)	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	にぶい黄褐色土ブロック(5～50mm程度)を少量に含む。 ※2区北壁面にて確認	
					2	10YR3/1 黒褐色	シルト	灰黄褐色土ブロック(5～30mm程度)を少量に含む。 ※2区北壁面にて確認	

(2) ピット(第9・38図)

2区のみで3基(Pit54・71・72)を検出した。Pit71・72は北壁断面で確認した遺構であり、平面形状は不明である。また、ともに断面での柱痕跡はない。Pit54も北壁に接する位置にあるが、不整形の掘り方南側に円形落ち込み部分があることから、これが柱痕となる可能性もある。いずれのピットも配置や堆積土に規則性はみられず、また水田跡との関係性も不明である。

いずれのピットからも遺物は出土していない。

第5節 XI層上面検出遺構(第42～44図)

XI層は、2区の東端(13グリッド)の標高が12.98m、西端(04グリッド)で13.04mと比高差は0.06mで、全体的に西が高く、東が低い地形を呈する。標高が最も低い2区西側の北側(02グリッド)は12.91mで2区西側は南から北へ緩やかに傾斜している。2区中央及び東側は東西方向に緩やかな起伏がみられ、2区中央の東側で一旦低くなり、さらにその東側は再び高くなる。

検出した遺構は、土坑4基(SK11～13・16)、ピット18基(Pit47～53・55～63・73・74)である。2区西側に位置するSK12・13・16、Pit63を除き、2区の北東部(07グリッド)に集中する。

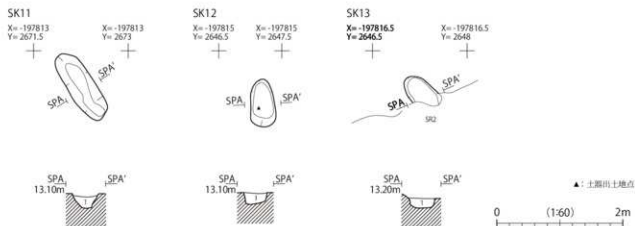
遺物は縄文土器と弥生土器が出土している。

(1) 土坑(第43図)

SK11土坑

2区の北東部の07グリッドに位置する。平面形状は長楕円形で、断面形状は逆台形を呈する。規模は、長軸122cm、短軸43cm、深さ23cmである。堆積土は、にぶい黄褐色土ブロックを含む褐灰色シルトの単層で、自然堆積である。

遺物は出土していない。



観測表

遺構名	グリッド	平面形	規模 (cm)		層位	土色	土性	備考	重 複
			長軸×短軸	深さ					
SK11	07	長楕円形	122×43	23	1	10YR5/1 黒灰色	シルト	にぶい黄褐色土ブロック(5～60mm程度)を少量、炭化物粒を微量に含む。	
SK12	09	楕円形	76×40	19	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	にぶい黄褐色砂ブロック(5～10mm程度)を少量に含む。	
SK13	09	(楕円形)	(66)×39	17	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	にぶい黄褐色砂ブロック(5mm程度)を少量に含む。	
SK16	09	—	(52)×—	(25)	1	10YR3/1 黒褐色	シルト	灰黄褐色土ブロック(10～50mm程度)を少量に含む。 ※2区内壁面にて確認	

第43図 SK11～13・16土坑平面図・断面図

SK12土坑

2区西側の09グリッドに位置する。平面形状は楕円形で、断面形状は箱形を呈する。規模は、長軸76cm、短軸40cm、深さ19cmである。堆積土は、にぶい黄褐色砂ブロックを含む黒褐色シルトの単層で、自然堆積である。

遺物は弥生土器が1点出土しているが、小破片のため図化できなかった。

SK13土坑

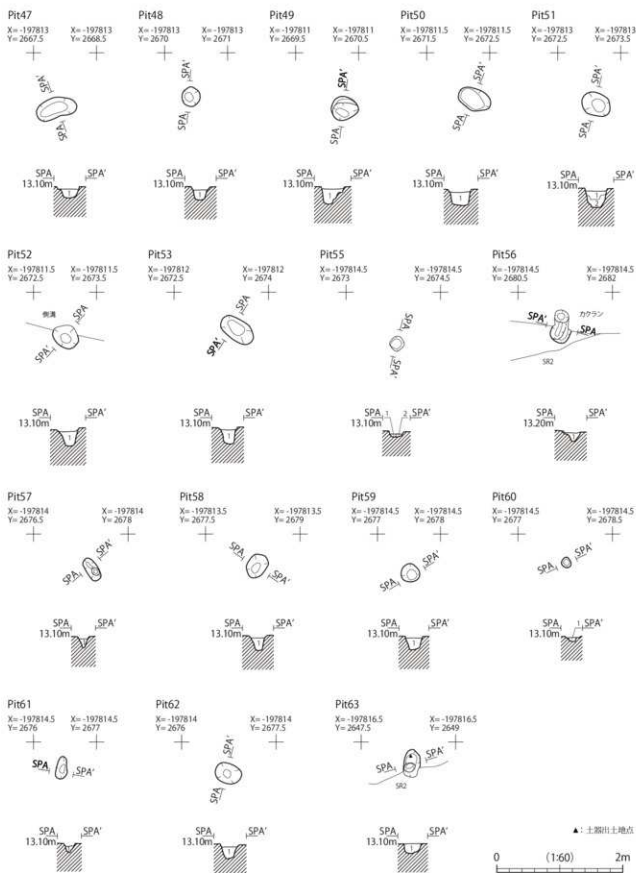
2区西側の09グリッドに位置する。SR2と重複し、それより古く、南半部分がSR2により削平される。平面形状は楕円形と推定され、断面形状は箱形を呈する。規模は、長軸66cm以上、短軸39cm、深さ17cmである。堆積土は、にぶい黄褐色砂ブロックを含む黒褐色シルトの単層で、自然堆積である。

遺物は出土していない。

SK16土坑(第9図)

2区西側の西壁断面で確認した土坑で、09グリッドに位置する。平面形状は不明で、断面形状はU字状を呈するが、底部は緩い凹凸がある。規模は、幅52cm以上、深さ25cm以上である。堆積土は、灰黄褐色土ブロックを含む黒褐色シルトの単層で、自然堆積である。

遺物は出土していない。



第44図 ビット平面図・断面図

ピット (XII層上面) 観察表

遺構名	グリッド	平面形	縦 横 (cm)		層位	土 色	土 性	備 考	重 複
			長軸×短軸	深さ					
Pit47	06	楕円形	65×32	18	1	10YR6/3 に近い黄褐色	シルト	黒灰色土ブロック (5～10mm 程度) を多量に含む。	
Pit48	07	円形	31×29	21	1	10YR5/1 黒灰色	シルト	黒灰色土ブロック (5～20mm 程度) を少量に含む。	
Pit49	07	円形	43×39	28	1	10YR5/1 黒灰色	シルト	に近い黄褐色土ブロック (5～40mm 程度) を少量に含む。	
Pit50	07	楕円形	54×35	27	1	10YR5/1 黒灰色	シルト	に近い黄褐色土ブロック (5～30mm 程度) を少量に含む。	
Pit51	07	楕円形	48×37	31	1	10YR5/1 黒灰色	シルト	に近い黄褐色土ブロック (5～10mm 程度) を微量に含む。	
					2	10YR5/1 黒灰色	シルト	に近い黄褐色土ブロック (5～30mm 程度) を多量に含む。	
Pit52	07	(円形)	(43)×(36)	30	1	10YR5/1 黒灰色	シルト	に近い黄褐色土ブロック (5～30mm 程度) を少量に含む。	
Pit53	07	楕円形	58×33	29	1	10YR5/1 黒灰色	シルト	に近い黄褐色土ブロック (5mm 程度) を少量に含む。	
Pit55	12	(横丸方形)	(22)×(21)	(11)	1	10YR5/1 黒灰色	シルト	に近い黄褐色土粒を少量に含む。	
					2	10YR6/3 に近い黄褐色	シルト	黒灰色土ブロック (5～20mm 程度) を微量に含む。	
Pit56	08・13	(楕円形)	(52)×32	22	1	5Y3/2 オリーブ黒色	シルト	暗オリーブ色土を微量に含む。	
Pit57	07	楕円形	39×19	20	1	5Y3/1 オリーブ黒色	シルト	暗オリーブ色土を微量に含む。	
Pit58	07	楕円形	40×29	25	1	5Y3/1 オリーブ黒色	シルト	暗オリーブ色土ブロック (5～10mm 程度) を少量、炭化物粒を微量に含む。	
Pit59	07・12	円形	30×28	22	1	5Y3/1 オリーブ黒色	シルト	暗オリーブ色土ブロック (5～10mm 程度) を少量に含む。	
Pit60	07・12	円形	16×15	10	1	5Y2/2 オリーブ黒色	シルト	暗オリーブ色土ブロック (5mm 程度) を中量に含む。	
Pit61	07・12	楕円形	36×18	22	1	5Y2/2 オリーブ黒色	シルト	暗オリーブ色土ブロック (5mm 程度) を少量に含む。	
Pit62	07	楕円形	42×31	26	1	5Y3/1 オリーブ黒色	シルト	暗オリーブ色土粒、炭化物粒を微量に含む。	
Pit63	06	(楕円形)	(44)×26	16	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	砂粒を少量に含む。 ※下平部にマンガン沈着	
Pit73	06	—	(29)×—	(19)	1	10YR5/1 黒灰色	シルト	に近い黄褐色土ブロック (5～30mm 程度) を微量に含む。 ※2区北壁面にて確認	
Pit74	07	—	(17)×—	(11)	1	10YR3/1 黒褐色	シルト	灰黄褐色土ブロック (5～20mm 程度) を多量に含む。 ※2区東ベルト壁面にて確認	

(2) ピット (第9・44図)

2区のみで18基 (Pit47～53・55～63・73・74) 検出した。Pit73は北壁断面、Pit74は東ベルト付近に位置する遺構であり、平面形状は不明である。2区の北東部及び南西部に分布し、特に北東部ではIX層に比べて著しく増加する。ピットの配置に規則性がみられないものが大部分を占めるが、柱間距離がPit48と51、Pit49と52で270cm程度、Pit48と49、Pit51と52で180cm程度あり、1間×1間、あるいは調査区外の柱穴を想定すれば1間×2間以上の掘立柱建物跡の可能性が考えられる。また、断面上で柱痕跡はいずれのピットもないが、Pit56・57・63において底面に柱の重みによると思われる窪みを確認したが、詳細は不明である。

遺物はPit63から弥生土器が出土しているが、小破片のため図化できなかった。

第6節 XII層上面検出遺構(第5・45・46図)

XII層は、5層(XII a・XII b・XII c・XII d)に細別し、XII c層上面のみ遺構を検出した。

XII c層は2区東端での上面の標高が12.50 m、西端が12.70 mと比高差は0.20 mで、西が高く、東が低い地形を呈する。全体的にXI層の地形と同じで、2区西側では南から北へ緩やかに傾斜している。2区中央及び東側でも同様に東西方向に緩やかな起伏がみられ、2区東側の中央で標高12.45 mと最も低くなり、さらにその東側は再び高くなる。

検出した遺構は、XII c層からピット2基(Pit64・65)を検出した。これらの遺構は、いずれも2区西側に位置する。

遺物は縄文土器が出土している。ここでは、下層トレンチの調査の報告も踏まえ、細別層ごとに記載する。

(1) XII a層(第9・30図)

XII a層上面は、西から東に向かって緩やかに傾斜する。層厚は3 cm～18.7 cmで、多少変化はあるが、ほぼ一定に堆積している。遺構の検出はなく、遺物は縄文土器が1点出土しているが、小破片のため図化できなかった。

(2) XII b層(第9・30図)

XII b層上面は、南西から北東に向かって緩やかに傾斜する。層厚はXII a層に比べて薄く0.3 cm～1.3 cmで、一部途切れている所もあるが、全域に堆積している。遺構の検出はなく、遺物は縄文土器が1点出土しているが、小破片のため図化できなかった。

(3) XII c層(第9・30・45・46図)

XII c層上面は、南西から北東に向かって緩やかに傾斜するが、2区中央から東側にかけて傾斜の度合いが大きくなる。層厚は4.2 cm～12.5 cmとXII a層とほぼ同じ厚さで、全域に堆積している。遺構はピット2基(Pit64・65)を2区で確認した。いずれも柱痕跡はない。分布は2区西側に点在する。互いの間の距離は6 m程度離れており、これらの配置に規則性はないと考えられる。

これらのピットから遺物は出土していないが、基本層から縄文土器の破片が2点出土しており、このうち縄文土器深鉢の破片1点を図化した(第46図-1)。摩滅している小破片である。

(4) XII c'層(第5・9・30図)

XII c'層の調査は、2区西側及び2区中央の3箇所に下層トレンチを設定して、限定的に調査を行った。各下層トレンチは、2区西側は最西端の攪乱部分(トレンチ1)及び調査区内への出入り口の東側(トレンチ3)、2区中央は西ベルトの東際(トレンチ2)である。南西から北東に向かって緩やかに傾斜する。層厚は20 cm～39 cmとXII層の中で最も厚く、下層トレンチ内での確認だが、全域に堆積していると考えられる。遺構の検出はなく、遺物も出土していない。

(5) XII d層(第5・9・30図)

XII d層の調査もXII c'層調査と同じトレンチで行った。北から南へSR2の方向に緩やかに傾斜する。層厚は25 cm以上である。遺構の検出はなく、遺物も出土していない。



Y=2680

Y=2670

Y=2660

Y=2650

X=197805

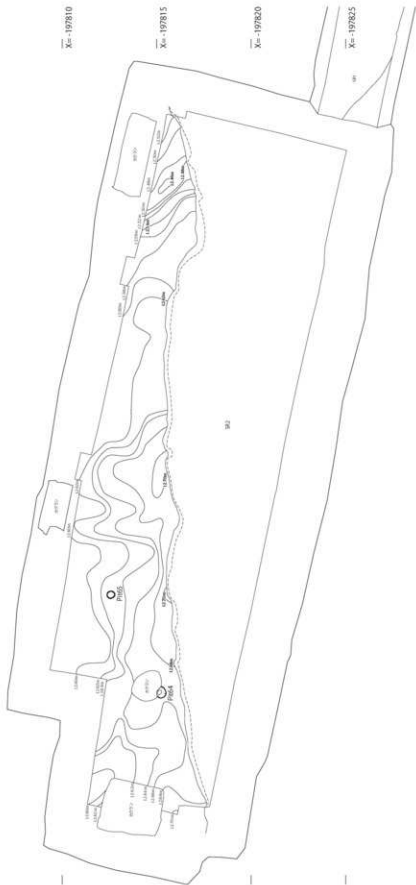
X=197810

X=197815

X=197820

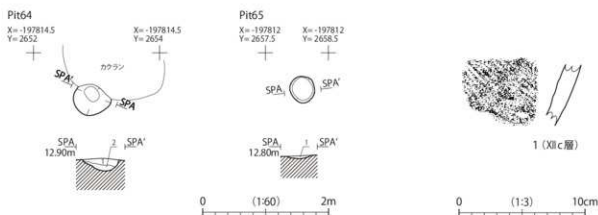
X=197825

X=197830



0 (1:200) 10m

第 45 図 XII c 層上面検出遺構配置図



ピット (00c層上面) 観察表

遺構名	グリッド	平面形	縦 横 (cm)		層位	土 色	土 性	備 考	重 複
			長軸×短軸	深さ					
Pit64	05・10	円形	60×50	50	1	10YR4/4 褐色	砂質シルト	黒色粘土ブロック (10～20mm程度) を少量に含む。	
					2	10YR5/6 黄褐色	粘土質シルト		
Pit65	05	円形	43×37	5	1	10YR4/4 褐色	砂質シルト	黒色粘土ブロック (5mm程度) を少量に含む。	

00c層遺構外出土遺物観察表

採取 番号	発見 地点	出土 地点	層位	種 別	器 種	法 量 (cm)			外面調整	内面調整	備 考	写真 撮影
						C径	底径	器高				
1	A-2	2区	00c層	縄文土器	深鉢	—	—	(4.0)	甲部瓦 縄文	片?	内外面厚減	25.9

第46図 ピット平面図・断面図、XIIc層出土遺物

第7節 1区の調査 (第10・14・18・19図)

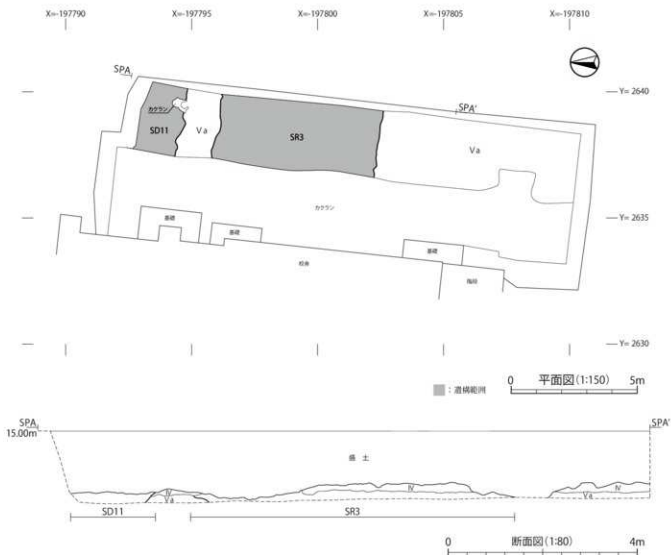
1区は、2区の東に隣接する東西19.0m、南北4.6mの調査区である。調査区全体の東1/3程度が掘乱により削平されている。調査区の幅が狭い上に、盛土層の状態が安定していなかったことから、安全を考え、V層以下の掘り下げは行わなかった。検出した遺構は2区から続く河川跡1条 (SR1) と土坑1基 (SK10) を検出した。遺構については第5章第1節で詳述しており、ここでは省略する。遺構以外から出土した遺物は土師器、陶器の破片が少量出土しているが、いずれも小破片のため図化できなかった。

第8節 3区の調査 (第47図)

3区の調査は、第3章で述べた理由から当初予定の期間では実施することができなかったため、1・2区の調査終了後、校舎増築本体工事の準備工事として稼働中の埋設管を切り替える工程の中で行うこととなった。南北22m、東西6.0mの調査区である。調査は、工事掘削の最大深度 (G.L.-1.5m) に達するまでに、2区で確認した竪穴遺構・水田跡といったV～VII層での遺構の検出や遺物がまとめて確認された場合に、遺構掘り込みの調査を行うという手順で調査区の北側から進めた。V層上面を確認した標高は、13.60m～13.68mで、現地表面からの深さはG.L.-1.4m～1.6mであった。3区西半は、既存校舎の建設工事の段階ですでに削平されている。3区東半では遺構確認のみとし、掘り込みは行わなかった。また、掘削深度より下となるVI層以下の調査については行わないこととなった。なお、3区の位置は、2区西端から5m離れている (第3章第5図参照)。

V層上面で検出した遺構は、溝跡1条 (SD11)、河川跡1条 (SR3) である。これらの遺構は、3区の中央から北半部に位置する。なお、南半部では遺構は確認できなかった。検出面の土の締めりはやや硬く、特に南側に向かうにつれて顕著であった。これは本調査区が学校正門の通用口付近に位置するため、車両等の往来の影響によるものと思われる。

遺物は出土していない。



第47図 3区遺構配置図及び調査区断面図

SD11 溝跡

検出状況から東西方向に延びる溝跡である。検出した範囲での規模は、長さ280cm以上、幅180cm以上を測る。検出した位置から24次調査V層で確認されたSD13の延長部分と考えたが、3区西半部分が削平されており、溝の延長が確認できないこと、SD13は幅が120cmほどで本溝跡とは規模が合わないことから別の溝跡であると判断した。堆積土は、白色礫（5mm～10mm程度）、白色粒子、小礫片を含む黒褐色シルト層である。

SR3 河川跡

検出状況から溝跡と概ね同じ東西方向に延びる河川跡であると思われる。検出した範囲での規模は、長さ280cm以上、幅688cm以上を測る。24次調査V層では河川跡が検出されていないため、詳細は不明である。堆積土の上部にIV層が残っていることから、2区で確認したSR1と関係する河川跡の可能性が考えられる。堆積土は、褐色土シルトを少量、小円礫（5mm～15mm程度）を多く含む砂礫層である。北部のシルト部分では粗砂がラミナ状堆積が確認できた。

第6章 自然科学分析

第1節 富沢遺跡(第154次調査)における放射性炭素年代(AMS測定)

株式会社 加速器分析研究所

1. 測定対象試料

富沢遺跡第154次調査地点は、宮城県仙台市太白区富沢2丁目201に所在し、荒川の旧河道に立地する。測定対象試料は、河川跡SR2と竪穴遺構SI1から出土した炭化物、炭化材の合計3点である(表1)。なお、SI1から出土した炭化材を対象に樹種同定が実施されている(別稿樹種同定報告参照)。

SI1はV a層上面、SR2はVII b層上面で検出された。

2. 測定の意義

調査した遺構の時期を考察するための参考とする。

3. 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1 mol/l (1M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4. 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)の測定を行う。測定では、米国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5. 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ¹⁴C年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。¹⁴C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差(±1σ)は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

表1 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正值		
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)	
IAAA-230201	No.1	SR2 (河川畔2)	SR2B	炭化物	AAA	-28.45 ± 0.31	1,310 ± 20	84.90 ± 0.25
IAAA-230202	No.2	SR2 (河川畔2)	SR2C	炭化材	AAA	-28.46 ± 0.36	1,340 ± 20	84.68 ± 0.26
IAAA-230203	No.3	SI1	3期	炭化材	AAA	-27.17 ± 0.31	1,130 ± 20	86.93 ± 0.26

[IAA登録番号: #1993]

表2 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲		2 σ 暦年代範囲	
	Age (yrBP)	pMC (%)		655calAD - 686calAD (28.1%)	727calAD - 775calAD (48.2%)	650calAD - 703calAD (64.4%)	741calAD - 774calAD (31.0%)
IAAA-230201	1,370 ± 20	84.36 ± 0.24	1,309 ± 23	665calAD - 686calAD (28.1%) 743calAD - 772calAD (40.2%)	659calAD - 708calAD (47.3%) 727calAD - 775calAD (48.2%)		
IAAA-230202	1,300 ± 20	84.08 ± 0.25	1,335 ± 24	655calAD - 680calAD (52.6%) 748calAD - 759calAD (15.7%)	650calAD - 703calAD (64.4%) 741calAD - 774calAD (31.0%)		
IAAA-230203	1,160 ± 20	86.54 ± 0.25	1,125 ± 23	802calAD - 901calAD (8.9%) 916calAD - 973calAD (59.4%)	884calAD - 992calAD (95.4%)		

[参考値]

(3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMCが小さい(^{14}C が少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。

(4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差(1 σ = 68.3%)あるいは2標準偏差(2 σ = 95.4%)で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線及び較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal20較正曲線(Reimer et al. 2020)を用い、OxCalv4.4較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定の較正曲線、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

6. 測定結果

測定結果を表1、2に示す。

試料の ^{14}C 年代は、試料No. 1が1310 ± 20yrBP、試料No. 2が1340 ± 20yrBP、試料No. 3が1130 ± 20yrBPである。暦年較正年代(1 σ)は、試料No. 1が665 ~ 772cal AD、試料No. 2が655 ~ 759cal AD、試料No. 3が892 ~ 975cal ADの間に各々2つの範囲で示される。

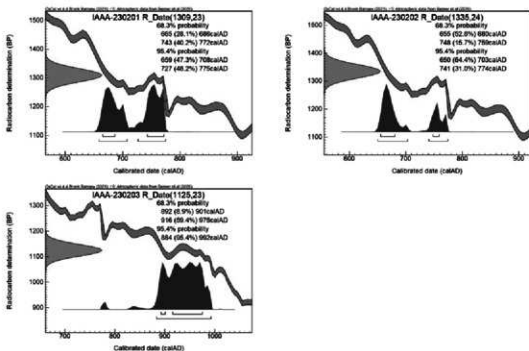
今回測定された試料は炭化物と炭化材で、炭化物としたNo. 1も炭化材である可能性がある。炭化材については次に記す古木効果を考慮する必要がある。

樹木は外側に年輪を形成しながら成長するため、その木が伐採等で死んだ年代を示す試料は最外年輪から得られ、内側の試料は年輪数の分だけ古い年代値を示す(古木効果)。今回測定された試料はいずれも樹皮が残存せず、本来の最外年輪を確認できないことから、測定された年代値は、その木が死んだ年代よりも古い可能性がある。

試料の炭素含有率はいずれも60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51 (1), 337-360
 Reimer, P.J. et al. 2020 The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP), Radiocarbon 62 (4), 725-757
 Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19 (3), 355-363



第1図 暦年較正年代グラフ(参考)

第2節 富沢遺跡(第154次調査)で出土した炭化材の樹種

株式会社 加速器分析研究所

富沢遺跡第154次調査のSI1より出土した炭化材について、樹種同定を実施した。

1. 試料

試料は、竪穴遺構SI1の3層から出土した炭化材1点(No. 3)である。なお、この同一試料を対象に放射性炭素年代測定が実施されている(別稿年代測定報告参照)。

2. 分析方法

炭化材を自然乾燥させた後、木口(横断面)、柁目(放射断面)、板目(接線断面)の3断面について断面面を複製し、アルミ合金製の試料台にカーボンテープで固定する。炭化材の周囲を樹脂でコーティングして補強する。走査型電子顕微鏡(低真空)で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本及び森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。

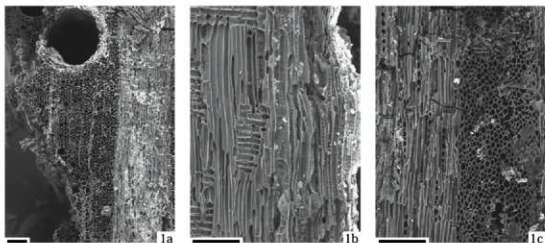
なお、木材組織の名称や特徴は、鳥地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

3. 結果

樹種同定結果、炭化材は広葉樹のコナラ属コナラ節に同定された。解剖学的特徴等を記す。

・コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Primus* ブナ科

環孔材。年輪の始め(早材部)には大型の道管が1~2列配列する。晩材部では、小径の道管が集まって火災状に



1. コナラ属コナラ節 (SI1; No.3) a: 木口, b: 年目, c: 年目

各写真のスケールは0.1mm

第2図 富沢遺跡出土炭化材の顕微鏡写真

配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状となる。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと同複放射組織とがある。

4. 考察

炭化材が出土したSI1は竪穴遺構と考えられている。炭化材(No.3)の周辺では炭化物や焼土も認められるが、炭化材の用途・機能の詳細は不明である。

炭化材は、広葉樹のコナラ節に同定された。コナラ節は、日本に4種(コナラ、ミズナラ、カシワ、ナラガシワ)が分布する。本地域では、二次林の主要な構成種であるコナラが広く分布している。コナラ節の木材は、いずれも落葉高木であり、木材は重硬で強度が高い。

炭化材は、年代測定と暦年較正の結果から、9～10世紀の年代が想定される。伊東・山田(2012)のデータベースによれば、富沢遺跡では、第5次・第7次調査の古墳時代末期～平安時代とされる杭や木片、第13次調査の平安時代とされる杭、第79次調査の平安時代とされる杭等にコナラ節が報告されている。とくに、第13次調査では、コナラ節が杭に多数確認されている。杭に利用されている状況から、富沢遺跡周辺にコナラ節が生育しており、木材の入手が比較的容易であったことが推定される。今回の結果についても遺跡周辺に生育していたコナラ節の木材を利用したことが推定される。

文献

- 林昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集, 京都大学木質科学研究所。
 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ, 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181。
 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ, 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176。
 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ, 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201。
 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ, 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166。
 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ, 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216。
 伊東隆夫・山田昌久(編), 2012, 木の考古学 出土木製品用材データベース, 海青社, 444p。
 Richter H.G., Gresser D., Heinzl I. and Gasson P.E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘(日本語監修), 海青社, 70p。
 島地謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織, 地球社, 176p。
 Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三(日本語監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification]

第7章 総括

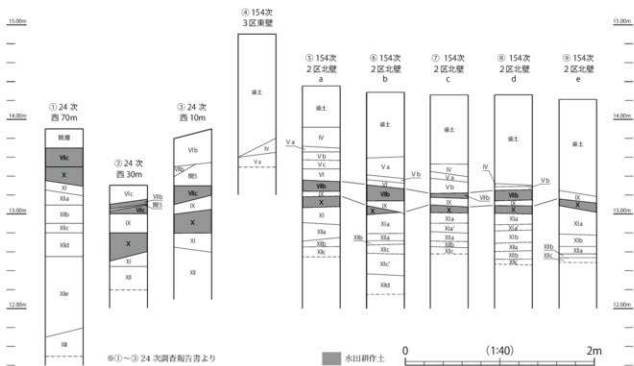
第1節 24次調査区との基本層序の関係

前回の24次調査区南側のうち、154次調査2区北壁西端から東西方向に軸線をあわせて、それぞれ西へ①70m、②30m、③10m延長した3地点と、154次調査3区1地点、2区北壁から抽出した5地点で基本土層の柱状模式図(第48図)を作製し、基本層序の関係について、古墳時代の水田跡が確認されたⅦ層と弥生時代の水田跡の確認されたⅩ層を中心にそれぞれ比較検討してみたい。

24次調査区の3地点をみると、中間の②地点で、Ⅶ・Ⅹ層共に西側①地点に比べて40cm～70cm低く、東側の③地点よりも低くなることからこの部分ではやや窪んだような地形を呈しているが、全体としては北西から南東方向に向かった緩やかな傾斜があることが窺える。

154次調査区も同様に北西から南東方向に向かって緩やかに傾斜しているが、作図した⑤～⑥地点では、Ⅶ・Ⅹ層上面の標高変化はあまり顕著ではない。水田跡は確認された畦畔や水田区画の状況から、地形の変化に合わせてほぼ東西方向を基調とした小区画水田が造られている。

調査区南側は弥生時代から古墳時代に至るまで常に河川流域の変化による影響を受けているものの、古代以降河川が離れた時期には居住域として利用されたことが窺える。

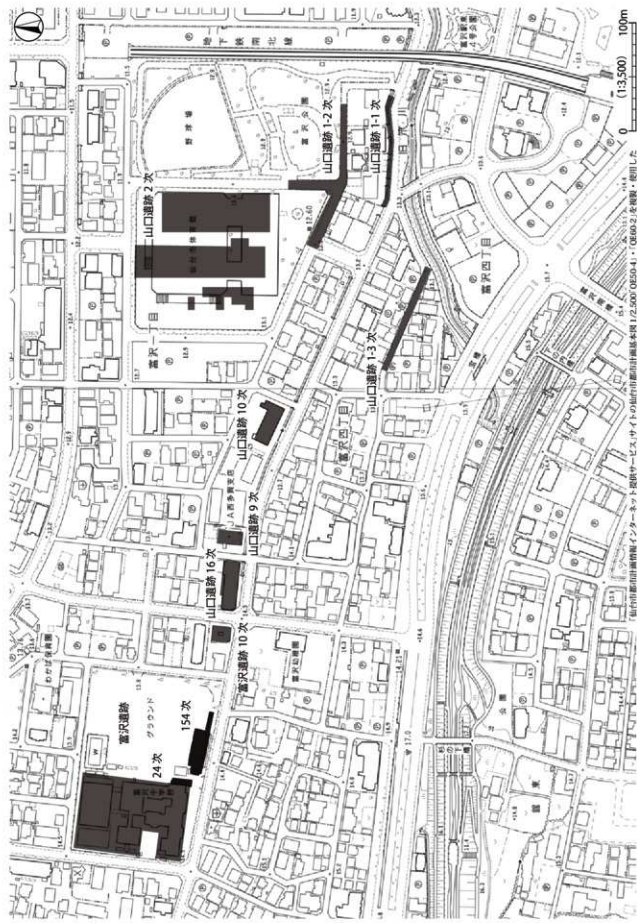


第48図 24次・154次調査基本層序柱状模式図

第2節 河川跡について

河川跡と地理的環境

24次調査報告書で報告されているように、富沢中学校の位置は北西側にある青葉山丘陵の谷口の一つである金洗沢が形成した扇状地の末端部と、南を流れる芥川が形成した自然堤防北側の後背湿地という地理的特性を備えた地点として捉えられる(第49・50図)。



第49図 富沢通・山口通調査区位置図
「富沢通」は、富沢通1-1次、1-2次、9次、10次、13次、16次、24次、154次の各調査区を指す。また、富沢通1-1次、1-2次、9次、10次、13次、16次、24次、154次の各調査区は、富沢通1-1次、1-2次、9次、10次、13次、16次、24次、154次の各調査区に該当する。

航空写真や地形図の判読からも、富沢遺跡帯は広瀬川や名取川に関連するような大きな河川跡は観察されず、西方にある丘陵から流れ出て荒川に流入する小河川(二ツ沢、金洗沢、金剛沢)に関連するような埋没河川跡(旧河道)がいくつか観察されている。

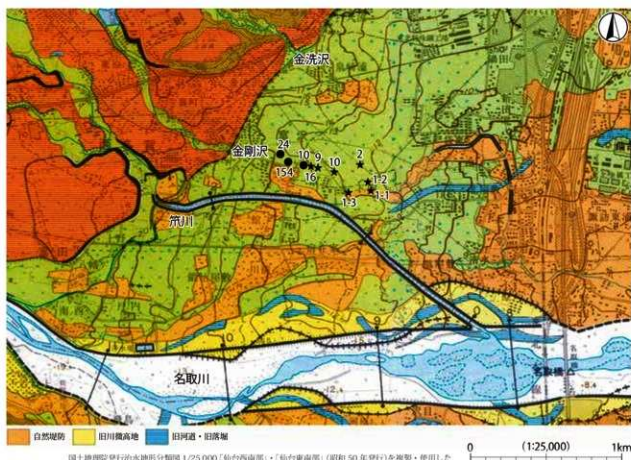
今回の発掘調査で確認された河川跡と同じような小規模な河川跡は、東に隣接する山口遺跡の9次・16次・1次・2次調査でも複数確認されており、弥生時代から古代にかけて流路を変えながら、荒川の自然堤防北縁に沿ってほぼ同じ場所を東流しているようである(第50図)。そしてこれらの河川跡の北側低湿地には、弥生時代から水田が継続して造られ耕作域として利用されている。

河川跡の確認

河川跡は2区V層上面での遺構確認作業中に、南西から北東方向に延びる河川跡(SR2)と思われる堆積土(砂層)を確認したが、この段階ではプランが明確ではなかった(写真図版4)。調査区東端にこれとは別の河川跡(SR1)のプランを確認し、この河川跡のほうが新しいと判断しV層上面の遺構として調査した。その後V層を掘り下げる段階で、基本層と河川跡(SR2)堆積土の関係を断面として確認できるように東西2本の土層観察ベルトを設定し作業を開始した。その結果、V層下部からVII層に至るまでに平面と断面の両方で河川跡プランを確認し、さらに堆積土の観察から複数の河川跡の存在が想定できた。遺構確認面との関係では、河川跡(SR2)はV層掘り下げ中に確認できたものの、VIIb層の水田跡を壊していることからVIIb層遺構として報告した。

河川跡の堆積状況

SR1は、2区東壁や1区北壁の堆積状況を見るといわゆるレンズ状堆積を呈しており、この部分で大きく蛇行しているような状況から、比較的安定した緩やかな水流だったことが窺える。これに対してSR2の堆積状況を見ると、



第50図 治水地形分類図

東・西ベルトでは堆積土がSR2A・2B・2C共に細かく分層され、シルト層や砂層、砂礫層が混合しており、それぞれの層が起伏を持って堆積している。このことから比較的曲流することなく流れていたが水流が安定せず流量にも変化があったことが窺える。

河川跡の新旧関係

確認した河川跡は、2区東側で確認できた重複状況からSR1とSR2に分けられ、SR2については堆積土観察用に残した東西2箇所のベルト壁面の観察から3期変遷の可能性を考えた。

SR1・2の新旧関係については、2区東壁面での堆積状況からもSR1のほうがSR2よりも新しい。また同じ東壁の南側では、SR1に削平されずに残るSR2の堆積土上部に基本層であるV・a・b層があり、堆積土の方向がやや南東方向に傾斜している(第19図)。また断面図はないが、堆積土上層に灰白色火山灰が厚く混入していたことなどから、これをSR2Aとした(写真図版13)。

これとは異なり東壁の北側は、SR1によってSR2の上部は大きく削平されていたが、SR2の北岸を確認した。河川端部のためか堆積土は基本層を巻き込んで細かく分層でき、この部分をSR2Cとした(第19図)。

SR2の新旧関係については、SR2Aの堆積土上層に10世紀前半(915年)に降下したとされる十和田A火山灰(灰白色火山灰)が含まれることや、SR2Bから採取した試料の年代測定結果が7世紀中頃から8世紀後半であったことからSR2Aが新しいことに矛盾はない。また、SR2埋没後に造られたSI1からは9世紀末から10世紀後半の年代測定結果が得られており、これもSR2との新旧関係と矛盾しない。

東西2本のベルト壁面の観察から、SR2A・SR2B・SR2Cに分離したが、SR2BとSR2Cについては同一の河川跡の可能性も考えられることから、3期変遷ではなく2期変遷となる可能性もある(第30図)。

第3節 富沢遺跡と山口遺跡から出土した墨書土器

154次調査ではSR2A河川跡の砂礫層(29層)から体部外面から底部外面にかけて墨書がある須恵器環が出土している(第32図-10・E-9)。この須恵器は焼成不良で口縁部から体部の一部が破損しており、体部下部には判読不能な文字が、底部には「仁」が連続的に書かれている。文字は楷書体で、文字の線も太く、筆払いや止めも丁寧に書かれている。この墨書土器の文字を鑑定した国立歴史民俗博物館の三上善孝教授から、文字の位置から3文字で、「□□仁」と書かれていた可能性があり、地名もしくは人名の可能性があるとのご教示をいただいた。また体部から底部にかけて文字が書かれていることについて、9世紀半ば以降の墨書は体部に書かれることが多いが、この

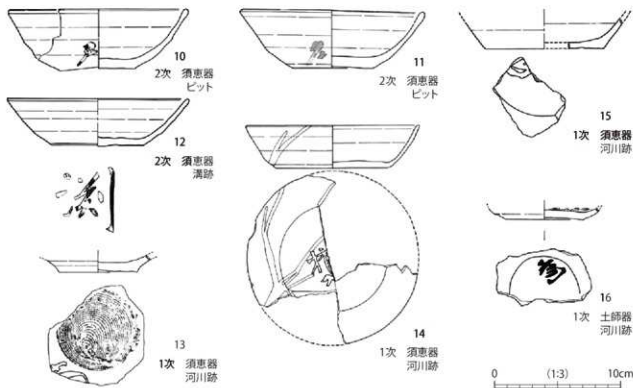
第5表 富沢遺跡・山口遺跡墨書土器一覧表

No.	遺跡名	調査回数	出土遺構	時期	種別	器種	記録部位	記録方向	釈文
1	富沢遺跡	154次	河川跡	9世紀前期	須恵器	環	体部外面→底部外面	正位	□仁
2	富沢遺跡	7次	水田跡	平安時代	須恵器	杯	体部外面		□
3	富沢遺跡	15次	Ⅱ区・池原	平安時代(灰白色火(灰)降下以降)	須恵器	環	底部外面		□
4	富沢遺跡	86次	水田跡	平安時代(灰白色火(灰)降下以前)	須恵器	杯	体部外面		□
5	富沢遺跡	35次	水田跡	9世紀後期～10世紀中期	須恵器	杯	体部外面、底部外面	正位	正(□内方)・正
6	富沢遺跡	35次	水田跡	9世紀後期～10世紀中期	須恵器	杯	体部外面		□
7	富沢遺跡	30次	Ⅳ・ⅤE・6・7層	10世紀	須恵器	杯	体部外面	正位	□(内方)
8	富沢遺跡	89次	溝状落ち込み	9世紀前期～10世紀前期	土師器	杯	体部外面	横位	側部
9	富沢遺跡	47次	水田跡	平安時代(10世紀前半以降)	赤埴土器	杯	体部外面	正位	大上
10	山口遺跡	2次	ピット	平安時代	須恵器	杯	体部外面	正位	□(内方)
11	山口遺跡	2次	ピット	平安時代	須恵器	杯	体部外面	正位	□(内方)
12	山口遺跡	2次	溝跡	奈良時代	須恵器	杯	底部外面		側
13	山口遺跡	1次	河川跡	平安時代	須恵器	杯	体部外面	正位?	□
14	山口遺跡	1次	河川跡	平安時代	須恵器	杯	底部外面		□
15	山口遺跡	1次	河川跡	平安時代	須恵器	杯	底部外面		□
16	山口遺跡	1次	河川跡	平安時代	土師器	杯	底部外面		物

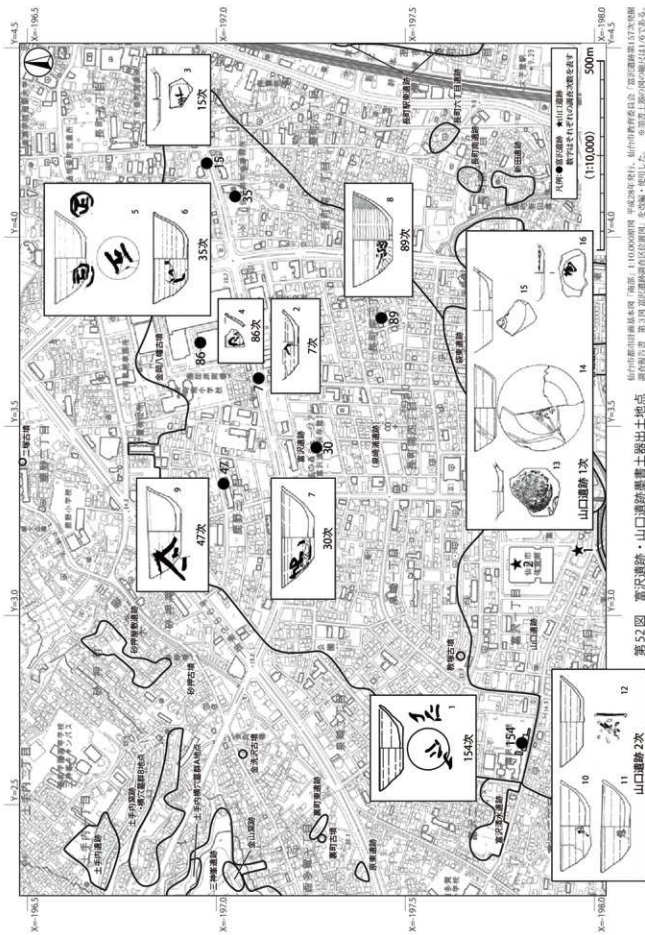
富沢遺跡



山口遺跡



第51図 富沢遺跡・山口遺跡墨書土器集成図



第52図 富沢遺跡・山口遺跡墨書土器出土地点

墨書土器の出土位置は本稿「富沢」1:10,000図面「平成28年発行」及び山形教育委員会「富沢遺跡」1:5万図面
 墨書土器の出土位置は本稿「山口」1:10,000図面「平成28年発行」及び山形教育委員会「山口遺跡」1:5万図面
 墨書土器の出土位置は本稿「山口」1:10,000図面「平成28年発行」及び山形教育委員会「山口遺跡」1:5万図面

土器に記された文字は、土器の体部に文字が取り切れず底部にまで文字が書かれたとご教示いただいた。

富沢遺跡と山口遺跡では、これまでの発掘調査で16点の墨書土器が出土している(第51・52図、第5表)[※]。内訳は富沢遺跡が9点、山口遺跡が7点で、器種は須恵器杯が多く、富沢遺跡で7点、山口遺跡6点である。全て土器の外面に文字が書かれており、記名部位の箇所を見ると底部は5点(第51図3・13～16)、体部は8点(第51図2・4・6～11)、体部と底部は2点(第51図1・5)である。第51図12は8世紀(奈良時代)の須恵器で、それ以外の土器は平安時代以降の土器である。文字として判読できるのは富沢遺跡で5点、山口遺跡は4点である。文字は1文字が6点、2文字以上が3点である。出土文字には役所や寺院に関連する文字の出土は見られず、文字の種類は不規則である。墨書の書体について、第51図12の書体は行書体で文字の線が細い。第51図16も行書体で、第51図12と比べると文字の線が太い。第51図1と同じ楷書体は第51図5・9である。第51図1・9は文字の線が太く、止めもはっきりと書かれている。第51図5は「正」という文字が体部と底部に書かれており、文字の線が太い。第51図7・8は字形が崩れた文字であり、第51図7の「性」の文字は本来止めるところを上方向にはねる筆遣いが見られる。

富沢遺跡と山口遺跡から出土した墨書土器の判読可能な文字を見ると、第51図1の「□仁」と第51図8の「岡部」は地名や人名、部姓の可能性があるが、それ以外は書かれている文字のみで意味を判別することが難しいものが多い。また、第51図5や7の文字のように文字の形や筆遣いを見ると、文字を真似て書いたと推測できる字体もあり、「文字」を認識して書いたものよりも「記号」として書かれたものと推測できるものもある。

墨書土器の出土地点について、富沢遺跡では遺跡の北部がやや多く、出土した遺構は水田跡が多い。山口遺跡では第51図10・11以外は河川跡から出土しており、今回の調査で出土した第51図1も河川跡(SR2A)から出土している。第2節でも触れているが今回の調査地点や山口遺跡で見つかった河川跡は丘陵地から東の方向へ向かって流れている。第51図1の土器には摩滅は見られず、上流から流れてきたものではなく近隣で廃棄したものと思われる。また口縁部などには顕著な使用痕は見られず、日常的に使い込まれた食膳具の様相はみられない。

集落で出土する墨書土器には祭祀や儀礼行為と強く関わるものという見解(平川2000、高島2000)が従来考えられていたが、山形県古志田遺跡の墨書土器の分析のように「遺跡の主が徴発した人々に対して給食活動を行った際の土器群」(荒木2001)や「農繁期労働とそれに伴う飲食儀礼・饗宴」(三上2023)という見解が出されている。富沢遺跡と山口遺跡の出土墨書土器は平川氏が祭祀との関わりを論証した多文字墨書土器とは異なるため、祭祀や儀礼行為に伴うものではないと考えられる。農繁期労働の飲食儀礼・饗宴の見解から考えると、古志田遺跡のように饗宴後に河川跡などに一括廃棄された出土例が多い。しかし、富沢遺跡や山口遺跡の出土状況等は飲食儀礼・饗宴後に個別に河川跡や水田跡に廃棄された可能性が考えられるだろう。富沢遺跡154次調査で検出したSR2Aの遺物の出土平面図や垂直分布図を見ると墨書土器以外のクロコ土器器杯や須恵器杯等が一括廃棄されたとは考えにくい。また、富沢遺跡は水田跡の遺跡であるため、出土した墨書土器と水田耕作の農繁期労働の飲食儀礼・饗宴との関連性が推測できる。水田跡やその周辺の河川跡から点的に出土する墨書土器について、墨書土器の廃棄という面で検討する必要があるだろう。

富沢遺跡の南側にある六反田遺跡や大野田古墳群、元袋遺跡などが立地する荒川の自然堤防上ではこれまでの調査で居住域と畑作による生産域が広がっていたことが判明している。これらの遺跡では堅穴住居跡や土坑、河川跡から墨書土器は出土しているが、小溝状遺構など畑作耕作の痕跡からは出土していない。今後富沢地域内の生産域と居住域における墨書土器の性格について検討する必要があるだろう。

[※] 富沢遺跡と山口遺跡から出土した墨書土器の一覧表は明治大学日本古代研究所のサイト「全国墨書土器・刻書土器、文字瓦模断検索データベース」(<https://bokusho-db.mind.meiji.ac.jp/>)の「宮城県出土墨書・刻書土器データベース」を参考に作成した。

第4節 検出された水田跡について

154次調査では水田跡を2面(VIIb層、X層)検出した。今回の調査で検出した水田跡は、同じ富沢中学校敷地内で行われた24次調査で検出した古墳時代(VIIb層)と弥生時代後期(X層)の水田跡に相当する。

VIIb層水田跡では水田面を12区画検出しており、水田区画の基軸となる畦畔は北東-南西方向である。平面形状が長方形や正方形を基調とした小区画で構成されており、水田区画の最大面積は9.5m²である。第53図は水田内の用水の流れ等を示した色別等高線と高低差を矢印で示したVIIb層水田跡図である。区画⑦が水田面の標高が最も高く、その区画から南-北東方向、南-北西方向に向かって標高が低くなっている。VIIb層水田跡の勾配率は1.12%である。

X層水田跡では水田面を9区画検出しており、水田区画の基軸となる大畦畔は北東-南西方向である。平面形状が台形や方形を基調とし小区画で構成されており、最大面積が12.0m²である。VIIb層水田跡と比較すると基軸となる畦畔は東に偏している。第53図を見ると畦畔22・31を基軸に区画⑬・⑭・⑮は北方向に、区画⑯・⑰は南方向に低くなっており、畦畔21・34・33を基軸に区画⑱・⑲は北方向に、区画⑳は南方向に低くなっている。畦畔33と34の間には水口があり、区画㉑から区画㉒に向かって標高が低くなっている。SR2に削平されているためX層水田跡の全容は不明であるが、4つの大区画に分かれていた可能性が考えられる。X層水田跡の勾配率は0.45%である。

水田跡の勾配率でみると、X層水田跡は勾配率が低くほぼ平坦に近い緩やかな傾斜であり、VIIb層水田跡はX層水田跡より傾斜している。24次調査のVIIb層水田跡は谷状の狭い窪地に造られたとあり、今回の調査で検出したVIIb層水田跡の勾配率からも北に向かって低くなる窪地の上に水田跡が造られたと考えられる。24次調査のX層水田跡は全域に造られていたが、大部分が洪水(VIII層)で流失したため畦畔は部分的にしか検出されていなかった。今回の調査区内ではVIII層は確認されておらず、X層水田跡は洪水で削平されていない良好な状態で検出されている。X層水田跡はほぼ平坦に近い緩やかな傾斜地で小区画の水田が造られていたと考えられる。

第5節 まとめ

154次調査では基本層V・VIIb・IX・X・XI・XII層上面で遺構を検出した。今回の調査について、確認層毎に整理しておく。

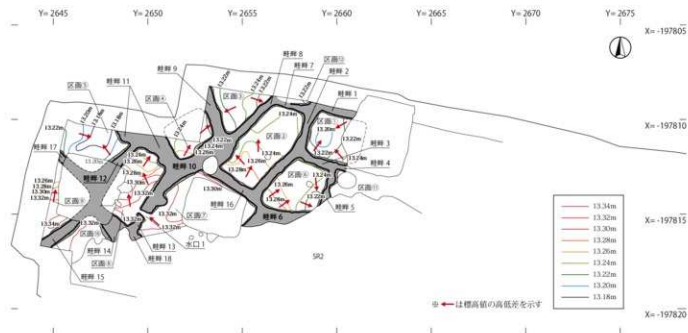
(1) V層上面

V層上面では竪穴遺構1基、溝跡3条、焼土遺構1基、土坑7基、ビット25基、河川跡1条を検出した。2区西側で検出したSI1は竪穴遺構として報告したが、カマドと貯蔵穴と考えられる遺構(SI1-SK1・2)を伴っており、残存状況が悪い竪穴住居跡と考えられる。SI1の北東側で検出された焼土遺構も残存状況が悪い竪穴住居跡のカマドである可能性がある。SI1の時期は出土土器と出土炭化物の年代測定から10世紀頃と考えられる。2区中央では土坑とビットが、東側では溝跡3条と河川跡1条を検出した。SR1は1区と2区東側で部分的に検出されており、調査区の北側から延びており、途中で東側方向を変え蛇行している。V層の調査の結果、この時期は調査区の東側には蛇行している河川跡があり、西側は居住域として利用されたと考えられる。

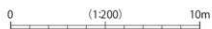
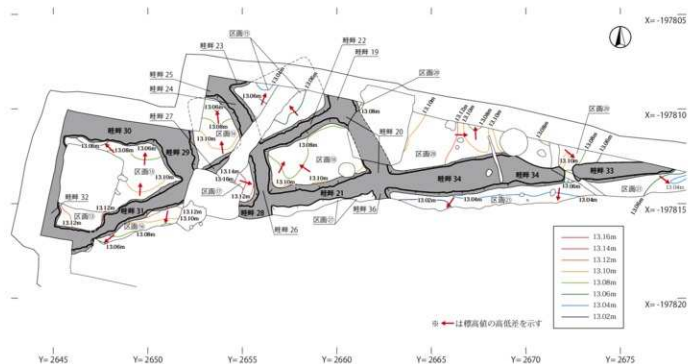
(2) VIIb層上面

VIIb層上面では、水田跡と溝跡5条、土坑5基、ビット15基、河川跡1条を検出した。調査区の南側でSR2の北岸を確認しており、2区の南半分を占めている。2区の北部中央では溝跡や土坑、ビットが、2区の西側では水田跡が確認されており、調査区壁面から水田耕作土が調査区全面に広がっており、水田耕作域として利用されていることが考えられる。SR2はベルトの断面観察から3時期に分かれると考えられる。SR2Aから出土した土器と須恵器は8世紀後半から9世紀の時期、SR2Bから出土した土器と須恵器は7世紀末から8世紀初頭の時期に属している。出土遺物と河川跡の堆積状況、試料の年代測定結果などから、SR2は7世紀末から9世紀には河川として機能

VIIb 層 水田跡



X層 水田跡



第53図 VIIb層・X層水田跡標高図

しており、灰白色火山灰が降下した10世紀前半には水流が途絶え埋没したと考えられる。VII b層水田跡はSR2より古く、24次調査のVII b層水田跡に相当しており、古墳時代の時期と考えられる。

(3) IX層上面

IX層上面では、2区西側で溝跡1条とピット9基を検出した。非水田域として利用されている。

(4) X層上面

X層上面では水田跡とピット3基を検出した。SR2で削平されているが、北東-南西方向の畦畔を基軸とした水田跡が広がっていたと推測され、水田域として利用されている。24次調査のX層水田跡に相当しており、弥生時代後期(天王山式)の時期と考えられる。

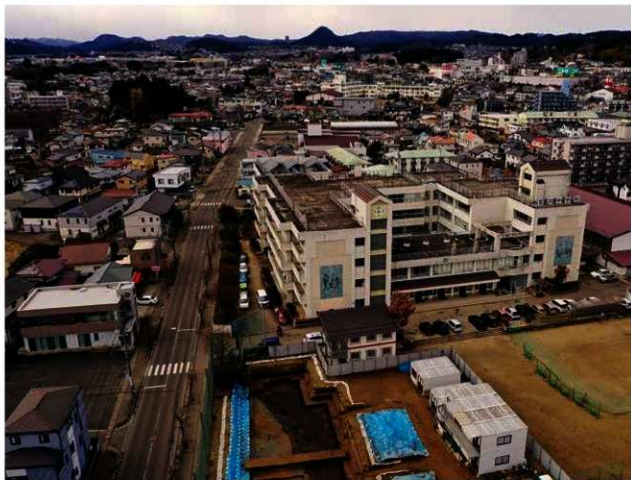
(5) XI層上面・XII c層上面

XI層上面では土坑4基とピット20基を検出した。遺構は2区東側に集中している。XII c層中ではピットを検出した。遺構は少なく、調査区の西側で検出している。XI層からは縄文土器と弥生土器の破片が、XII c層からは縄文土器の破片が出土しているが、詳細な時期を特定できる資料はない。

引用・参考文献

- 荒木志伸 2001 『古志田東遺跡出土の墨書土器』『米沢市埋蔵文化財調査報告書 第73集 古志田東遺跡発掘調査報告書』
- 斎野裕彦 2005 『水田跡の構造と理解』『古代文化』57 財団法人古代学協会
- 仙台市教育委員会 1981 『仙台市文化財調査報告書第33集 山口遺跡発掘調査報告書』
- 仙台市教育委員会 1984 『仙台市文化財調査報告書第61集 山口遺跡Ⅱ-仙台市体育館建設予定地-』
- 仙台市教育委員会 1987 『仙台市文化財調査報告書第98集 富沢 仙台市都市計画道路長町・折立線建設に伴う富沢遺跡第15次発掘調査報告書』
- 仙台市教育委員会 1988 『仙台市文化財調査報告書第113集 富沢遺跡-24次調査富沢中学校地区発掘調査報告書-』
- 仙台市教育委員会 1989 『仙台市文化財調査報告書第126集 富沢遺跡・泉崎浦遺跡-仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告書Ⅰ-』
- 仙台市教育委員会 1989 『仙台市文化財調査報告書第128集 富沢・泉崎浦・山口遺跡-富沢遺跡第36～48次・泉崎浦遺跡第4次・山口遺跡第5～8次発掘調査報告書-』
- 仙台市教育委員会 1991 『仙台市文化財調査報告書第149集 富沢遺跡-第30次発掘調査報告書第1分冊-縄文～近世編-』
- 仙台市教育委員会 1991 『仙台市文化財調査報告書第150集 富沢遺跡-第35次発掘調査報告書-』
- 仙台市教育委員会 1991 『仙台市文化財調査報告書第151集 山口遺跡』
- 仙台市教育委員会 1991 『仙台市文化財調査報告書第152集 富沢・泉崎浦・山口遺跡(3)-富沢遺跡第57～68次・山口遺跡第13・14次発掘調査報告書-』
- 仙台市教育委員会 1995 『仙台市文化財調査報告書第203集 富沢・泉崎浦・山口遺跡(8)-富沢遺跡第88次・89次発掘調査報告書-』
- 仙台市教育委員会 1997 『仙台市文化財調査報告書第220集 富沢・泉崎浦・山口遺跡(10)-富沢遺跡第86次発掘調査報告書-』
- 仙台市教育委員会 2000 『第4編 山口遺跡(第16次調査)』『仙台市文化財調査報告書第247集 五本松堂跡ほか発掘調査報告書』
- 仙台市教育委員会 2010 『仙台市文化財調査報告書第359集 西台畑遺跡第1・2次調査-仙台市あすと長町地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書V-』
- 仙台市教育委員会 2023 『仙台市文化財調査報告書第504集 富沢遺跡-第157次発掘調査報告書-』
- 高島英之 2000 『古代出土文字資料の研究』東京堂出版
- 奈良文化財研究所 2004 『1-4 墨書土器・刻書土器』『古代の官衙遺跡Ⅱ遺物・遺跡編』
- 平川 南 2000 『墨書土器の研究』吉川弘文館
- 三上善孝 2023 『墨書土器とは何か』『墨書土器と文字瓦-出土文字資料の研究-』八木書店

写 真 图 版



富沢遺跡154次調査区から青葉山丘陵・太白山を望む(東から)



調査区全景(X層水田跡検出状況 垂直・北が上)

写真図版1 遺跡遠景・調査区全景(X層水田跡)



柱状図a地点
(南から)



柱状図b地点
(南から)



柱状図c地点
(南から)



柱状図d地点
(南から)



柱状図e地点
(南から)



2区 西壁A中央(東から)



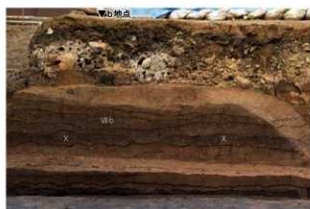
2区 北壁A(南から)



2区 北壁B(東から)



2区 北壁C西半(南から)



2区 北壁C東半(南から)

写真図版2 基本層序(1)



2区 北壁D西半(南から)



2区 北壁D東半(南から)



2区 北壁E西半(南から)



2区 北壁E東半(南から)



2区 西ベルト北半(東から)



2区 東ベルト北半(東から)



2区中央 トレンチ2西壁(東から)



2区 北壁C下層(南から)

写真図版3 基本層序(2)



2区 V層遺構検出(東から)



2区西側 V層遺構検出(北東から)



2区西側・中央 V層遺構検出(北東から)



2区東側 V層遺構検出(北西から)



2区東側 V層遺構完掘(南東から)

写真図版4 2区V層



SI1 完掘(北東から)



SI1 A断面(東から)



SI1 B断面(南から)



SI1 遺物出土(C-1) (東から)



SI1 遺物出土(D-1) (南から)



SI1 遺物出土(E-1) (南東から)



SI1 炭化材出土(南西から)



SI1 白色粘土検出(東から)



SD1～3 完掘(北東から)



SK1 完掘(東から)



SK3 完掘(北東から)



Pit1 遺物出土(C-2) (南から)



Pit1 遺物出土(D-3) (東から)



Pit1 完掘(北から)



Pit67 断面(南から)



Pit67 完掘(南から)

写真図版6 2区V層SD溝跡・SK土坑・ピット



1区 SR1 全景(垂直・北上)



2区 SR1 完掘(西から)



2区 SR1 B断面南半(西から)



2区 SR1 B断面北半(西から)



1区 SR1 C断面(西から)

写真図版7 1区・2区V層SR1河川跡



2区西側 VI b層水田跡確認(南東から)



2区西側 VI b層水田跡検出(南東から)

写真図版8 2区VI b層水田跡(1)



水田区画①・⑥・⑩ 検出(北東から)



水田区画② 検出(北東から)



水田区画③・④ 検出(北東から)



水田区画⑦ 検出(北東から)



水田区画⑤・⑧・⑨・⑩ 検出(北東から)



畦畔10 水口検出(北東から)



畦畔1 断面(南から)



畦畔2 断面(北東から)

写真図版9 2区VIIb層水田跡(2)



畦畔8 断面(南から)



畦畔9 断面(東から)



畦畔10 断面(北東から)



畦畔11 断面(南から)



畦畔12 断面(北東から)



畦畔15 断面(東から)



畦畔16 断面(東から)



畦畔17 断面(東から)

写真図版10 2区VIIb層水田跡(3)



2区中央 VIIb層遺構完掘(南から)



SD4 完掘(南東から)



SD5 完掘(東から)



SK6 完掘(南から)



Pit32 断面(南から)

写真図版11 2区VIIb層SD溝跡・SK土坑・ピット



2区SR2 全景 VIIb層上面(北東から)



SR1・2 断面(2区東壁)(西から)



SR2 断面(西ベルト)(東から)



SR2 断面(東ベルト)(東から)

写真図版12 2区VIIb層SR2河川跡(1)



SR2A 2層 灰白色火山灰検出(西から)



SR2B 遺物出土(C-9) (西から)



SR2A 遺物出土(E-7) (南から)



SR2A 遺物出土(E-9) (南から)



SR2A 遺物出土(E-11) (東から)



SR2A 遺物出土(E-12) (南から)



SR2A 遺物出土(E-15) (東から)



SR2B 遺物出土(E-20) (南東から)



2区西側 IX層遺構完掘(南東から)



SD10 完掘(南西から)



SD10 断面(北東から)



Pir46 完掘(南から)



2区 X層水田跡確認(垂直・北が上)



2区 X層水田跡検出(垂直・北が上)

写真図版15 2区X層水田跡(1)



2区西側 X層水田区画確認(垂直・北が上)



2区中央 X層水田区画確認(垂直・北が上)



2区 西ベルト X層畦畔34確認(西から)



2区 東ベルト X層畦畔33確認(北から)



水田区画⑬ 検出(北西から)



水田区画⑬・⑭ 検出(北東から)



水田区画⑰ 検出(南から)



水田区画⑱ 検出(北東から)

写真図版 16 2区X層水田跡(2)



水田区画②・③検出(北から)



畦畔33 検出(北西から)



畦畔19 断面(南から)



畦畔20 断面(北から)



畦畔22 断面(東から)



畦畔23 断面(南から)



畦畔24 断面(南から)



畦畔25 断面(東から)



畦畔26 断面(南から)



畦畔29 断面(南から)



畦畔31 断面(東から)



畦畔32 断面(東から)



畦畔33 断面1(南から)



畦畔33 断面2(東から)



畦畔34 断面1(東から)



畦畔34 断面2(東から)



2区中央 XI層遺構完掘(南から)



2区東側 XI層遺構完掘(南から)

写真図版 19 2区XI層



2区 XIIc層遺構完掘(垂直・北が上)



1区 V層遺構完掘(西から)



1区 北壁(南から)

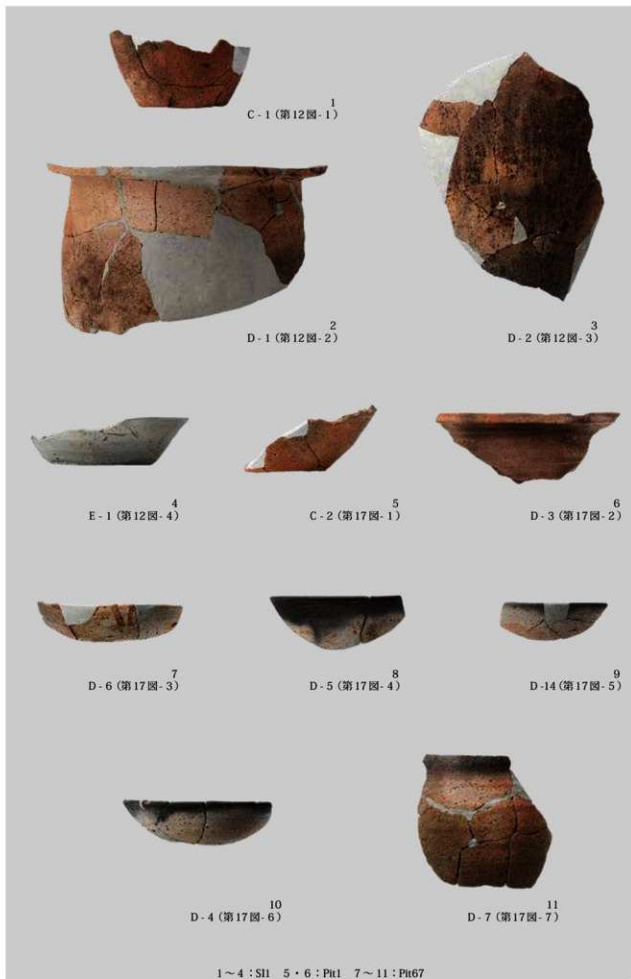


1区 南壁(北から)



3区 V層検出(北から)

写真図版20 1区・2区XIIc層・3区



写真図版21 SI1 竪穴遺構、Pit1・67出土遺物



1
C-4 (第20図-1)



2
C-3 (第20図-2)



3
D-8 (第20図-3)



4
E-17 (第20図-4)



5
E-2 (第20図-5)



6
E-3 (第20図-6)



7
P-1 (第20図-7)
※S=2/3



8
C-8 (第21図-1)



9
C-11 (第21図-2)



10
D-11 (第21図-3)



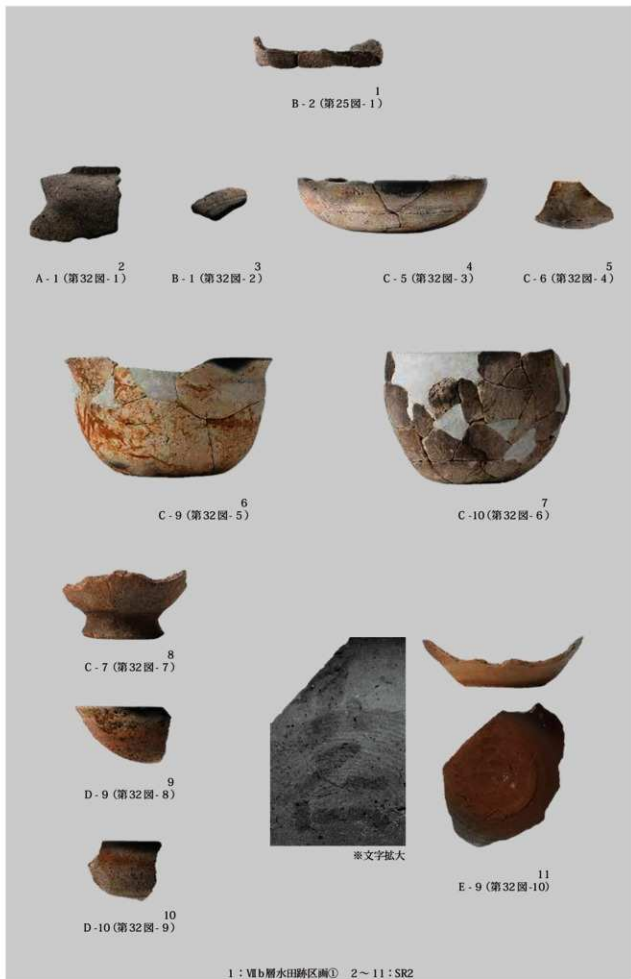
11
D-12 (第21図-4)



12
D-13 (第21図-5)

1～7:SR1 8～12:V層

写真図版22 SR1河川跡、V層出土遺物



写真図版23 VIIb層水田跡、SR2河川跡(1)出土遺物



1
E - 4 (第33圖-11)



2
E - 15 (第33圖-12)



3
E - 7 (第33圖-13)



4
E - 6 (第33圖-14)



5
E - 12 (第33圖-15)



6
E - 13 (第33圖-16)



7
E - 14 (第33圖-17)



8
E - 11 (第33圖-18)



9
E - 10 (第33圖-19)



10
E - 5 (第33圖-20)



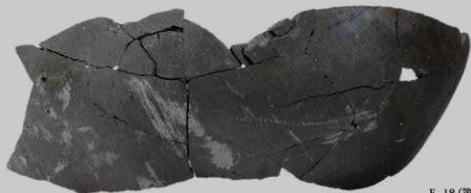
11
E - 8 (第34圖-21)



12
E - 19 (第34圖-22)

1 ~ 12 : SR2

写真図版 24 SR2河川跡(2)出土遺物



1
E-18 (第34图-23)



2
E-20 (第34图-24)



3
E-16 (第35图-25)



4
Ka-1 (第35图-26)
※S=2/3



5
Kc-1 (第35图-27)



6
B-5 (掉団在L)
※S=1/1



7
B-4 (第41图-1)



8
B-3 (第41图-2)



9
A-2 (第46图-1)

1~5: SR2 6: IX層 7・8: X層水田跡区陶砂 9: XIIc層

写真図版25 SR2河川跡(3)、IX層、X層水田跡、XIIc層出土遺物

報告書抄録

ふりがな	とみざわいせき							
書名	富沢遺跡							
副書名	—第154次発掘調査報告書—							
巻次								
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第510集							
編著者名	庄子裕美、柳澤楓、工藤信一郎、石川博行、桑宮慶一							
編集機関	仙台市教育委員会							
所在地	〒980-0011 宮城県仙台市青葉区上杉1丁目5番12号 仙台市役所 上杉分庁舎10階 電話 022 (214) 8899 (文化財課)							
発行年月	2023年10月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とみざわいせき 富沢遺跡	みやぎけんせんたいし 宮城県仙台市 たいほくくとみざわ 太白区富沢 2丁目201	04104	01369	38° 13' 04"	140° 51' 49"	2022/06/01 ～ 2023/01/19 2023/03/20	783.53	記録保存 調査 (学校校舎 増築工事)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
富沢遺跡	散布地 生産域 集落域	縄文時代 弥生時代 古墳時代 古代	水田跡 竪穴遺構・溝跡・焼土遺構・ 土坑・ピット・河川跡		縄文土器・石器 弥生土器 土師器・ロクロ 土師器・須恵器・ 土製品	河川跡 (SR2) から 9世紀代の墨書土器 が出土した。体部から 底面に「□仁」が 記されている。		
要約	<p>富沢遺跡は、名取川と広瀬川によって形成された沖積平野の後背湿地上に立地している。昭和57年から発掘調査が行われており、弥生時代以降の水田跡が重層的に検出されているほか、縄文時代及び旧石器時代の遺構・遺物も確認されている。</p> <p>今回の調査地点は富沢遺跡の南西部に位置しており、2面の水田跡と竪穴遺構、河川跡などを検出した。同じ敷地内の24次調査との比較から古墳時代(VIIb層)と弥生時代後期(X層)の水田跡と考えられる。洪水による砂層(VIII層)が確認されず、X層水田跡は24次調査の水田跡より良好な状態で検出した。</p> <p>V層とVIIb層上面では河川跡が検出されている。24次調査や隣接する山口遺跡でも同様の河川跡が複数確認されており、弥生時代から古代にかけて流れを変えながら荒川の自然堤防北縁に沿って河川跡が流れていたと考えられる。</p> <p>またV層上面では竪穴遺構が検出されており、本調査地点が時期によっては水田跡ではなく、居住域としても利用されていたことを確認した。</p>							

仙台市文化財調査報告書第510集

富 沢 遺 跡

—第154次発掘調査報告書—

2023年10月

発 行 仙 台 市 教 育 委 員 会

〒980-0011 宮城県仙台市青葉区上杉1丁目
5番12号 上杉分庁舎10階
TEL.022-214-8899 (文化財課)

印 刷 株 式 会 社 仙 台 紙 工 印 刷

〒983-0036 宮城県仙台市宮城野区苦竹3丁目1-14
TEL.022-231-2245
